

岩波文庫

4690—4692

永遠の春

ドストエーフスキイ作
神西清譯

岩波書店

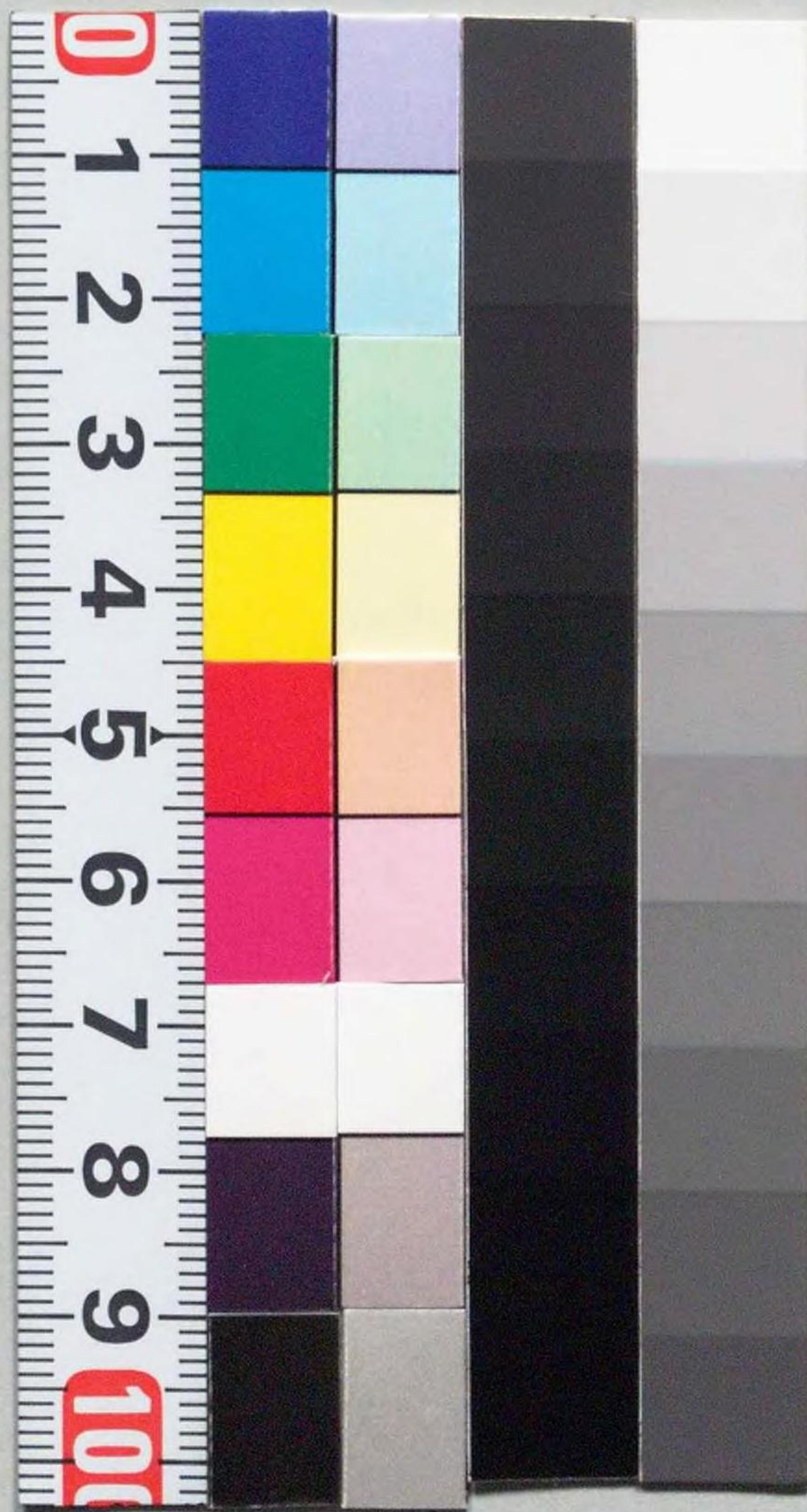
983

cD72e

Z



00277678



岩波文庫

4690—4692

永遠の夫

ドストエーフスキイ作
神西清譯



岩波書店

983.D72e Z

目次

一	ヴェリチャリーノフ	二七
二	帽子に喪章をつけた紳士	二七
三	パーヴェル・パーヴロヴィチ・トルーソツキイ	二七
四	妻と夫と情夫	二七
五	リーザ	二七
六	閑人の新らしい妄想	二七
七	夫と情夫が接吻し合う	二七
八	リーザの病氣	二七
九	幽霊	二七
十	墓地で	二七
十一	パーヴェル・パーヴロヴィチの結婚	二七
十二	ザフレイベニンの家で	二七
十三	どっちが重いか	二七
十四	サーシエンカとナーヂェンカ	二七



277678

十五	總勘定	二五四
十六	分析	二七〇
十七	永遠の夫	二七
	解説	三〇五

永遠の夫おつと

ヴェリチャーニノフ

夏が来たというのに、ヴェリチャーニノフは案に相違して、ペテルブルグに踏みとどまることになった。南ロシアの旅もおじやんになったばかりか、事件はいつ片づくとも見えない始末だった。事件というのは領地に關する訴訟だったが、風向きはすこぶる思わしくなかった。つい三日ほど前までは、とても單純で、ほとんど議論の餘地もないものに見えていたのだが、どうかした拍子にがらりと雲行きが變つてしまつたのである。

『おまけにどうも、何もかも悪いほうへ變りだしやがつて！』

とそんな文句を、ヴェリチャーニノフはさも忌々しそうに、よく獨り言にくり返すようになった。彼は腕利きの、報酬の高い、有名な辯護士をやとつて、費用の點は少しも惜しまなかつた。それでも、やはりもどかしく、信用の置けない氣持がして、自分までが事件に首をつっこむようになった。つまり書類を読む、自分でも書く、そして大抵は辯護士の手で屠籠へ捨てられる。また裁判所から裁判所へ駈けずり廻つてみたり、調査を試みたりするのだった。おそらくこれが、よほど事件の運びの邪魔になつたのである。少なくとも辯護士は苦情を鳴らして、彼を別荘へ敬遠しようとした。ところが彼のほうでは、別荘へ行くだけの決心さえつき兼ねたのである。ほこりっぽさ、蒸暑さ、神経をいらだたせるあのペテルブルグの白夜、——そうしたものを、彼は

ペテルブルグで満喫していたわけなのだ。彼のアパートは^{ホリショイ・テアトル}大劇場の近所にあつて、ついこのあいだ借りたばかりだったが、これも同じく失敗だった。まったく彼の言い草じゃないが、『何もかも巧く行かん！』なのである。彼のヒポコンデリーは、日ましにひどくなるばかりだった。とはいえこのヒポコンデリーの兆候は、だいぶ前からあるにはあつたのである。

彼は世間をひろく渡つて、いろいろなことを見てきた男である。もはや決して若いとはいへぬ、三十八か、ひよつとしたら九にもなるうという年配だが、そもそもこの『老年』という奴は、彼自身の言い草によると、『まるで抜き打ちに』彼を襲つたのだった。しかも彼自身の解するところにしたがえば、彼が古いこんだのは年齢の量によるといふよりは、むしろ言つてみればその質によるものなので、もしすでに老衰がはじまつているものとすれば、それは外部からよりも却つて内部からなのであつた。うち見たところ、彼は今なお血氣壯んであつた。背の高い、堂々たる恰幅の男で、髪の毛は淡色で房々として、頭の毛にも、またほとんど胸の半ばにとどきそうな亜麻色の長い髻にも、白毛なんぞはただの一筋だつてなかつた。ちよいと見ると、どこか少し間のびのした、だらしない男に見える。だが、もつと眼をこらして眺めると、諸君はたちどころに、昔は最高の上流社會の子弟として教育を受けたことのある、育ちのいい一人の紳士を、彼のうちに見いだされるだろう。わざと氣むずかしげな、のろくさした態度を身につけてはいたものの、彼の物腰はいまだに潤達で、きびきびしているばかりか、優美でさえあつた。そして、今になつてもまだ彼は、非常に根づよい、上流社會によく見られる例の不遜なまでの自負心に満ちていた

が、その程度たるや、單に賢明なだけではなく時としては俊敏ですらあり、まず申しぶんない教養と、疑うべからざる才能とを具えているさすがの彼にしても、自身まさかそれほどとは思つていなかったに相違ない。さばさばして、ほんのりと紅味のさした顔の色つやは、そのむかしは女のような優しさをたたえて、婦人れんの目を引いたものだつたが、今でもやっぱり彼を一目見て、『なんて健康そうな人だろう、櫻色とはこのことだ！』と言う人もある。とはいへ、この『健康そうな』せつかくの男ぶりも、ヒポコンデリーのため散々に害なわれていた。ぱつちりした眼は空色をしていて、十年ほど前には、やはりすこぶる魅力があつた。それはじつに明るい、じつに愉しげな、苦勞のなさそうな眼で、出會いがしらに誰でも、思わず知らず引き入れられてしまふほどだつた。それが、やがて四十の聲を聞かうという今日になつては、すでに小皺に圍まれてゐるその眼に、明るさも善良な色もほとんど消え失せてしまつたばかりか、逆にあまり品行の芳ばしからぬ消耗した人間によく見られる冷笑癖や狡猾さが、あらわれていた。なかでも一ばん頻繁にあらわれるのは嘲笑の色であり、そのうえ以前にはなかつた新らしい陰影までが添わつてきた。それは悲哀と苦痛の影——そこはかとないうでいて、そのじつははげしい、一種放心したような悲哀の影であつた。一人でいるような時には、とりわけこの悲哀が色濃くあらわれた。そしてこれは妙な話だが、つい二年ほど前までは騒々しくつて陽氣で浮き浮きした性質で、おどけた話をするのがあんなに得意だつたこの男が、今ではまったくの孤獨ほどに好きなものはないのであつた。彼は大ぜいの知人をわざわざ振り捨てた。それは、自分の財政状態がめちやめちやに

なつてしまった今日なお、決して振り捨てるには及ばない人たちだった。もつともそれは、虚榮心も手傳つたので、つまり彼のような猜疑心も深く虚榮心も強い男は、今までの知人たちとつき合つては行けなかつたのである。しかもまたこの虚榮心までが、孤獨な生活のなかで次第に形を變えだしていた。それは弱まるどころか、却つて逆ですらあつたが、とにかくそれは、むかしは見られなかつた一種特別な虚榮心に變化しはじめたのである。というのはつまり、彼の虚榮心は時おり、従来よくあつた動機とはまったく打つて變つた動機のために、傷つけられたのであつた。——それは意想外な、むかしなら夢にも思ひよらなかつたような動機、今までのにくらべれば『一そう高尚な』動機であつた。『ただし、もしそう言えるならばさ。もし本當に、高尚な動機とか低級な動機とかいうものが、あるならばさ……』これは彼自身の付け加えた言葉である。

じつに彼は、そこまで行き着いてしまつたのである。むかしなら氣にもかけなかつたに相違ない何ものか高尚な動機と、今では闘つているのである。彼は（われながら意外千萬にも）、内心どうしても笑い飛ばしてしまへぬ『動機』は一切、自分の意識と良心の聲にしたがつて、高尚な動機と名づけていた。内心笑い飛ばせないなどということは、いまだ曾てなかつたことなのである。ただし言うまでもなく、それは内心での話なので、人なかなると話はぜんぜん別である。彼は自分でよく心得ていた——然るべき事態に立ち到りさえすれば、あすの日にも彼は、みずからの良心の神祕的かつ敬虔な判断をあえて無視して、大ぴらに、しかも極めて平然と、それら一切の『高尚な動機』などというものの存在を否定するだろうし、また自分が先頭に立って、もち

ろん身に覺えがあるなどという素振りも鵜の毛ほども見せず、それらの動機を笑い飛ばすであろうことを。そして、これまで彼を支配していた『いろんな低級な動機』を克服して、彼は近ごろではある程度の、いや、むしろすこぶる著しいほどの思想の獨自性をかちえていたにもかかわらず、實狀はまさに右に述べたとおりだつたのだ。それに實際、朝の寢床を起き出ながら彼が、その夜の不眠のあいだに訪れたわれとわが思念や感情を、恥かしく思ひはじめたことも幾度だつたか知れたものではないのである。（ときに彼は、このごろはずつと不眠症に悩んでいた。）自分が、大切なことにも些細なことにも、一切について極度に猜疑深くなつてきたことは、彼ももうよほど以前から氣がついていて、だからできるだけ自分を信用せずにいるに限る、と思つていた。がしかし、もはやどうしても實在するものと認めないわけには行かない事實が、生じつつあつた。最近では時とすると夜ふけに、彼の思念や感覺が平生にくらべてほとんど一變してしまふことがあるし、しかもその大部分は、その日の前半に彼を訪れていたものとは、似てもつかぬものであつた。これには彼もギョツとして、かねて知合いの仲ではあつたが、とにかく有名な醫者に、相談をもちかけたことさえあつた。もちろん冗談にまぎらして口を切つたのである。ところが相手の返事はこうだつた——夜間不眠の際とか、または一般に夜間に、思念や感覺が變化をきたすという事實、さらには二つに分裂をきたすという事實は、『はげしく物を考えたり激しく物を感じたりする』人々にあつては、ひろく認められる事實である。一生がい變らずにきた信念でさえ、夜陰と不眠のメラノロリツクな影響のもとでは、時として急變をきたす例もある。つまり

突如として、わけもいわれもなしに、最も致命的な決断をとってしまったのである。しかし言うまでもなく、これはすべてある程度にとどまるものであるけれど、もし本人が自己の分裂を感じる度合いが過度になっており、ために苦痛を感じるまでに至っているとすれば、それはもはや疾病の域に進みつつある立派な兆候なのであるから、ただちに何らかの方法を講じなければならぬ。最もいい方法は生活を根本から變えること、食餌を變えること、またはいっそのこと旅行に出ることである。下劑もむろん有効である、云々。

ヴェリチャーニノフは、その先の言葉には耳を借そうともしなかつた。もうそれだけで、自分が病氣だということは、完全に證據だてられたのである。

「してみると、あれはみんな病氣なのだ。あの『高尚な』動機という奴は、みんなただの病氣に過ぎないんだ！」

と、彼は時おり獨りごとに、さも忌々しげに叫ぶのであつた。そんな考えを受け入れることは、じつにやりきれない思いだつた。

ところが間もなく、これまで夜のまに限つておこつたのと同じことが、朝になつてからもくり返されるようになった。違う點といえば、夜よりも苦痛の度合いが強いこと、そして悔恨の代りに怨恨を、感動の代りに嘲笑を伴なつてゐることである。實際のところそれは、日とともにますます頻繁に、しかも『不意に、なんの理由もなしに』彼の記憶にのぼりはじめた彼の過去の、それも遠い遠い過去の生活の、さまざまな出來ごとなのであつたが、それが一種特別の形をとつて

あらわれたのだ。例えはヴェリチャーニノフはもうよほど以前から、物おぼえの悪くなつたことを歎いていた。彼は知人たちの顔を見忘れて、そのため途で行きあつた彼らの感情を害するのだった。つい半年前に讀んだ本でさえ、近ごろでは、何が書いてあつたかすつかり忘れてゐることもあつた。それなのに、一體どうしたことだろう？——この打ち消すべからざる、日ましにはげしくなるこの物覺えの悪さ（それを彼はひどく氣に病んでいた——）にもかかわらず、遠い過去にぞくする一切のこと、十年十五年とたつて、今では忘れ果ててゐる一切のことが、今ごろになつて突然記憶にのぼることがあるというのは！ それも巨細にわたつてなまなましい印象を伴ない、じつに驚くばかりの精確さをもつてあらわれるので、まるでもう一度現實に體驗してゐる思いがするのである。想いおこされた事實のなかには、それが想いおこされたということ自体がすでに奇蹟としか思えぬほどに、きれいに忘れていたものもあつた。だが、じつはそれだけの話ではないのである。そもそも世間をひろく渡つて來た人で、その人なりの思い出がないなどということは、あろうはずがない。ただここで大切なのは、そういう思い出のすべてが、まるで何者かの手によつて前もつて料理されたように、事實に對するまったく新らしい、意想外な、そして何よりもまず、まるつきり夢想も及ばぬような見方でもつて、現在に立ち返つて來たことである。思い出のうちの種のある種のもが、今では彼の目に、純然たる犯罪のように映るのはなぜだろうか？ しかもそれは、彼の智力がくだす判斷だけの問題ではないのだ。なぜなら、自分の陰氣で孤獨で、おまけに病的な智力なんか、彼は信じないでもいられたであろうから。しかも事

態は、彼をして呪いの聲を發せしめるまでに進んでいた。ほとんど涙を——よしんば外にあらわれる涙でないまでも、少なくとも内心の涙を、さそうまでになった。實際これがつい二年前なら、お前はそのうちに涙を流すぞ、などと人に言われたにしても、まに受けはしなかったに相違ない。それはそうと最初のうちは、甘い思い出よりは苦がい思い出のほうが、よく思い出されるのだった。社交上のいゝんな失敗や無念さが、思いおこされた。例え彼が『ある陰謀家に中傷され』で、その結果ある家へ出入りを差し止められたこと、——また例え、これはそう古い話ではないが、公衆の面前で完膚ないまでに侮辱されたにもかかわらず、とうとう決闘を申込みずじまつたこと、——また、非常な美人が集まっている席上で、辛辣きわまる厭がらせを言われながら、なんの應答もできなかったこと、——そんなことが思い出された。また、二つ三つ借りっぱなしになつてゐる借金のこととも思い出された。それはいづれも取るに足らぬ金高にはちがいないが、とにかく紳士どうしの借金であり、かてて加えてその相手は、こつちからすでに絶交してゐて、悪口を言いふらしている人たちなのであつた。じつに馬鹿げたことで蕩盡してしまつた二つの財産——それは二つとも相當なものだつた——のことも思い出されて、やはり彼を苦しめた（もつともこれは、よほど癩のたかぶつたときに限つていたが）。しかし、そうこうするうちに、『高尚な』ほうのこととも思い出されはじめた。

一例をあげると、突然、それこそ『わけもいわれもなし』に、忘れていたどころかきれいさっぱり忘れていたあるお人好しの老官吏の面影が、念頭によみがえつて來たりした。それは、ごま

しお頭をした馬鹿げた男だつたが、彼はいつだつたか遠いむかしのこと、衆人環視のなかでその男を侮辱し、しかも何一つ返報を受けずに濟んだことがあつたのだ。事のおこりは、ただ空いばかりがしてみたかつただけのこと、つまりせつかく浮かんである滑稽な巧い洒落を、無駄にするに忍びなかつただけの話である。もつともその洒落は、大いに彼の男ぶりを上げ、人々の口から口へ、くり返されたものだつた。この一件はすっかり忘れていたので、そのいきさつが残らず、不思議なほどはつきりと、すぐさま脳裡に浮かび出ながら、くだんの老人の苗字さえ思い出せない始末だつた。彼はその老人が、嫁入りざかりの歳を過ぎてまだ自分と一緒に暮らしてゐて、そろそろ市中に何かと噂の立ちはじめていた娘のことをその時、しきりに辯解してゐたのを、ありありと思ひ出した。老人はいきりたつて抗辯しだしたが、そのうち急に公衆の面前でおいおい泣きだしたのだから、一座は幾らかしんみりしたほどだつた。とどのつまり一同は、冗談はんぶん老人を三鞭酒で酔いつぶして、げらげら笑いころげて、それでお仕舞いになつた。そして今、『わけもいわれもなし』ヴェリチャーニフが、その爺さんが赤ん坊のように兩手を顔に押し當てて、おいおい泣きだした姿を思い出した時、突然彼には、まるで自分がついぞあのことを忘れたことなど、ありはしなかつたやうな氣がしたのである。おまけに奇妙なことには、あの時は一部始終がすこぶる滑稽なやうな氣がしてゐたのに、今ではまるで反對で、とりわけそのこまかな點、つまり兩手で顔を蔽つたことなどは、滑稽どころの騒ぎではないと思われるのだつた。それからまた彼は、ほんの冗談口に、ある小學教員のすこぶる美しい細君の悪口を言い、しかもそ

の悪口が當の夫の耳にはいったことを思い出した。ヴェリチャーニノフは間もなくその町を去ったので、彼の悪口がどういう結末を告げたかは知らなかったが、今になって彼はいきなり、あれは一體どんな結果になったろうかと、想像しはじめたのである。——そしてもしその時突然、ある少女についての、ずっと近ごろの思い出が浮かんでこなかったら、彼の想像はどこまで擴がって行ったかわかったものではなかった。それは賤しい町人の娘で、彼のほうでは別に好きだったわけでもなく、また正直のところ、そんな女と關係をつけたことを恥じ入ってさえいたものだが、にもかかわらず、われながら有耶無耶のうちにその女に子供を生まれさせ、その擧句あつさり赤ん坊もろとも振り捨ててしまったのだった。ペテルブルグを去る時にも、別れの言葉さえ交わさなかつた始末である（もつとも、その時間もなかつたのだけれど）。この娘のことは、その後になつてまる一年もかかつて尋ねてみたが、もうその時はなんとしても捜し出せなかつた。それはそうと、こうした種類の思い出は、幾百となく浮かびあがってくるのだったし、おまけに一つ一つの思い出が、その後ろに何十という別の思い出を曳きずってくる體たらくだった。そのうちだんだん、彼の虚榮心もちくちく痛みだして來た。

彼の虚榮心が、ある特別な形に變化していたことは、前にも一言しておいた。それは本當のはなしだったのである。どうかするとちよいちよい（もつともこれは、たまのことだったが——）彼はひどい自己忘却に陥ることがあつて、自家用の馬車のないことも、てくて裁判所から裁判所へ歩き廻っていることも、身なりがいささかだらしくなっていることも、一向恥かしく思わな

いほどだった。——そしてそうした場合、昔なじみの誰かが往來で彼に嘲けりの視線をくれようが、あるいはわざと知らんふりをしようが、彼は實際のところ、厭な顔一つしないで済ませるだけの氣位は具えていたはずだ。この平氣な顔は、まさに本心から出たもので、必ずしも見得や外聞だけのものではなかつたのである。言うまでもなく、そんなことはたまにしかないことだった。つまりそれは、自己忘却と興奮の刹那だけのことではあつたが、とにかく彼の虚榮心は、次第に今まで普通だった動機から遠ざかつて、絶えず彼の心に浮かんでくるある問題の周りに、集中しはじめたのである。

『どうやら、こりゃあ』と、彼は時どき自嘲的な調子で考えはじめたのだった（一體彼は、自分のことを考える際には、ほとんど常に自嘲的な調子でやりはじめる男だったが）、『どうやらこりゃあ、誰かしら俺の行狀を叩き直してやろうとお節介を焼く奴があつて、さてこそこんな厭らしい思い出だの、「悔恨の涙」だのを差し向けてくると見えるわい。どっこい、そうは問屋が卸さんぞ！ 所詮は空彈でぼんぼんやるようなものさ！ そもそも俺は先刻承知なんだ。承知どころか知り抜いているんだ。そんな悔恨の涙をいくら流したところで、そんな自己譴責をいくらやつたところで、馬鹿げた四十づらをさげながら、この俺にや一家の見識なんていうものは、雀の涙ほどもありはせんのだ！ 論より證據、あすの日にも何か誘惑がやって來てみる。そうさな、例えばまたしてもあの教師の細君が俺の贈物を受けたという噂を、弘めるのが俺にとって好都合だといった場合が、生じたとして見る、——てつきり俺は、そいつを弘めるにきまつてるさ、けるり

としてな。——おまけに事は今度が初めてじゃなくて、二度目なんだから、初めての時より一段と醜悪で厭らしいものになるだろう。それともまた、あの公爵の小倅が今ここへ出てきて、もう一ぺんこの俺を侮辱して見る。あいつは母ひとり子ひとりの大事な息子で、十一年前にこの俺がずどんと一發、片脚折っぺしよってやった奴だが、——俺は即刻奴に決闘を申込んで、もう一ぺん松葉杖の厄介にならせてやる。要するに空弾に過ぎんのだ。なんの足しにもなりはせんのだ。第一、自己を脱却するすべきたたら、爪の先ほどの心得もないこの俺が、むかしのことを思い出したところでなんになるものか!』

さて、教師の細君との悶着は二度とくり返されず、誰ひとり松葉杖の厄介になるような目には逢わされなかったけれど、唯もしそうした羽目に立ち到ったら、てっきりそうした騒動が再演されずに済むものじゃないという考え一つが、ほとんど死なんばかりの苦痛を彼に與えるのだった……時たまではあったけれど。だが實際のところ、人間のべつ幕なしに、くよくよしてばかりもいられないものである。幕あいには、一服やりに、ぶらぶらしても差支えないわけだ。

じつのところ、ヴェリチャーニフもよくそれをやった。つまり彼は、幕あいの漫歩を試みる気ではいたのだが、にもかかわらずペテルブルグの彼の生活は、時とともにますます面白くなるばかりだった。とうとう、七月も間ぢかになってしまった。時どき彼の頭には、何もかも、例の訴訟までもほっぽり出して、行き當りばったりどこかへ、それも出し抜けに、思いもかけずといったあんばい式で、例えばいっそクリミヤへでも遠走ってしまったという決意が、ひらめく

ことがあった。だが大抵は一時間もすると、もう彼はその考えを輕蔑して、まずこういった嘲笑を吐きかけるのが常だった。——『この厭らしい想念ときたら、一度はじまったら最後、またこの俺に些かなりと人格というものがある以上、どんな南へ逃げ出したところで、金輪際やまるものじゃないんだ。だからつまり、そんな想念から逃げ出すには當らんし、また第一そうする理由もありはしないんだ。』

『それにまた、逃げ出してどうしようって言うんだ』と、彼はやけくそで理窟をこねつづけた。『なるほどこの町はすこぶるほこりっぽい、蒸暑い。おまけにこの宿ときたら、何から何までえらく薄ぎたない。また、いろんな用件で眼の色を變えている連中にまじって、俺がうろつき廻る裁判所ときたら——それこそ二十日鼠みたいなせわしなさ、古着市場へでも行ったような騒ぎだ。どこへも出かけずに、この町に居残っている連中、朝から晩まで鼻先をちらちらしている奴らの顔という顔には、——奴らの利己心だの、悪氣のない無自覺な鐵面皮さだの、おっかなびっくりな小心さだの、鷄みたいにこせこせした根性だの、無邪氣なくらい出しっぱなしになっている、——まったくこの町こそ、大眞面目で言つて、ヒポコンデリー患者にとつちや極樂淨土なのだ! 何から何まで、あけっぱなしで、はつきりしている。誰ひとりとして、別荘だの外國の温泉場だのわが國の奥さんがたがよくやるような、かくし立てということをして、てんで入用とも考えちゃいないのだ。——だからつまり、何ごとにもまれ、ざつくばらんで率直にやりさえすりゃ、それだけでもう、ぐんと尊敬に値するというわけなんだ。……いいや、どこへだって行くこと

じゃないぞ！よしんばここで身を滅ぼそうとも、金輪際ここは動かんぞ……』

二 帽子に喪章をつけた紳士

七月の三日だった。息苦しさ暑気は、ほとほと我慢がならなかった。その日はヴェリチャーニノフにとつても多忙な日だった。午前中は、てくや馬車で駆けずり廻らなければならなかったし、おまけにまだその先には、是非とも今晚のうちにある必要な人間——これは法律通で五等文官の地位にある紳士だが——を、どこか黒河（譯註。ペテルブルグの西北約五十キ）あたりの別荘に訪ねて、不意打ちを喰わせなければならぬ用件が横たわっていた。五時を廻ると、ヴェリチャーニノフはやつとのこと、ネフスキイ通りの警察橋（譯註。ペテルブルグの西北約五十キ）のたもとにある、あるレストラン（すこぶるあやしげな板前だが、とにかくフランス料理の）のドアを押して、いつものとおりに隅っこの定めテーブルに陣どり、つね日ごろ變らぬ夕食を命じた。

彼は毎日ルーブルの夕食をしたためることにして、ただし飲物は別勘定ときめていた。そしてこれを、自分の傾いてきた財政状態に捧げられる賢明な犠牲と観念していた。一體どうして、こんなきたらしい物が食えるのだらうと、心のなかでは呆れながら、それでいてその都度、まるで三日三晩も絶食したあのような旺盛な食欲をもって、最後の一きれまで、きれいに平らげてしまふのだった。

『こりやどうも病的だわい。』

と、彼は時どき自分の食欲に気がついて、獨りごとを言うのだった。ところが今日はその彼が、すこぶる御機嫌なためのでいつものテーブルに陣どると、腹だたしげに帽子をそこらへほうり出し、そのまま頼杖をついて考えこんでしまったのである。もし今この時、隣のテーブルで食事をしてる客が、どうかしたはずみで浮かれたり、それとも注文を伺いに來たボーイが、彼のお望みを最初の一言でさとらなかつたりしたら、それこそ一大事である。平生は大いに禮儀正しく振舞うすべも心得ているし、また時と場合によつては、物に動ぜぬ尊大さを見せもする彼ではあるけれど、今日の様子では、てっきり士官學校の生徒みたいにわめきだして、おそらく一悶着もちあげるに相違ない。

スプーンが出たので、彼はスプーンを手にとつたが、一すくいもせぬうちに、いきなりスプーンを卓上へ投げだして、椅子から飛びあがらんばかりの恰好をした。ある思いもかけぬ考えが、突如として彼を襲つたのである。というのには、つまりその瞬間——どういふ筋道をたどつてだかは皆目わからないが——やにわに彼は、自分の煩悶の原因をはっきり悟つたのである。それは、もうこれで數日のあいだぶつ通しに、いや最近ひきつづき悩まされつづけてきた、ある特に格別な煩悶であつたが、それがどうしたわけだか彼にまつわりついたなり、どうしても離れようとしないうのだった。ところが今や彼は、一足とびにその全貌を見抜いたのである。自分の五本の指のよ

うに、はつきりと見てとつたのである。

『こりゃあみんな、あの帽子のせいなんだ!』と、彼はまるで靈感にでも打たれたもののように呟やいた、『あの胸くその悪い喪章を巻いた、あの忌々しい山高帽子だ。あいつ一つが一切の原因だったのだ!』

彼は考えはじめた、——そして考えこめば考えこむほど、ますます彼は不機嫌になり、『その出来ごとの全體』なるものが、いよいよ彼の眼には異様に見えてくるのだった。

『だが待てよ……一體あれは、出来ごとというほどのものかしらな?』と、彼は自分を信ぜずに、異を立ててみた、『あれに、なにかしら出来ごとらしいものが、ちよっぴりでもあるかしらん?』

事の次第は、つまりこうなのである。かれこれも二週間ほどにもなるが(たしかなところは覚えていなかったが、とにかく二週間前のように思われた)、彼は初めて往來で、それはボヂヤーチェスカヤ街とメシチャンスカヤ街の街角のへんだったが、帽子に喪章をつけた一人の紳士に出くわしたのだった。その紳士というのは、別にこれという取り立てて變ったところもない世間並の人品で、さっさと通り過ぎて行つたけれど、ただその時ヴェリチャーニノフの顔を、ちよいと氣になるほどじつと見つめて、その途端にどうしたわけだか、彼の注意がひどく相手へ引きつけられてしまったのだった。少なくともヴェリチャーニノフには、相手の顔つきが見覚えのあるような氣がした。たしかにいつかどこかで、その顔を見かけたことがあるのである。

『と言つたところで、何しろ俺も生まれてこのかた、何千と知れない顔にお目にかかつてきた

ものなあ——一々思い出すわけにも行かんて!』

二十歩も行き過ぎると、そうした妙な第一印象だったにもかかわらず、彼はもうその出會いのことを、忘れていようなふうだった。ところがその印象は、終日ぬぐい去られなかったばかりか——かなり奇妙な印象をとどめたのだった。つまり、なんだか一種特別な、漠然たる憎念として残つたのである。彼は二週間たった今になって、そうしたことを残らず、はっきり思い浮かべた。同時にまた、一體どこからそんな憎念が湧いてきたものやら、その時はまったく見當もつかず、ましてあの日、ひと晩じゅう彼を苦しめたあの不愉快きわまる氣持を、その朝の出會いに結びつけたり思い合せて考えたりしようなどは、思つてもみなかったこと——そんなことまで思い出した。ところがその紳士のほうでは、躍起になつて自分のことを思い出させようとかかつてきて、そのあくる日もまた、ネフスキイ通りでヴェリチャーニノフと顔をつき合わせ、またもや一種異様な目つきで彼を見つめた。ヴェリチャーニノフはべつと唾を吐いたが、吐いた途端に、俺はなぜ睡なんか吐いたのだろうと、げげんに思った。——實際、一目見るや否や、漠然とした、當てどもない嫌惡の情をそるような、そんな顔つきがあるものである。

『いや、俺はたしかに、あいつにはどこかで出くわしたことがあるぞ。』

と、彼はその出會いから半時間ほどして、すっかり考えこんで呟やいた。それからまたしてもその晩は、一晚じゅうじつに不愉快な氣持ですごしたのである。そればかりか夜なかなになると、何か厭らしい夢まで見たのであるが、それでもやはり、その新らしい一種特別な憂鬱の原因が、

残らずさつき出會つた喪章の紳士にあるなどは、その晩一再ならずその男のことが思い浮かべられたにもかかわらず、一度だつて念頭にのぼりはしなかつた。それどころか却つて、『あんな碌でなし』のことがこういつまでも思い出されてくるのが、この大事な場合として癪にさわつてならなかつた。そんなわけだから、自分の不安な思いの一切はその男のせいではあるまいか、などという考えが萬いち念頭にきざしでもしたら、彼はおそらく屈辱をさえ感じたに相違ない。ところが、それから二日すると、彼らはまたもや、ネヴァ河をかよう蒸汽船の出口の人ごみのなかで、ぼつたり出會つてしまった。この三度目の時になるとヴェリチャーニフは、帽子に喪章をつけたその紳士が、相手を彼と知つて、人ごみにへだてられ揉みくしゃにされながら、わざわざ人波を掻きわけて彼のほうへ近づいて來たに違いない、てつきりそうに違いないと感じた。そればかりか、『臆面もなく』彼にむかつて手を差し伸べたようにさえ思われた。のみならず、ひよつとしたら大聲を出して彼の名を呼んだのかも知れないのだ。もつともその聲を、ヴェリチャーニフははつきり耳にしたわけではないが、しかし……

『だが一體、あん畜生は何者なんだろう？もし本當にこの俺を知つていて、それほどそばへ來たいんなら、さつさとやつて來たらよさそうなんじゃないか？』

と彼は、辻馬車に腰をおろし、スモーリヌイ修道院（譯註。ネヴァ河ベリにある。當時は貴族女學校になつていた。）のほうへ向かいながら、さも忌々しそうに考えた。それから半時間のちには、彼はもう自分の辯護士と議論をして、大聲でわめき散らしていたのだが、晩がたから夜へかけてはまたもや、なんともかとも厭

らしい、奇怪きわまる憂鬱に沈んでしまったのだつた。

『とりや黄痘にでもなつたのじゃあるまいか？』と、彼はじつと鏡を見ながら、疑わしげに自分分に問いかけるのだつた。

それが三度目の出會いだつた。それから五日ほどというものは、彼はさつぱり『誰にも』出くわさず、『あの野郎』なるものことは、噂にさえ聞かずにすごした。でありながら、帽子に喪章をつけたくだんの紳士のことは、ひつきりなしに念頭に浮かんでくるのだつた。こうなるとヴェリチャーニフも、幾ぶんあきれぎみで、自分の氣持を槍玉にあげざるを得なかつた。

『じゃあつまり、あいつのことが胸くそが悪くてならんともいうのかね？——ふん！……だがあの男だつてきつと、このペテルブルグで、どつさり用事を抱えこんでいるに違ひなからうじゃないか、——それにしても、あの喪章は一體誰のためなのかな？向うではたしかに俺を知つている。だが俺のほうじゃどうも思い出せん。しかしさ、なんだつてああした連中は、喪章なんかつけるんだらう？あの男にはどうも似合わんがなあ。……だが待てよ、もつと近くへ寄つて眺めたら、奴が誰だつたか思い出せそうな氣もするなあ。……』

すると彼の思い出のなかで、何ものかがうごめきはじめたような氣がした。それはよく知つていながら、どうかした拍子にひよいと度忘れした言葉を、一所懸命思い出そうとしていようなあんばいだつた。その言葉はじつによく知つているし——おまけに自分がそれを知つていようといふことも、ちゃんと心えているのである。また、その言葉の意味も知つていようし、現にそのついで

鼻先まで来ているのだが、それがどうしたものでいかくら頭ばつても、その言葉のほうで思い出されるのを厭がつて、いつかな出てこない。——まあそんな工合だった。

『あれはその……たしかもうだいぶ以前に……どこやらであったことだな……たしかその時……その時それ……。ええ、勝手にしろ。あったことか無かったことか、どっちだつて構わんじやないか!……』と、彼は急に忌々しげに叫んだ、『それに第一、とるにも足らんあんな野郎のことを、くよくよ氣に病むなんて、俺の名折れになるだけのことだ!……』

彼はもの凄いい剣幕でいきり立った。ところがその晩になって、さつき自分が『もの凄いい剣幕で』いきり立ったことをふと思ひ出すと、ひどく不愉快になってしまった。妙な仕草をしているところを、誰かに見つかつたような氣持だった。彼はどきまぎして、あきれたり不思議がつたりした。——

『して見ると、わけもいわれもなしに……たつた一つの思ひ出のことで……俺があんなにむしやくしやするのは、やつぱり何かしら曰くがあるに相違ないぞ……』

彼は自分の想念を、中途でおつぱり出してしまった。

ところが、そのあくる日になると、彼は一そう向つ腹を立てることになった。だが、今度は腹を立てる理由が立派にあるし、自分が怒るのも當り前だと思われた。相手が『前代未聞の無禮な仕打ち』をしたのである。というのはつまり、四度目の出會いがあつたのだつた。喪章をつけた紳士は、まるで地面から湧いて出でもしたように、またもや姿をあらわした。それはちやうど

ヴェリチャーニノフが、往來で例の五等官を首尾よくつかまえたばかりのところだつた。これは前にも言つたとおり、彼にとつては必要な人物で、よくよくの場合には不意に別荘へでも押しつけて行つて、つかまえるほかはあるまいと覺悟をきめてまで、いまだに探し廻つていたところであつた。なぜそれほどに執心かという、この役人はヴェリチャーニノフにとつてほとんど一面識もない間がらながら、とにかく今度の訴訟事件については是非とも會つて置かねばならぬ人物なのに、向うは相變らずぬらりとすり抜けてばかりいて、今になつてはもう、ヴェリチャーニノフに會うのが厭さに、百方手をつくして逃げ廻つているとしか見えないのだつた。だから、やつとこさでその彼に出くわしたと思うと、すつかり嬉しくなつて、ヴェリチャーニノフは相手の目色をうかがうかがいがい、彼と肩を並べて足早に歩を運びながら、なんとかしてこの白毛頭の老獪漢がうっかり口を滑らして、自分が久しい前から待ちあぐみ求めあぐみ求めているある一言をひよいと漏らしそうな、そういう話題のほうへ彼をおびき寄せようと懸命になつていた。ところが、相手の古狸もなかなかさる者で、急所を笑いにはぐらかしたり、聞こえぬふりをきめこんだり、いとも巧みに引っぱずして行く——という實もつて氣が氣でないその瞬間に、ヴェリチャーニノフの視線はふと、往來の向うがわの歩道に、帽子に喪章をつけた例の紳士を見いだしたというわけであつた。彼はそこにつつ立って、じつと二人のほうを見つめていた——少なくともそれは明らかだつた。おまけにどうやら、嘲笑をさえ浮かべているらしかつた。

『ええ、くそ!』五等官の後ろ姿が見えなくなると、ヴェリチャーニノフは、せつかくの大き

な魚を取り逃がしたのも、あの『破廉恥漢』が不意に姿をあらわしたせいだと思つて、すっかり業を煮やしてしまった。——『畜生、あいつめ、俺の内ぶところをさぐるうとしているんだな！なんにしろ、俺のあとをつけ廻していることはたしかだ！誰かに頼まれたのかな……。おまけに……。おまけにあいつは、たしかにせせら笑いやがったぞ！ようし、斷然目にも見せてくれる……。ちえつ、ステッキがないのが残念だわい！よしステッキを買おう！このままじゃ濟まされん！一體あいつはこの何者だ？なんとしても奴の正體が知りたいものだ。』

そしてとうとう——この（つまり四度目の）出會いののち、ちやうど三日たつて、私たちは前に書いたようにあのレストランで、すっかりもう興奮しきつて、幾ぶんは茫然自失の氣味でさえあるヴェリチャーニノフの姿を、見いだすわけである。なんぼ傲岸な彼でも、そうした自分の状態だけは認めないわけには行かなかつた。今度という今度は、彼も一切の事情を思い合わせてみて、自分にとつついた鬱ぎの蟲、このただごとならぬ悶々の情、そしてこの二週間にわたる不安な思い——それらの一切の原因は、『とるにも足らぬくだらん奴ではあるけれど』、やっぱりあの喪章の紳士にほかならぬことに、思い當らざるを得なかつた。

『なるほど俺は、ヒポコンデリー患者かも知れんな』と、ヴェリチャーニノフは考えた。『で、そのせいで、蠅ほどのことが象ほどに見えるのかも知れん。だがしかし、こうしたことはみんなおそらくは幻想に過ぎんだらう——などと思つてみたところで、それで一體氣が休まるものだらうか？まったく、あんなならず者が出てくるたびごとに、人間一匹が根もとからひっくり返さ

れてしまうものだとしたら、つまりそりや……。つまりそりやあ……。』

じつをいえば、今日の（というのは五度目の）出會いが、ヴェリチャーニノフをひどく動顛させたのは、象ほどのことが、まるで蠅ほどにしか見えなかつたからであつた。その紳士は、例のとおり素早くそばをすり抜けて行つたのだが、今日はヴェリチャーニノフのほうは見向きもせず、いつものように彼を知っているような素振りも見せず、——打つて變つた伏眼になって、なんとかして相手の目にふれたくないと念じているような様子だつた。ヴェリチャーニノフは、くるとあとを振り返ると、あらん限りの聲で呼びかけた。——

「あ、もしも君！喪章の先生！今日は逃げるんですかい！待ちたまえ、君は一體何者なんです？」

この問いも（そして絶叫も）、すこぶる筋のとおりぬものであつた。だが、そのことにヴェリチャーニノフが氣がついたのは、もうどなつてしまつたあとの祭だつた。この叫びに應じて、例の紳士は振り返つて、ちよつと足をとめ、困つたような顔をし、にやりと笑い、何やら言いたげなふりをし、何かしたげな素振りを見せ、——ほんの一瞬間、ひどく戸まどつたような物腰をありありと示したが、急にそびらを返すと、そのまま振り向きもせず、ずんずん向うへ行つてしまつた。ヴェリチャーニノフは、呆れてその後ろ姿を見送つた。

『だが待てよ』と彼は考えた。『本當のところは、奴が俺につきまどつてゐるのじゃなくて、逆にこつちが奴につきまどつてゐるんだとしたら、ただそれだけのことだとしたら、一體これは

『どうなるんだ？』

夕食を済ますと、彼は急いで例の五等官の別荘へ押しかけて行った。相手は留守だった。『朝がたお出かけになつたまま、まだお歸りになりません。今日は誕生祝いのおよばれで、都へおいでになつたのですから、夜なかの二時か三時すぎでなければ、まずお戻りはありますまい』という挨拶だった。じつに『失敬きわまる』挨拶だと思つたので、一時はカッとしてしまつて、ヴェリチャーニノフはその足で誕生祝いの席へ乗りこんでやろうかと思つたし、また實際にも馭者にそう言いつけたのだったが、途中で道のりの遠いことを考えだすと、そのまま馬車を乗り捨てて、大劇場のそばの宿まで、足を引きずり引きずり歸つて來た。彼は運動の必要を感じていたのである。興奮しきつた神経を鎮めるには、不眠症であろうがなからうが、是が非でも夜の熟睡が必要だった。ところでぐつすり眠るためには、せめて肉體なりと、くたくたに疲らせなければならなかつた。というわけで、彼が宿へたどりついたのは、何しろちつとやそつとの道のりではなかつたから、もう十時半だった。——そして實際へとへとだった。

この三月に引き移つたその宿のことを、彼は自分ながら言いわけがましく、『ほんの一時の雨しのぎ』だとか、あの『忌々しい訴訟沙汰』のおかげで、思いもかけずペテルブルグで『沈没に及んで』しまつたとか、さも憎さげにくさしたり罵つたりしていたが、——そのじつどうしてこの宿は、彼がいうほど悪くもなく、ぶざまでもなかつた。なるほど入口は少々暗いし、門のくぐりのへんは『薄ぎたない』には違ひなかつたけれど、二階にある彼の住まいときたら、ひろびろ

した、明るい、天井の高い二た間から成り立っていて、あいだにある薄暗い控間でへだてられている。というわけで、ひと間は往來に面し、もうひと間は中庭に臨んでいた。窓を中庭へ開いているほうの部屋の横手には、小さな隠れ間が附いていて、これは寢室に使うようになっていた。ところがヴェリチャーニノフは、この小部屋に本だの書類だのをごちゃごちゃと散らかして、寢るのは大部屋の一つ、つまり往來へ窓を開いた部屋にしていた。寢具はソファのうゑに敷いてもらつた。家具類は相當に使ひふるしたものではあつたが、なかなか立派だつたし、そのうゑ貴重な骨董品も幾らかはあつた。それは以前、工面のよかつたころの名ごりで、陶器や青銅製の玩具だの、大きな正銘のブハラ絨毯などといったたぐいである。二枚ほど相當な晝も残つていた。とはいへそれらは一切合財、ペラゲーヤという小間使の娘が彼を一人残して、ノーヴェゴロドの親戚へ休暇をとつて歸つていつてからというもの、何もかも散らかり放題、投げやり放題になつていて、おまけに埃だらけになつていて、という始末だつた。とにかくまだ、紳士の體面だけは保つて行きたいと思つているヴェリチャーニノフであつてみれば、年ごろの獨身娘が、同じく獨身の世なれた男のもとに召使われているという妙な事實に思い到るたびに、そのペラゲーヤの奉公ぶりには至極満足ではありながら、やっぱり顔を赤らめずにはいらなかつた。この娘は、今では外國へ行つてゐる彼の知り合ひの家庭に使われていたのだが、彼がこの春今の宿を借りた時から、こつちへ住み替えて來て、部屋の整頓をしてくれたのだつた。しかし彼女が歸つて行つてからも、彼はほかの小間使を置こうという氣にはなれなかつた。また急場のしのぎに従僕をやとうほどの

こともなかつたし、だいいち彼は、従僕というものが嫌いでもあつた。といったわけで、部屋の掃除には毎朝マーヅラという家番の女房の妹に来てもらうことになつていて、彼は外出するたびに鍵をその女に預けるのだつた。ところがその女は、ただ金をとりこむだけの話で、まったく何一つしてくれず、どうやら手癖もよくないらしかつた。彼のほうではもう諦らめて、一切見ないふりで済まし、やつと一人っきりの生活ができるようになったことに、むしろ満足を感じていた。とはいへ、物にはすべて程あいというものがある。——で時どき、蟲のいどころの悪い時などは、そうした『薄ぎたなさ』が、神経にさわつてなんとしても我慢がならず、歸宅することにまず大抵は、むかむかするような氣持で部屋へはいるのであつた。

ところが今日ばかりは、ろくろく着物も脱がぬうちから、いきなり寢床へ飛びこんで、もう一切何ごとも考えまい、是が非でも『今すぐさま』眠つてしまおうと、いらいらして腹をきめた。そして不思議なことには、頭が枕にふれるが早い、たちまち睡りに落ちてしまつた。これはここ一カ月來、たえてなかつたことだつた。

彼は三時間ほど眠つたが、落着きのない睡りだつた。熱病の時に見るような、なんだか妙な夢を見た。なんでもそれは、彼が何か犯罪をおかして、それをかくしているところらしく、おまけにどこからとも知れず、ひっきりなしに彼の部屋へ押しかけて來る人々が、異口同音に彼の罪を鳴らすのであつた。集まつた群衆はおそろしいほど澤山で、おまけに引きもきらずあとからあとからと部屋へはいつてくるので、ドアはもうしまらなくなつて、あけっぱなしになつていた。と

ころが彼の全身の注意は、やがて一人の奇妙な男に集中されてしまつた。それはその昔、彼が非常に親しくしていた友人で、今では死んでゐるはずなのに、どうしたものか群衆にまじつて、いきなり彼の部屋へはいつて來たのだつた。ヴェリチャーニノフにとつて、何よりもどかしくてならないのは、その男が何者なのかわからず、名前も度忘れして、なんとも思ひ出せないことだつた。彼にわかつてゐることは、その昔自分が非常に好きだつた男、ということだけだつた。押しかけて來たほかの連中は、この男の口から、ヴェリチャーニノフの有罪無罪をきめる最後の一言が漏らされるのを待つてゐるらしく、みんなじりじりしてゐた。しかしその男は、テーブルの前に腰をおろしたまま身じろぎもせず、黙然と口を利こうともしなかつた。喧騒はやまず、いらだたしい空氣はますます濃くなつて行つた。と突然、ヴェリチャーニノフはカッとして、その男が口を開こうとしないのを理由に、彼を殴りつけた。そしてそのため、異様な快感を覺えた。彼の心臓は自分のしたことに對する恐怖と苦痛のため、じんと凍りつく思ひだつたが、しかもその悪寒のなかに、快感がこもつてゐるのだつた。怒りの燃え狂うにまかせて、彼は二度三度とつづけざまに殴りつけながら、忿怒と恐怖からくる一種酔い痴れたような氣持は、ほとんど狂氣の境にまで來ていたが、しかもそのなかには、無限の快感もこもつてゐるのだつた。そして彼は、もはや自分のふるう鐵拳の數も覺えず、のべつ幕なしに殴りつづけた。彼はあれを一切合財、殘る限なく粉碎してしまひたかつたのだ。と不意に、何ごとかがもちあがつた。一同はもの凄叫び聲をあげて、何ものかを待ち設けるように、ドアの方を振り向いた。するとその瞬間、戸口の

鈴が三度けたたましく鳴ったが、その亂暴さ加減といつたら、まるで鈴をドアからもぎとろうとでもするようだった。ヴェリチャーニノフは、はっと眼を覺ますと、たちまちわれに返って、がばと寢床からはね起きざま、戸口へ駆け寄った。今鈴が鳴ったのは夢ではない。何者かが本當に、今しがた案内を乞うたのだ——と、彼は固く思いこんだのである。

『あんなにもはつきりした、あんなにも眞に迫った、ありありと耳に聞こえる鈴の音が、ただの夢に過ぎんしたら、あんなに不自然過ぎるじゃないか!』

ところが意外なことに、その鈴の音もやっぱり夢だったことがわかった。彼はドアをあけて、玄關へ出てみた。階段まで覗いてみた。——が、人っ子ひとりいなかった。鈴はだらりと、揺れもせずにながっていた。意外ではあったが、とにかくほっとした氣持で、彼は部屋へひき返した。蠟燭に火を移しながら彼は、ドアがただしめたきりで、錠もおろさず掛金もかけてないことを思ひ出した。もつともこれまでも、歸宅してついなんの氣なしに、夜の戸じまりをし忘れることは再々のことだった。そのためペラゲーヤから、小言をくったことも二三度あった。彼はドアの錠をおろしに控間へと返して、もう一度あけて玄關を覗いて見、そして内側から掛金をおろした。しかし錠を廻すのは、やっぱり億劫なのでやめにした。時計が二時半を打った。してみると三時間眠ったわけである。

夢のおかげですっかり氣が立つてしまったので、彼はすぐさま寢床へ戻る氣はしなかつた。で彼は、三十分ほど——つまり『葉巻を一本すいきるあいだ』、部屋のなかをぶらぶら歩いてみよ

うと決心した。手早く服をつけると、彼は窓ぎわへ寄って、厚ぼつたい花緞子の窓掛をもたげ、その外にある眞白な捲上げカーテンを少し上げてみた。往來はもう、すっかり明るくなっていた(譯註。いわゆゑ。白夜である)。明るいペテルブルグの夏の夜は、いつも彼の神経をいらだたせずにはおかないし、ことに近ごろでは彼の不眠症をつのらせるばかりなので、彼は二週間ほど前わざわざ自分の部屋に、すっかりおろしてしまえば光を透さぬ厚地の緞子の窓掛を、つけさせたのであった。明るい光の流れこむにまかせ、テーブルのうえにもした蠟燭のことも忘れて、彼は相變らず何やら重苦しい惱ましい感情をいだきながら、部屋のなかを歩きつ戻りつしはじめた。夢の印象が、いまだに作用していた。あの男に自分が手を振りあげた、殴りつけた——そこからくる深刻な苦悶が、まだうずいていた。

『しっかりしろ、あの男なんかいやしないんじゃないか。この世にいたことだって、ありはしないんじゃないか。あれはみんな夢なんだ、一體何を俺はよくよしているんだ?』

ひどく腹だたいしい氣持で、まるでそこに自分の一切の悩みが凝り固まってもするうちに、彼はいよいよ自分は病氣になりかけた、『病人』になりかけている、と考えはじめた。

自分が老いこんできたこと、ないしは老衰してきたことを意識するのは、彼にとっていつも辛いことだった。で彼は、むしゃくしゃした時には、わざと自分をじらすため、この二つのことを意地悪く誇張して考えるのが常だった。

「老境さ! すっかり老いこんできたのさ」と彼は歩きながら呟やいた、「記憶力はなくなるし、

幻影には脅かされるし、夢は見るし、呼鈴は鳴るし……。ええ、畜生！今までの経験で知っているが、俺があんな夢を見るのは必らず熱病のおこる前觸れだったわけ……。一體あの喪章先生の『一件』だって、やっぱり夢らしいぞ、いやそうにきまつてる。俺が昨日考えたことは、あつりや斷然ほんとしたのだ。つまりこの俺が、この俺のほうで奴につきまತ್ತるんで、向うが俺につきまತ್ತるんじゃないんだ！あいつを種に夢物語をでつち上げておきながら、自分で怖くなってテーブルの下へ潜りこんだという次第なんだ。それになぜ俺は、あの男のことを野郎だなんて呼んだんだろう？すこぶる立派な紳士かも知れんじやないか。そりゃ御面相はあまりぞつとはしないが、さりとて別にこれと取りたてていうほど厭らしいところもないんだ。身なりだって十人並みだ。ただあの眼つきがなんとなく……。いや、またはじまつたぞ！またしてもあいつのことだ！ええ、奴の眼つきがこの俺になんだというんだ？あの……。碌でなしがないじゃ、俺が生きて行けないとでも言うのかい？」

彼の頭のなかにつきつきに浮かびあがってきた想念のうちで、やはり彼の心をひどく傷つけたある一つの想念があった。つまり不意に彼は、あの喪章の紳士は、その昔彼が友達つきあいをしたことのある男に違いない。そして今になって彼と出くわすたびに嘲笑を浮かべるのは、何か彼の過去の大きな祕密を知っているからなのだ。そのうえ現にこうも尾羽打ち枯らした彼の境涯を眼にするからなのだ——どうしてもそうに違いないと思つたのである。窓をあけて夜氣を吸おうと思つて、彼は何氣なく窓ぎわに歩み寄つた。と突然、彼はぞつと頓えあがつた。曾て見たことも聞

いたこともない異様な何ごとかが、思いがけずも眼前で行われつつあるような氣がしたのである。窓はまだあけてはなかつたけれど、彼は急いで窓の壁ぎわに退りこんで身をかくした。と忽然として彼の眼には、往來の向う側、ちょうど家の眞向いにあたる人氣のない歩道のうえに、帽子に喪章をつけた例の紳士の姿が映つた。紳士は顔をこちらへ向けて歩道に佇んでいたが、たしかに彼が覗いているとは露知らず、何ごとか思いめぐらすようなふうで、じろじろと家の様子を窺っているのだった。打ち見たところ、何かしきりに思案しながら、決心を固めようとしているところと見える。片手をもちあげて、ちょいと指を額に當てるような恰好をした。とうとう決心がついたと見え、素早くあたり眼をくぼると、爪先だちに足音をしのびのび、大急ぎで往來をつつ切つて來た。果然、彼は門口のくぐり（それは夏になると時には朝の三時ごろまで門をかける）にあることがあつた）を抜けて、はいつて來るではないか。『さあやつて來たぞ』という考えが、さつとヴェリチャーニノフの腦裡にひらめくと同時に、やにわに彼も爪先だちになつて、控室の表戸のほうへ一散に走り寄ると、——そのまま息を殺し、はやる心に片唾を呑んで立ちすくみ、おののく右手をつい先刻おろしておいたドアの掛金にそつとかけながら、今にも階段に聞こえてくるはずの相手の足音に、一心こめて、きき耳を立てた。

37
心臓の鼓動があんまりはげしいので、爪先だてのぼつて來る見知らぬ男が聞きつけはせぬかと、彼は心配だった。一體何ごとがはじまつたのか、さつぱり合點は行かなかつたけれど、一切の成り行きは十層倍もの強度で感知されるのであつた。まるで先刻の夢が現實と溶け合つたよう

な工合だった。ヴェリチャーニノフは生れつき豪膽な男であった。時には危険に當面して泰然自若たることを、一種見榮のようにして愛する男であった。——それも誰一人見ている者はなくとも、自分で自分に感心するだけで結構なのであった。ところが今の場合は、そのうえにまだ何物かがあった。今しがたまでヒポコンデリー患者であり、疑心暗鬼の愚痴男だった彼は、がらりと一變してしまつて、今はもう全然別人の觀があつた。引つつかつたような聲なき笑いが、胸底からこみあげてくるのだった。しまつてゐるドアのかげから、彼は見知らぬ男の一舉一動を想像してゐた。「や！ いよいよのぼつて来るな、とうとうのぼりきつたぞ、あたりをきよるきよる見廻してやがる。階段の下の様子をきき耳たてて窺つてるな。息を殺してゐるな。ほれ、しのび足でこちへ来るぞ……。や！ 把手テに手をかけたな、引っぱつてる、試あたつてみるぞ！ ははあ、さては奴さん、錠がおりてないつもりでいたんだな！ してみると、俺が時どきかけ忘れるのを御承知と見えるわい！ また把手を引っぱつてやがる。一體こんなことで掛金はずれるとも思つてるのか知らん？ このまま別れるのは残念だなあ！ 空しく歸すなんて残念じゃないか？」

そして實際のところ、萬事は彼が思い描いてゐるとおりに展開してきたのであつた。何者かが本當にドアの外に佇んで、そつと音も立てずに錠を試あたつて、外から把手を引っぱつてゐるのであつた。つまり『こうなつてはもう、目的あつてやつてゐるにきまつてる』のである。しかしヴェリチャーニノフのほうでも、問題を解決しようという決心はすでについていたので、彼は一種の法悦をもつて、あせらずあわてず、じつと潮時を狙つてゐた。やにわに掛金はずす、さつとド

アをあけはなす、そして『怪しの者』といきなり顔を合わせる——彼はそれがやつてみたくて堪らなくなつた。『もし、あなたはここで何をしていらつしやるんです？』と言つてやるう。

實際そのとおりになつた。潮時をとらえると、彼はやにわに掛金はずして、ドアをどすんと突きあげた拍子に——帽子に喪章をつけた紳士とすんでのことで鉢合わせをするところだった。

三 パーヴェル・パーヴロヴィチ・トルーソツキイ

相手はまるで唾みたいにその場に棒立ちになつてしまつた。二人は鬨のうえで鼻をつき合わせてつっ立つたまま、身じろぎもせず、眼と眼を睨み合つてゐた。そのままの状態で暫く過ぎたと突然、——ヴェリチャーニノフはこの來訪者が誰だつたかを思い出した！

同時に來訪者のほうでも、ヴェリチャーニノフがはつきり自分を思い出したことを、見てとつたらしがつた。そういう氣配が彼の眼差しにひらめいた。一瞬のうちに彼の顔は残る限なく、なんともしえぬ甘い微笑に溶けこんでしまつた。

「あなたは、たしか、アレクセイ・イヴァーノヴィチさんでしたな？」と彼は、ほとんど歌でもうたうような調子でいった。なんともいへぬ優しさのこもつた、したがつてこの場には滑稽なほど不似合いな聲だった。

「してあなたは、本當にあのパーヴェル・パーヴロヴィチ・トルーソツキイなんですか？」と

やがてヴェリチャーニノフも、當惑そうに口を開いた。

「あなたとは九年ほど昔、Tでおちかづきでしたな。それも、——こうしたことを申してお氣に障りませんなら——お互いにすこぶる親しい間からでしたな。」

「左様、左様……まあそんなところで……ですが、今は夜中の三時ですよ、だのにあなたはかれこれ十分間も、このドアがしまつてるかあいてるかのこととやってみて……」

「三時ですって！」と來訪者は時計を出して見て、むしろ慨歎に堪えんといったふうの驚きの色を浮かべて叫んだ、「なるほど三時だ！失禮しましたな。アレクセイ・イヴァーノヴィチ、あがつてくるとき時間を考えるのが本當でした。まったく汗顔の至りですよ。二三日うちにまた伺つてお話をするとして、今夜はこれで……」

「いや、それはいけません！お話があるならあるで、いつそいまして承わることになりましたよ！」とヴェリチャーニノフは急いで言い直した、「どうぞまあ闕をまたいで、なかへおはいりください。——だってあなたは、もともとなかへはいられるおつもりだったじゃありませんか。まさかこの眞夜中に、錠前をしらべにだけ來られたわけでも……」

彼は興奮する一方どうやら狼狽ぎみで、一體どうしたものやらわれながら見當が付き兼ねた。しまいには氣恥かしくなってきた。とにかく自分の描いていたとてつもない幻影からは、祕密も危険も——何一つ出ではこずに、たかがパーヴェル・パーヴォイチなんぞの馬鹿げた姿が出現しただけだったのだ。とはいえしかし、これが單にそれだけの話だとはどうしても思えなかつた。

何かしら臙ろげながら不氣味な豫感がするのである。客を肘掛椅子につかせると、自分も坐る間ももどかしいといったふうで、その椅子からすぐ一步ひとあしの寢臺に腰をおろし、膝のうえに両手をそろえて前屈みになって相手が口を切るのをじりじりしながら待ち受けた。彼は貪るようにじろじろと見やりながら、暗に相手を促すのであつた。ところが不思議なことに、向うはいつかかな口を開こうとはせず、今すぐ口を切る『義務のある』こともどうやら氣づいていないらしかつた。それどころか、あべこべに何か待ち受けるような眼つきで主人を眺めているのであつた。もつとも、彼は初手から捕鼠器ねずみとりにかかつた鼠のような、一種の氣まづさを感じていたのだから、單に氣おくれがしていただけかも知れない。しかしヴェリチャーニノフはカッとなつてしまつた。

「あなたはどうしたんです！」と彼は叫んだ、「まさかあなたは夢でも幻でもありませんか！亡者ごつこをやりにもえたんですかね？さあ、あなたのそのお話というのを承わろうじゃありませんか！」

客はもじもじはじめ、にやりと笑つて、用心深く話した。

「お見受け申すところ、私がかんな時刻に、しかも——こんな妙な工合にして伺つたのが、何よりもまずあなたをお愕かせたようにして……。つまりその、昔のことどもや、私どもがどんなふうにお別れたかを思い出しますと——私は今なお不思議でならないくらいで……。それはそうと、私はじつはお邪魔にあがるうなどは思つてもいなかつたのでしたが、それがこんなことになつちまつたのは、その——ほんの偶然で……」

「何がほんの偶然です！ 現に私はこの窓から見ているんですが、あなたは爪先だちで往來をつつ切つて來たじゃありませんか！」

「ああ、あなたは御覽でしたか！ それじゃあなたは、私なんかよりよっぽどお詳しいはずだ！——ですがこんなことを申しては、あなたをますますいらだたせるだけですな……。じつはこういうわけなんです。私は自分の用向きで三週間ほど前から當地に來ているんです……。私があのパーヴェル・パーヴロヴィチ・トルソツキイだということは、あなたもお気づきのとおりです。そこで私の出て來た用向きというのは、じつは他の縣へ轉任になるように運動をしていまして、その椅子がきまればかなりの昇進になるわけなんです……。それはそうと、申し上げたいのはこんなことじゃなかつたわけ……。お望みとなら肝腎かなめのところを申し上げますが、じつは私はこれでもう三週間ちかくも、この町をうろつき廻っているんでして、それがどうやら、その用向き、つまり轉任の件ですな、それをわざわざどつちつかずに引っぱっているような工合なんですよ。そして實際の話が、そのほうの片がついたにしてもどつち道おなじことで、きつと片がついたことなんか自分で忘れちまつて、相變らずのこうした氣持でこのペテルブルグに居坐っているに違いありません。まるで自分の目當てを失つたような、しかもそれが却つて嬉しいような——つまりそういう現在の氣持で、私はうろつき廻つてゐる次第なんです……」

「という、どんな氣持でしょうな？」とヴェリチャーニノフは眉を顰めた。

客は落していた眼差を彼のほうへ向け、帽子をとりあげて、今はもうきつぱりと物に動ぜぬ面

持ちで例の喪章を指さした。

「つまり——私の氣持はこれです！」

ヴェリチャーニノフは茫とした眼つきで、その喪章と客の顔を交る交る眺めていた。と不意に彼はさつと頬を紅らめると、おそろしく動搖しはじめた。

「じゃ、あのナターリヤ・ヴァシーリエヴナが！」

「左様！ ナターリヤ・ヴァシーリエヴナです！ この三月のことでした……。胸を悪くしましてな、ほとんどあつという間で、ほんの二三カ月のうちのことでした！ そして私は——御覽のとおり一人ぼっちで生き残つたわけでした！」

言い終えると、客は感きわまつて両手を左右にひろげ、喪章のついた例の帽子を左手につまみあげたまま、少なくとも十秒ほど禿げた頭を低く垂れていた。

相手のこの様子と身ぶりとが、俄かにヴェリチャーニノフを立ち直らせたようだった。嘲けるような、むしろ挑みかかるような微笑が彼の唇をちらりとかすめた——が、それもほんの一瞬間に過ぎなかった。というのも、あの婦人（それは彼がじつに遠い昔に知り合ひだった婦人で、しかもすでに忘れ果てていたのだった）の死んだという報らせが、今やわれながら意外なほどはげしい感動を彼に與えたからだだった。

「まるで夢のようです！」と彼は最初に唇に浮かんだ言葉をそのまま呟やいて、「であなたは、なぜすぐいらして報らせてくださらなかったんです？」

「御同情くださって有難う。あなたが同情してくださるのを拜見して、しみじみ有難いと思えます。それも……」

「それも？」

「つまりその、こんなに永年お会いせずいたのに、私の悲しみにのみか私個人にさえ、じつに深い同情を寄せていただいて、ただただ感謝のほかはない——と、それを申し上げたかっただけですが。もつとも私だって別に親しいかたがたの氣持を疑っていたわけでもないんでして、當地でも探しさえずりや今すぐだって心からの親友が見つけ出せるわけです（早い話があのステパシ・ミハイロヴィチ・バガウトフですな）。しかしです、アレクセイ・イヴァーノヴィチさん、あなたとの御交際は（いやおそらく親友の交りでしたな——今なお感謝の念をもって思い出されてるところをみると）、何しろ九年間も絶えていたんですからなあ。あなたは私どもの町へは戻っておいでにならなかつたし、手紙のやりとりもなかつたのですし……」

客はまるで樂譜を見ながら歌でもうたうような調子で喋っていたが、そのあいだじゅう床へ眼を落していた。とはいえ絶えず上目を使うことを忘れなかつた。一方主人のほうも幾ぶんわれを取り戻した。

刻々に、ますます強まってく行くばかりの何やらすこぶる奇妙な印象を受けながら、パーヴェル・パーヴロヴィチの話に耳を傾け、その顔をじろじろ眺めていたが、相手がふと口をつぐんだ時、じつに突拍子もない入り亂れた考えが、いきなり彼の頭に湧きあがった。

「それにしてもなぜ私は、今の今まであなただということが思い出せなかつたんだろう？」と彼は急に活氣づいて叫んだ、「もう五度ばかりも往來で行き會つていながら！」

「左様、それなら私も覚えていますよ。いつもあなたのほうでひょっこり私の前に出てらっしゃるんです。——二度でしたか、それとも三度でしたかな……」

「そうじゃないですよ——いつもあなたのほうでひょっこり出てこられるのですよ、私のほうからじゃありません！」

ヴェリチャーニフは起ちあがると、いきなり大聲をあげて突拍子もなく笑いだした。パーヴェル・パーヴロヴィチはちよつと言葉をやめて、じつと彼を見つめていたが、すぐまた話をつづけた。

「あなたが私の顔が思い出せなかつたのはですな、——まづ第一にお見忘れだったのでしようし、それにまた、私はその後瘡瘡をやりましたのでね、その痕が少し顔に残っているせいでしょう。」

「瘡瘡ですって？なるほどそう仰しやれば、あの男には痘痕があつたつけ！ですがなんだってまたあなたは……」

「そんな目に逢いやがったかと仰しやるんですか？何がおこるかままったく知れたものじゃありませんよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。よくある圖ですよ！」

「ただどうも、馬鹿に滑稽ですな。まあとにかく先をおつづけください、先をおつづけください」

い、どうぞあなた！

「私は幸いあなたと行き會えたのですが……。」

「お待ちなさい！ なんだってあなたは今、『そんな目に逢いやがった』なんて仰しゃったんです？ 私のもっと丁寧な言い方を考えていたんですよ。じゃ、どうぞ先をつづけてください、どうぞ先を！」

どうしたわけか彼は次第に氣が晴れ晴れして來た。戰慄的な印象はまったく別の印象にとつて代えられた。

彼は足早に室内をいきつ戻りつしていた。

「私は幸いあなたと行き會えたのですが、そもそも當地へ、このペテルブルグへ出かけて參る時から、必らずあなたを探しあてようと思つていたわけでした。ところで、先ほどの話のくり返しになります、私はやっぱり御覽のとおりのみじめな氣持でして……三月さんがつからこつち私の心はすつかり臺なしになつちまつて……。」

「いや、なるほど！ 三月からこつちね……。まあちよつとお待ちなさい、あなたは煙草は召上がりませんか？」

「御承知のとおり、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナの存命中は。」

「そうそう、そうでしたね。だが三月からは？」

「卷煙草一本ぐらいならばね。」

「じゃ一つこれをどうぞ。まあそれをやりながら、先をおつづけてください！ どうぞ先を話してください！ じつにどうもあなたの話は……。」

そう言いさして、自分は葉巻に火をつけると、ヴェリチャーニノフは素早くまた寢臺に腰を据えた。パーヴェル・パーヴロヴィチは暫く黙つていた。

「ときに話は違いますが、あなたはひどく興奮してらっしゃるようですね。おからだのほうはどうなんですか？」

「へっ、私からだの工合なんか糞くらえですよ！」とヴェリチャーニノフは急にむかつ腹を立てた、「先をつづけてください！」

すると主人の興奮のていを見て、今度は客のほうがだんだん満足そうな自信ありげな様子になった。

「だが一體何を話しつづけることがありますでしょうか？」と彼は再び口を開いた、「まあ思つてもみてください、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、まずここに打ちのめされた一人の男がある、それもただ打ちのめされただけじゃなくて、謂わば徹底的に打ちのめされた男なんですな。つまり二十年にわたる結婚生活のあとで生活ががらりと一變してしまい、別にこれといった目當てもなしに、ほとんどまあ茫然自失のていで、しかもその茫然自失のなかに一種の陶醉をさえ見いだしながら、埃っぽい街なかを、まるで曠野クワツツを歩くような氣持でうろつき廻っている男なんです。とすれば、その私が、ひよつとして往來で知合いの人に出逢つた時、たといそれが心こゝろからの友達

だったにしたところで、やっぱりそうした瞬間——つまり茫然自失の状態にいる瞬間に、その相手に近づきたくないばかりに、わざと避けるようにするのは、こりやあまず自然の成行きじゃありませんか。ところがまた別の瞬間には——過去のことがいちいちはつきり思い出されてきて、そのつい昨日のことにように思われながら、しかも今に返す由もない過去の生活の目撃者であり関係者である誰かに會いたくて堪らなくなり、そのためもう胸がどきどきして抑えきれず、それが日中ならまだしも、夜陰をおかしてまで親しい友達のところへ駆けつける、そしてそのため相手をわざわざ夜中の三時過ぎに叩きおこすような羽目になる、といった氣持になることもあるのです。なるほど私は時刻については思い違いをしていましたが、友情については果して思っていたとおりだったのです。だって今このとおり過分なほどのおもてなしを受けていますものね。時刻のことはまったく一言もありませんが、實もって正直のところ、まだ十二時前とばかり思っていたのです。なにせ、こうした氣分にいるものですからね。まあ己れの悲哀の杯をのみながら、ついそれに酔い痴れたといった具合です。しかもこの私を打ちのめしたのは、じつは悲哀じゃなくて、むしろこの新しい境涯なんです……」

「それはそうと、あなたはなんて妙な言い廻しをなさるんでしょうな！」ヴェリチャーニノフは急にまたひどくまじめな氣持に返って、暗い顔色をして言葉をはさんだ。

「左様、いかにも言い廻しまで妙でしょうて……」

「しかもあなたは……冗談を言っておられるのでもない！」

「冗談ですと！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは悲しげな當惑の色を浮かべて絶叫した、「しかも選りに選って、こんなお話をしている時にですか……」

「ああ、それを仰しやらないでください、お願いです！」

ヴェリチャーニノフは起ちあがって、再び大股で歩きはじめた。

そうしてものの五分ほど過ぎた。客も椅子を起とうとして腰をもちあげたが、ヴェリチャーニノフが「そのまま、そのまま」と叫んだので、すぐさまおとなしく肱掛椅子に身を沈めた。

「それにしてもあなたは、じつに變りましたなあ！」とヴェリチャーニノフは急に相手の前に立ちどまって、再び口を切った。——不意にこの考えに愕かされたといったふうだった。「おそろしい變りですよ！ まったくひどい！ まるつきり別人ですなあ！」

「別に不思議はないですよ。何しろ九年ですからね。」

「いや、そうじゃない、年月の問題じゃない！ 外見からいうとあなたはまだそれほど變ってはいない。あなたの變ったのはほかの點ですよ！」

「それだって、九年という年月のせいだろうじゃありませんか。」

「それとも、この三月以來ね！」

「ふ、ふ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは人の悪い薄笑いを漏らした、「あなたもなかなか面白いことを考える人だ。……ところで不躰ながらお尋ねしますが、——そもそもわたしのどこがそんなに變りましたかね？」

「變つたのなんのつて！昔のパーヴェル・パーヴロヴィチさんはじつに手堅い、分別のある人でしたよ、じつに才物でしたよ。ところが今のパーヴェル・パーヴロヴィチさんときたら、まったくのやくざ者じゃありませんか！」

彼は極度に興奮状態に陥っていた。そういう状態になると、平生どんなに控え目な人でも餘計なことを口走りはじめるものである。

「やくざ者ですつて！あなたはそうお思いですか？そしてもう『才物』じゃなくなったと仰しゃるんですね？ふむ、才物にあらずか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチはさも楽しそうにしのび笑いをした。

「いや『才物』なんかどうでも宜しい！今じゃ賢こ過ぎてこまるぐらいかも知れませぬぜ。」

——『俺も随分と傲慢な人間だが、この野郎ときたら俺に輪をかけた傲慢者だわい！それに……それに一體、奴は何を目當てにやって來たんだらうな？』とヴェリチャーニノフは絶えず考えていた。

「ねえ、懐かしい何ものにも換えがたく貴いアレクセイ・イヴァーノヴィチさん！」と、客は突然はげしい興奮に驅られて、椅子のなかで身もだえした。「こんな話をしてなんになるもんですか？私たちは今社交界にいるわけじゃないんですものね。綺羅を飾った豪華な社交場裡にいるわけじゃないんですものねえ！われわれ二人は、心を許しあつた舊友なのだ、昔馴染なのだ、そして謂わば誠心誠意でもつて今ここに再會して、曾ての何ものにも換えがたいお互いの交誼を

偲び合い、且つはまた貴くも懐かしい環としてわれわれ二人の友情をつなぎ合わせてくれた亡妻のうえを、偲んでいるところですものねえ！」

そう言いながら、彼は自分の感情の大法悦にうっとりとなつて、またも先刻のようにぐつたりと頭を垂れ、今度は例の帽子で顔をかくした。ヴェリチャーニノフは嫌悪と不安を半々につきまぜた氣持で、その姿にじつと眼を注いでいた。

——『だが、もしもこれが單に奴のお芝居だったらどうなる？』という考えが彼の頭にひらめいた。『いいや、違う、斷じて違う！どうやら酔つ拂つてもいないらしい。——いやしかし、酔つ拂っているのかも知れんぞ。赤い顔をしてるからな。だが、よしんば酔つ拂つてにしたところで、——所詮はおなじことだ。一體なんであんなおべんちゃらを言い出したんだらうな？この野郎め、一體何が欲しいのかな？』

「あなたは覺えて、覺えておいでですか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは少しずつ帽子を顔から離しながら、ますます深く追憶に溺れこんで行くらしい様子で叫んだ、「われわれのやつた郊外の遠乗りや、夜の集まりや、それからまた、あの客好きなきセミヨン・セミヨンヴィチ閣下のお宅の氣のおけない夜會で、舞踏をしたり罪のない賭事に興じたりしたことを、あなたは覺えておいでですか？また私ども三人で、讀書に靜かな宵をすごした時のことを？それから、私どもが初めてお近づきになった時のことを？あの朝あなたは何か用向きのことで、問合せに私のところへおいでになつたのでしたね、そして、いささか語氣を荒らげそうな雲行きになつた

時、不意にあのナターリヤ・ヴァシーリエヴナがはいって来たもので、十分後にはもうあなたは家のもの同様の、心を許しあった友達になつてしまわれたのでしたね。そして、それからまる一年というもの、——ちょうどそれ、トゥルゲーネフ氏の『田舎夫人』という芝居そっくりで……」

ヴェリチャーニノフはゆっくりと歩を移しながら、床に眼を落したまま、焦躁と嫌悪の情をもつて相手の言葉を聴いていた。とはいえ、じつと聴き入っていたことは事實である。

「私はその『田舎夫人』という芝居のことなんか、ついぞ思つてみたこともありませんでしたよ」と、彼はいささか度を失つて相手を遮つた、「それにあなたは、昔はついぞそんなめそめそした聲で話をしたことも、またそんな……よそゆきの文句で喋つたこともなかつたですね。一體どうしようと思つて仰しやるんで？」

「まったく、私も昔は黙りこみがちの男でしたね、つまり今よりは無口でしたな」とパーヴェル・パーヴロヴィチはいそいで相手の言葉を引きとつた、「知つてのとおり、昔の私は亡妻が何か話しはじめると、むしろ聴き役に廻るほうが好きだったものです。あなたも覚えておいででしょう、まったく家内の話は機智に富んだいい話でしたものね……。ところで、その『田舎夫人』——とりわけ、あの『ストウペンヂェフ』のことですが、なるほどあなたが思つてみたこともないと仰しやるのはごもつともです。なぜつて、あの話は私と亡妻が二人きりでした話でしたものね。つまりあなたが發つて行つてしまわれたあとで、追憶にふさわしい静かな折々に、あなたのことを思い浮かべながら、——私どもの初めてお目にかかつた時のことをあの芝居に引きくらべ

て考え考えしたのでした。……だつて本當にそっくりそのままですものねえ。ことに、あの『ストウペンヂェフ』ときたらもう……」

「なんです、その『ストウペンヂェフ』つていうのは、くそ面白くもない！」とヴェリチャーニノフはどなつて、思わずどしんと足踏みをした。この『ストウペンヂェフ』という言葉が耳にすると同時に、ある不安な追想が彼の胸に翳りはじめ、そのためもうすっかり混亂してしまつたのである。

「いや、その『ストウペンヂェフ』というのは、その芝居の、芝居の登場人物なんですよ。つまりあの『田舎夫人』という芝居で『夫』の役割をする人物なんです。」とパーヴェル・パーヴロヴィチは甘つたるい猫撫聲を出した、「ですがね、この話はもう私どもの尊くもまた美しい追憶の、まったく別の時代にぞくするものなんです。というのはつまり、それはあなたがすでにお發ちになつたあとのこととして、そのころはもうステパン・ミハイロヴィチ・バガウトフという人がちょうどあなたそっくりな友人を、私どもに恵んでくださつておられたわけでした、これはそれ以來まる五年のあいだつづいたのでした。」

「バガウトフですつて？ それはどういう人です？ そのバガウトフというのは何者なんです？」と、ヴェリチャーニノフはいきなり化石したように立ちどまつてしまつた。

「バガウトフ、——詳しく言えばステパン・ミハイロヴィチ・バガウトフですが、これはあなたが發たれてから、ちょうど一年たつて、私どもに友情を恵んでくださった人です。……ちょうど

どあなたとおなじ友情をね。」

「ははあ、あいつか、そんなら私も知っている！」とヴェリチャーニノフはやつと思ひ當つて叫んだ、「バガウトフ！ そうそう、やっぱりあなたの役所に勤めていた……」

「そうです、そうです！ 知事の官房に勤めていたんです！ ペテルブルグの最上流社會からやつて来た、じつに優美な青年でしたよ！」と、感きわまつてパーヴェル・パーヴロヴィチは大声を立てた。

「そう、そう、まったくそう！ 俺は何をばやばやしてたんだ！ するとあの男もやつぱり……」

「そうです、あの男もやつぱり、そうなんです！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、主人がうっかり口を滑らした言葉を引きとつて、相變らずの感激口調でくり返した、「あの男もそうだったんです！ その時ですよ、私どもがあの客好きのセミヨーン・セミヨーン・ヴィチのお宅の私設舞臺で、例の『田舎夫人』を上演したのは。——ステパン・ミハイロヴィチは『伯爵』の役を、私は『夫』を、それから亡妻は『田舎夫人』をそれぞれ演ずることになっていたんですが、——ところが亡妻の主張で私は『夫』の役をとりあげられちまった次第なんです。ですからつまり私は『夫』の役は演じなかつたんですが、——まあ、その役どころじゃないといったわけではな……」

「こりや大笑いだ、あなたがストウペンヂエフになるなんて！ あなたはなんといったつてパ

ーヴェル・パーヴロヴィチ・トルーソツキイですよ、ストウペンヂエフなんかじゃないさ！」と興奮のあまり身を顫わさんばかりの勢いで、ヴェリチャーニノフははずけずけと遠慮會釋もなしに言つてのけた。「それはそうと、そのバガウトフはここにいますぜ、このペテルブルグにいますぜ。私はこの春あの男を見かけましたよ、この眼でちゃんね！ 一體なぜあなたは、あの男のところへも會いに行かないんです？」

「いや、これでもう三週間というものの、ほとんど毎日のように訪ねて行くんですが、その都度會つてもらえませんのさ！ 病氣で會えん！ とこう言うんです。ところがどうでしょう、あの人が本當に病氣で、しかもきわめて重態だということが、手近かな人の口からわかつたじゃありませんか！ 何せ六年越しの親友ですからねえ！ ああ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、このことはくり返して申し上げますがね、人間こうした氣持でいると、時にはいつそ本當に地の底へ沈みこんでしまいたいといった氣になるかと思えば、また別の瞬間には、誰でもいい、昔の生活のそれ、謂わばその目撃者とか、関係者とかいった人間を探しだして、いきなりこう抱きついて、ただもう泣いて見たいような——まったくだもう聲をあげて泣いてみたいような、そんな氣にもなるんですよ……」

「ところで、まあ今日はここらでお開きにしようじゃないですか、どうですか？」とヴェリチャー

ニノフは鋭い語勢で言い放つた。

「いや、結構です、結構すぎるくらいですよ！」そう言つてパーヴェル・パーヴロヴィチは即

座に席を起った、「もう四時ですものね。それに、何しろこんな身勝手なことですわ。さういふお寝みのところをすっかりお騒がせしてしまつて……。」

「じゃあ、私のほうからもそのうちお訪ねしましょう、きつとお訪ねしましょう、きつとお訪ねしますよ。そしてゆっくり落着いてお話を承ねるとしましょう。……ところで、さつくばらんのところを伺いたいんですが、あなたは今夜酔つておいでじゃありませんかね？」

「酔っている？ 飛んでもない……。」

「こちらへお出かけの前か、それともその以前に、召上がったんじゃないやありませんか？」

「これはまあ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、あなたははつきり熱病にかかつておいでですか。」

「とにかく明日伺いましょう、早目に、そう一時までにね……。」

「もう夙^{あき}から気がついていたんですが、あなたはどうもまるで熱に浮かされてらっしゃるようだ——さも會心の至りといった調子でパーヴェル・パーヴロヴィチは相手を遮つて、おなじ話題に執着した、「本當になんともお恥かしい次第です、私がこのとおりの口不調法なもので、そのため……。いや、もう失禮しましょう！ あなたも横になつて、少しお寝みになつてください！」

「だが、あなたはなんだって宿所を仰しやらないんです？」ふと氣づいて、ヴェリチャーニフは相手の後ろ姿に浴せかけた。

「おや、申し上げませんでしたか？ ポクローフスキイ・ホテルにおりますよ。」

「ポクローフスキイ・ホテルというと？」

「ポクロフ寺のすぐそばです。あそここの横町にあるんですが、——さてと、なんと叫びたかなあ、あの横町は。おまけに番地まで忘れちまつた。とにかくポクロフ寺のすぐそばですよ……。」

「いいです、探しましょう！」

「じゃどうぞいらしてください。」

彼はもう階段にかかつていた。

「お待ちなさい！」とまたもやヴェリチャーニフは叫んだ、「あなたは私をまいて逃げるんじゃないでしょうね？」

「と仰しやるとどういう意味です、その『まいて逃げる』というのは？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは階段の三段目からくりとこちらを振り向いて、眼をまるくして、微笑みながら訊き返した。

返事の代りにヴェリチャーニフはばたんとドアをしめて、念入りに錠をおろし、そのうえ掛金をしっかりかけた。部屋に戻つて來ると、まるできたない物にでもさわつたように、ぺつと唾を吐いた。

部屋のまんなかにももの五分ほどじつと立ちつくしていたが、やがて上着ひとつぬがずにどきどきと寝臺に身を投げると、たちまちのうちに寝入ってしまった。消し忘れた蠟燭はそのまま卓子のうえで、じりじりと燃えつきて行つた。

四 妻と夫と情夫

彼はぐっすり寝こんで、九時半きっかりに眼をさました。素早く半身をおこすと、そのまま寝臺のうゑに坐りこんで、すぐさま考えはじめた——『あの女』が死んだことについてである。

彼女が死んだということをしきなり昨夜聞かされた時の、あの全身を揺るようなげんげしい感銘は、いまだに彼の身うちに一種の胸騒ぎ、いやむしろ痛みをとどめていた。この胸騒ぎ、または痛みは、昨夜パーヴェル・パーヴロヴィチがいたあいだだけは、ある奇妙な考えのおかげで一時的に和らげていたのであるが、それが今眼がさめるとともに、九年前にあったこと一切が、極度にありありと、俄かに彼の眼の前に描き出されたのである。

その女というのは、『あのトルーツキイという男』の今は亡き妻のナターリヤ・ヴァシーリエヴナで、彼がある所用で（それもやはりある遺産相続にからまる訴訟沙汰であったが）まる一年もT市に滞在していた時彼が戀し、その情夫になつていた女であつた。——もちろん用事そのものは、そんなに長い滞在を要するものでもなんでもなかつたので、長逗留の本當の原因はこの情事にあつたのだ。まったくこの情事といい、またその際の彼の愛情といい、すこぶる強烈に彼を支配していたもので、彼はまるでナターリヤ・ヴァシーリエヴナの奴隷みたいになつていたほどだつた。だからこの女が、ほんの假初の氣まぐれからそうしてくれと言いだしたなら、彼は即

座にどんな奇怪きわまる馬鹿げたことでもやつてのける氣になつたに相違ないのである。これはほど首つたけになつたことは、あとにも先にもついでないことだつた。

その一年の終りがきて、どうしても別れなければならぬことになる、ヴェリチャイニフはその悲しい日の近づくにつれておそろしい絶望にとらわれてしまつた。まったく身も世もあらぬ絶望で、その別離はほんの僅かのあいだですむあてがついていたにもかかわらず、いつそナターリヤ・ヴァシーリエヴナを夫の手から引つさらつて駈落ちしよう、夫も世間も棄てて一緒に外國へ逐電してしまおう、とそんな話をナターリヤ・ヴァシーリエヴナに持ちだしたほどだつた。ところがこの婦人の冷笑と小ゆるぎも見せぬきっぱりした態度に逢つて（もつとも彼女は初めのうち、このもくろみにまったく賛成していたのであつたが、思うにそれは單に退屈まぎれのほんの氣なくさみのつもりだつたに違いない）、やつと思いとどまつて、餘儀なくひとりで立去つた次第だつた。それだのにまたどうしたことだろう？ 別れてまだふた月もたたぬうちに、彼はもうペテルブルグで、彼にとつては永久に解けぬ謎である次のような疑問を、われとわが身に掛けていたのであつた。『俺は本當にあの女を愛してたのだからか、それともあれはみんな、ただの「出來心」にすぎなかつたのかしら？』しかもこんな疑問が彼の胸に湧いたのは、何も彼が浮氣なたちだつたせいでもなければ、また別に新しい色事かはじまつていたせいでもなかつた。ペテルブルグに舞い戻つての最初のふた月というもの、彼は一種自己忘却みたいな状態で暮らしていたので、すぐさま以前の交際仲間へ吸い寄せられ、女などはいくらも見ることがあつたとはい

え、その一人だつてろくろく眼にはいらぬような始末だつた。それはそうと、たとい今言つたような疑問がいくら胸中を往來しているにしろ、一たんT市へ舞い戻つたら最後、途端にまたもやあの女の蕩かすような魅力の俘とりこになつてしまふだらうことは、彼もちゃんと心得ていたのである。それから五年たつてのちも、彼のこの信念に變りはなかつた。とはいえ五年後となつては、彼はもはやそうした自分を意識するのが癪にさわるようになり、『あの女』のことを思い出すたびに憎悪の念を感じずにはおられなかつた。彼はTですごした一年を思うと氣恥かしかつた。このヴェリチャーニノフともあろうものが、あんな『痴情』にとらわれるなんて、あつてよいことか——彼はわれながら腑に落ちないのだつた。で、あの戀情についての追憶の一切は彼にとつて不面目としか思えぬようになってしまい、彼は思い出すたびに危く涙がこぼれそうなど赤面し、きりきりと良心の苛責を覚えるのであつた。もつともそれからさらに數年たつたころは多少は心の平靜を取り戻すことができた。彼はあの出來ごとなどはすっかり忘れようと努力し、——また實際にもほとんど忘れかけていた。そこへ突如として、九年後の今になつて、昨夜ナターリヤ・ヴァシーリエヴナの計報を耳にしたのを機會しあはせに、再びあの當時のことが俄かに奇怪な色彩をもつて、眼前によみがえつてきたのである。

さて今、雜然と腦裡にむらがり寄る亂れた想念をいだきながら、寢臺のうゑに坐りこんでいる彼には、ただ一つのことかはつきりと感得され意識されるのであつた。それは、昨夜あの報らせを耳にした時は、あれほどまでに『全身を揺るがすばかりの感銘』を受けたにかかわらず、それ

でいて彼女の死そのものについては、案外すこぶる平氣だということであつた。

『一體俺は、あの女を可哀そうだとも思わないのだらうかしら？』

と彼は自分に訊いてみるのだつた。もつとも、今になつてはもはや彼があの人に憎悪を感じず、したがつてまた今までよりは一そう公平な、當を得た判断をくだせることは事實であつた。そして、これは何も今更はじめたことではなかつたが、別れて九年の歲月の流れるあいだに形成された彼の意見によると、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナは、田舎の『上流』社會にざらに見られる平凡な貴婦人の一人にすぎず、そして、更に彼の言葉を借りれば、『まったくのところただそれだけの代物だつたかも知れんのさ。それをこの俺ひとりで勝手にあんな幻影の女を作り上げていたのかも知れんのさ』なのである。とはいえその一方では、この自分の見解には何か間違ひがありはしまいかという疑念も、絶えず頭を離れなかつた。そして今もその疑念が萌したのである。それにまた、事實もこの見解と矛盾するのである。現にあのバガウトフという男だつてやはり、何年かのあいだ彼女と關係を結んで、しかもやつぱり『蕩かすようなあの女の魅力の俘』になつていたらしいではないか。あのバガウトフは、正銘のペテルブルグの上流社會出の青年だつたし、且つ彼が『なんの取柄もない男』(というのはヴェリチャーニノフが彼に加えた評言であるが)であつて見れば、彼が立身出世できる世界は、ペテルブルグを除いてはほかにないはずである。しかるにその彼が、ペテルブルグという自分にとつては掛けがえのない地の利を抛擲してまで、T市で五年の歲月を空費したのも、誰ゆえかと言へば、ほかならぬあの女のためなのだ！しか

もその彼がやがての果てにペテルブルグへ舞い戻ったのも、もとをただせばやっぱり自分と同様、『弊履のごとく』振り棄てられたからに相違ないのだ。してみるとあの女にはやっぱり、何かしら普通の女には見られぬ——男を惹きつけ、奴隷にし、心のままに操る一種の力が具っていたのだ！

とはいえ、またその一方では、それほど男の心を惹きつけ奴隷にするほどの腕のある女とも思えなかった。つまり『どっちかという美人のほうじゃなかったし、ひよつとしたら不器量なほうだったかも知れない』のである。ヴェリチャーニノフが彼女を知った時は、もう二十八になっていた。大して美しいとは言えぬ顔ではあったが、それでも時として氣持のいい生氣を帯びて輝くこともあった。だが眼つきに難があった。その眼差しには何かどぎつすぎるところがあらわれていたのである。それにひどく瘦せ形だったし、知育のほうも貧弱きわまるものであった。もつとも才智にかけてはなかなか優秀で、むしろ俊敏なほうであつたけれど、それなりにまずきまつて偏頗な物の見方をしていた。ものごしは田舎町の婦人のそれで、おまけに正直のところ、いろんなてくだを弄する癖があつた。趣味は洗煉されてはいたけれど、主としてそれは衣裳の着つけにしかあらわれなかつた。はきはきした氣性で、ともすれば人を抑えたがる傾きがあつた。何ごとにもまれ、彼女といい加減なところで妥協することはできぬ相談で、『一切か然らずんば無』だつた。困難な問題にぶつかった場合に彼女の見える不屈さと根つよさには、驚嘆すべきものがあつた。生れつき鷹揚なところがあつたが、一方それと並んでほとんど常に、底の知れないほど意

固地なところもあつた。この奥さんとは議論してもなんにもならなかつた。二々が四などということではてんで受けつけないからである。いついかなる場合でも、自分が間違つていたとか自分が悪かつたと思つたことはついぞなかつた。しょつちゅう、一々數え切れぬくらい夫を裏切つていながら、それが少しも良心の重荷にはならない女だつた。ヴェリチャーニノフ自身が彼女にくだした比喩によれば、彼女は、自分が本物の聖母だと思ひこんでいる『鞭身教の聖母』みたいなもので、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナは、自分の一舉一動に極度の自信をいだいていたのである。情人に對しては忠實であつたが——それも厭きのこないうちだけのことだつた。情人を苦しめることも好きだつた代りには、その報酬を與えることも好きだつた。型からいえば情熱的で、残酷で、肉慾的な女だつた。彼女は淫蕩な生活を憎んで、ほとんど信じられぬほどにいきり立つてそれを非難するのだったが、そのくせ自分も淫蕩な女だつたのである。しかもどんな事實を並べ立てたところで、彼女に自分の淫蕩さを氣づかせることはとてもできない相談だつた。『あの女はきつと「本心から」それを知らずにいるんだ』と、まだT市にいたころヴェリチャーニノフはよく考へたものである。(ついでに言っておくが、そういう彼だつて彼女の淫蕩生活のお仲間だつたのである。)

『つまりあの女は』と彼は考へるのだった、『まるで不貞の妻たらんがために生まれてきたような女の一人なのだ。ああした女というものは、決して老嬢オールド・ミスになんかなれるものじゃない。そういう要求から必らず嫁に行く——これがああした女の自然法則なのだ。そこで夫が最初の情人

になるわけだが、それも婚禮が済んでからときまつている。實際あつてあいほど巧く手取り早く嫁に行く連中はないものな。さて最初の不貞については、必らず夫のほうに罪があるものだ。といった調子で、極度の誠心誠意さで次々に男をこしらえる。だからあつた女はいつまでたつても、相變らず自分が絶対に正しいもの、したがつてもちろん自分には罪とがなんぞ全然ないものと思つているのだ。』

ヴェリチャーニノフは、そうした型の女が實際にいるものと固く信じこんでいた。が同時にまたその一方では、女に對應するような夫、つまりそうした型の女に對應するのを唯一の使命として生まれてきたような夫の型も、やはり存在するものと信じていた。彼の見解によれば、そうした夫の存在の意義は、謂わば『永遠の夫』たるところに、或いはもつと的確に言えば、一生涯ただただ一個の夫たるにとどまつて、それ以外の何ものでもないところに存する。『この種の男は、よしんば独自の立派な性格の持主であつたにしても、ただちに自分の妻の腰巾着に變じてしまふのだ。こうした男の主要な特徴は、一種めかし立てていふことである。太陽が輝かずにはいられないと同じ理窟で、こうした男は寢取られ男にならずには濟まない。しかし彼はその事實に決して感づく折がないばかりか、自然の法則によつて一生涯決して悟れぬことになつてゐるのだ。』といったわけでヴェリチャーニノフは、この二つの型の存在することは固く信じて疑わず、そしてT市にいたころのパーヴェル・パーヴロヴィチ・トルソツキイこそは、その一つの型の

完全な代表的人物だと確信してゐたのである。昨夜のパーヴェル・パーヴロヴィチが、Tにいたころ彼の知つていたパーヴェル・パーヴロヴィチではなかつたことは、もちろん申すまでもない。とても信ぜられぬほどの變りようだと彼は思ったが、とはいへヴェリチャーニノフは、彼が變らざるを得なかつた次第も、またそれがまつたく自然だということも、よく知つてゐたのである。トルソツキイ氏なる人物が、あの昔のままの人間でいられるのは、ただ妻の存命してゐるうちだけのことで、今となつてはあの男はもう、いきなり中有にはうり出された完全體の破片——つまりなんともたとえようもない、何かしら奇態な代物にすぎないのである。

Tにいたころのパーヴェル・パーヴロヴィチについては、次のようなことがヴェリチャーニノフの記憶に残つていて、彼は今それを思い出したものである。——

『もちろん、T時代のパーヴェル・パーヴロヴィチは單に夫にすぎず』それ以外の何ものでもなかつたのだ。よしんば彼が夫たると同時にまた、官吏であつたに似たところで、それは官職なるものが彼にとつて、謂わば夫婦生活の義務の一つとなつてゐたからにはかならない。彼自身としてもすこぶる勤勉な官吏ではあつたが、底を割つていへば彼のその勤務も、女房のためであり、また彼女のT市における社交上の地位のためにはかなならなかつたのである。彼はそのころ三十五歳で、幾らかの財産——といつても決して馬鹿にはならない財産があつた。役所では別にとり立てていうほどの手腕も示さなかつたが、さりとして無能ぶりを發揮したわけでもない。縣内の上役と見れば誰彼の選り好みなしに交際つて、すこぶる受けがいいという評判であつた。ナターリ

ヤ・ヴァシーリエヴナはT市の人々の尊敬をほしきままにしていた。とはいえ、別段それを有難がるでもなく、當然受くべき敬意を受けるまでだといった顔をしていた。しかし自宅での客のもてなしはすこぶる手に入ったもので、おまけにパーヴェル・パーヴロヴィチまでが彼女のお仕込みのおかげで、縣下のどんな高官貴紳をもてなす場合でも、恥かしくないだけの行儀作法を身につけていた。おそらく（とヴェリチャーニノフには思われた）、この男には相當の才智もあつたのだらう。ただし、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナは亭主がお喋りをするのをあまり好まなかつたので、せつかくの才智も大して人眼にふれる機会がなかつたのである。そのみならず彼には、いろんな悪いところもある一面、さまざま美質も持つて生まれていたらしい。ただ美質のほうはいつも陰にかくれてばかりいて表面にあらわれず、一方悪い性癖のほうはほとんど完全に抑壓されていたとみえる。例えばヴェリチャーニノフは、トルソツキイ氏には時として、親しくしている連中を嘲笑したがる傾向の生ずることのあつたことを記憶している。しかしこれは固く禁ぜられていたのである。また時には何か面白いことを言いだすのが好きであつたが、これにもまた監視の眼が光っていて、何かたわいのないことをてみじかに話すことしか許されなかつた。彼はまた家庭の外での友人同志のつきあいに加わつて、おまけに酒杯をともしたがる傾向があつた。しかしこのあとのほうは、未然のうちその禍根を絶たれていたといつてよい。しかも特筆に値する事實は、よそ目には誰一人として、この亭主が女房の尻に敷かれていと氣づく者がなかつたことである。ナターリヤ・ヴァシーリエヴナは打ち見たところ、まったく従順な妻に見

えたし、のみならず自分でもそう信じていたかも知れない。パーヴェル・パーヴロヴィチのほうでは、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナに首つたけだつたかも知れないが、そんな氣振りは誰一人の眼にも映らず、また見ようとしてもおそらくは不可能だつたに違いない。これもやはりナターリヤ・ヴァシーリエヴナが家のなかで然るべく采配をふるつていたからである。

T市にいた一年のあいだにヴェリチャーニノフは一再ならず、こんな問いを自分にかけて見たものである。——一體あの亭主は、自分の女房と俺との仲を、少しも疑つてはいないのだからか？と。彼は三四度このことについて、本氣でナターリヤ・ヴァシーリエヴナに問いただしたことがあつたが、返事はいつも同じで、夫は何一つ感づいてはいないし、またこれから先も感づくことは決してありはしない、それに『こうしたことがらは、あの人の知つたことじゃありませんもの』と、幾ぶん心外だといった語調で答えるのであつた。彼女についてはまだ特筆すべきことがある。それはパーヴェル・パーヴロヴィチのことをいぞ嘲笑つたことはなく、彼がどんなことを言つても、それが滑稽だとも大してみつともないことだとも思わず、もし誰か他人に對して何か無禮でも働こうものなら、極力彼をかばつたに相違ない。子供がないものだから、彼女が社交婦人型に變つて行つたのはむしろ自然の數であつたが、さりとて彼女にとっては自分の家庭も無くては叶わぬものだったのである。社交界のさまざまな楽しみに至心を打ちこんでゆくことの決してできない女で、家にいるときは家事や手藝にいそしむことがすこぶる好きだつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは昨夜、T市にいたころ靜かな晩を讀書にすごしたことを追想していた

が、それは實際よくあつたことで、ヴェリチャーニノフが讀み役に廻ることもあれば、パーヴェル・パーヴロヴィチが引き受けることもあつた。これはヴェリチャーニノフにとつて意外だったが、トルーソツキイは朗讀がすこぶる上手だった。そういう時ナターリヤ・ヴァシーリエヴナは何か針仕事をしながら、しみりとなごやかな面持ちで聴いているのが常だった。讀まれたのはディケンスの小説とか、ロシアの雑誌に載っているものとかだったが、時には何か『堅いもの』が讀まれることもあつた。ナターリヤ・ヴァシーリエヴナはヴェリチャーニノフの教養の高さに敬服してはいたが、といて別に口に出してそれを言うでもなく、謂わばもうできあがつて済んでしまつた事實として、別に今さら言うものはないといった扱いをしていた。一般に話が書物のこととか學問のことになると、それは有益なことかも知れないけれど自分の知つたことじゃない——といったふうな冷淡な態度をとるのが常だった。一方パーヴェル・パーヴロヴィチは時としてそうした話にかなりの熱を示すことがあつた。

T市での情事は、ヴェリチャーニノフのほうがつつかりのぼせあがつて、ほとんど狂氣せんばかりになつたところで、いきなり破れてしまつた。自分が『弊履のごとく』振り棄てられたとはつゆ氣づかずに彼が發つて行くようにと、萬事は巧みに仕組まれていたとはいへ、底を割つて言へば、手もなくほいとほうり出されたのに違ひなかつた。それにはこんないきさつがあつた。——彼が立去ると月半ほど前のこと、幼年學校を出たばかりの子供みたいな砲兵士官がひよつこりT市にあらわれて、トルーソツキイ家へ出入りをするようになった。そこで三人組が變じて四人

組になつたのである。ナターリヤ・ヴァシーリエヴナはこの乳くさい少年士官を愛想よく迎え入れたが、それはまるで子供でもあやすような態度だった。ヴェリチャーニノフは何一つ完全に氣づかずにいたし、またそのころだしぬけに一時的とはいへ、とにかく別れ話を切り出されたのであつて見れば、感づくの感づくかぬの騒ぎではなかつたのだ。その時、彼が是非とも大至急にT市を立退かなければならぬ理由として、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナが數えたたてた無慮無數の理由のなかには、どうやら妊娠したような氣がするということもはいつていた。だからよし三月でも四月でも、とにかく至急に一時身をかくしてもらわなければ困る、そうすれば後日になつて妙な噂が立つたにしても、何ぶん九カ月もたつたあとのことであつて見れば、夫が何かの疑いをはさむ餘地がよほど少なくなるはずだ——というのである。どうもかなり牽強附會な論法であつた。ついでヴェリチャーニノフのほうから、いつそパリかアメリカへ駆落ちしようという亂暴な提案が持ち出されたのち、彼は孤影悄然とペテルブルグへ立去つたのだった。『何の疑念もいだがずほんの一時のつもりで』——つまりたかだか三月ぐらいのもりだったのである。それでなかつたらたといどんな理由を並べたてられ、どんな理窟で押してこられたところで、彼は立去らなかつたに相違ない。それからちょうど二カ月して、彼はペテルブルグでナターリヤ・ヴァシーリエヴナからの手紙を受取つたが、それには二度と再び歸つて来てくださるな、今ではもう他の男を愛しているからとあつた。また例の妊娠については、あれは自分の思い違ひだつたとしてあつた。今さら思い違ひだなどと報らせてもらうまでもなく、彼にはすでに何もかも明瞭だつた。例の少

年士官を思い出したのである。という次第で、事は永遠に終りを告げてしまった。それからまた数年して彼は、バガウトフなる者が登場して、まる五年のあいだ居坐っていたという話をふと風の便りに耳にした。今までになくこの關係が長つづきをしたという事實について、彼がくだしたいろんな解釋のなかには、てつきりあのナターリヤ・ヴァシーリエヅナももうよほど老けてしまったのだな、それで昔よりしつこくなってるんだな、という考えも加わっていた。

彼は一時間ちかくも寢臺のうえに坐り込んでいた。やがてふとわれに戻ると、ベルを押ししてマ・ヅラに珈琲を持って來させ、急いで飲みほし、着物を着て、十一時きっかりに宿の門を出てポクロフ寺をめざした。例のポクロフスキイ・ホテルを探そうというのである。そのポクロフスキイ・ホテルなるものについても、今ではもう昨夜とは違った、一種特別の謂わば朝の感じともいふべきものが彼の胸に形作られていた。なかんずく昨夜の自分のパーヴェル・パーヴロヴィチに對する態度を思うと、われながら幾ぶん氣恥かしいほどだった。まずこの氣持をなんとか解決しなければならなかった。

戸口の錠前についての昨夜のいろんな幻想は、偶然の暗合だとか、パーヴェル・パーヴロヴィチが酩酊のていだったこととか、まだなんとかかんとか理窟を持ち出して説明をつけていた。ところがなんだつて自分が今、あの女のもとの亭主のところへ、せつかくこうして二人のあいだにあつたことは残らずきわめて自然にひとりでに結着がついてしまっているものを、今さらまた新しい關係をつけに出かけて行くのか——ということになると、正直のところ彼にははつきりした解釋がつき兼ねるのだった。彼は何物かに吸い寄せられているのだ。あの時彼は何か一種特別な印象を受けとり、その印象のお蔭で、こうして吸い寄せられて行くのだ。……

五 リーザ

パーヴェル・パーヴロヴィチは『まいて逃げ』ようななどは考えてもいなかったし、それにまたなんだつて昨夜ヴェリチャーニノフが彼にそんなことを訊いたのやら、それは神様しか御存じあるまい。何しろ當の本人にも、どうした譯やらさっぱり見當がつかないのである。ポクロフ寺のそばの小店で行き當りばつたり尋ねて見たら、ポクロフスキイ・ホテルならついそのあの横町だと教えてくれた。そこでホテルに行くと、トルーソツキイさんは、このごろこの中庭につき出ている翼屋のマリヤ・スイソエヅナの家具つきの部屋に『御逗留中で』という挨拶だった。鼻のつかえそうな、ぼちゃぼちゃと水の撒いてある、ひどく不潔な石の梯子段をつたわって、その教えられた部屋のあるという翼屋の二階へあがつて行くと、彼はふと人の泣聲を耳にした。泣いているのは七つか八つの子供らしかった。いかにも苦しそうな泣聲で、押し殺そうとしながら、しかもあとからあとからとこみ上げてくる歎歎なのである。それとともに地團駄を踏む音と、やはり押し殺してはいるが、はげしい怒りに燃えたどなり聲——わざと噎れた裏聲を出してはいるけれど、明瞭に大人の男聲である——が聞こえた。その大人は泣き叫ぶ子供を鎮めようとしてい

るらしく、その泣聲が外に漏れるのをひどく苦にしている様子だったが、そのくせ自分のほうが子供よりひどくがなり立てるのだった。それは無慈悲などなり聲で、子供のほうはまるで泣きながら赦しを願っている風に思えた。階段をあがりきると小さな廊下で、兩側にそれぞれ二つの戸口があった。ヴェリチャーニノフはそこで、でっぷり肥った、背の高い、なりふり構わず髪をばさばさにした女房に逢ったので、パーヴェル・パーヴロヴィチの住居はどこかと尋ねて見た。すると彼女は、泣聲の漏れてくる戸口を指して見せた。この四十女のでっぷりと赤黒い顔には、何か忌々しげな色があった。

「ほれまあ、大した道楽もあつたものさあね！」そんな口小言をいいながら、女はさつさと梯子段のほうへ行つてしまつた。ヴェリチャーニノフはノックしようと思つたが、思い返していきなり案内もなしにパーヴェル・パーヴロヴィチのドアをあけた。あまり廣くはない部屋には、粗末な色塗りの家具が亂暴に、しかし豊富に並べ立てられてい、その真中にパーヴェル・パーヴロヴィチが服を着かけたところと見え、まだ上着もチョッキもなしの姿で突つ立つていた。興奮のあまり満面に朱を注いで、どなりついたり、手ぶり身ぶりを使つたり、そのみかおそらく（とヴェリチャーニノフには思われた）足蹴にかけてまで、まだ八つばかりのいたいけな女の子を、押し黙らせようとしているところであつた。女の子にはお嬢さん然と黒い毛織の短い子供服が着せてあつたが、一見してみすぼらしい代物に違ひなかつた。彼女はまぎれもないヒステリーの發作をおこしているらしく、ヒステリックにしきりにしゃくり上げながら、兩手をパーヴェル・パ

ーヴロヴィチのほうへ差し伸べている。その様子は、彼のからだにすがりつき、抱きついて、何ごとかを哀訴し哀願しようとしているらしいふうである。と、一瞬にしてがらりと場景が一變してしまつた。客の姿をみると、女の子はきやつと一こえ叫んで、隣りの小部屋へ矢のような勢で駆けこんでしまふし、パーヴェル・パーヴロヴィチのほうは一瞬間、思い惑うふうに見えたが、たちまち顔じゅうが例の微笑に溶けこんでしまつた。ちょうど昨夜、階段口に突つ立つていた彼の鼻先へ、いきなりヴェリチャーニノフがドアをあけはなした時に見せた微笑と、寸分たがわぬ微笑であつた。

「これはアレクセイ・イヴァーノヴィチ！」と彼は意外に堪えんといつた聲で叫んだ、「まさかあなたがおいでくださるうとは……とにかくまあこちらへ、こちらへどうぞ！ま、その安樂椅子におかけください、それともこつちの肱掛椅子になさいますか。私はちよつと御免を蒙つて……」

そして彼は、チョッキを着るのを忘れて、いきなり上着をひっかけた。

「まあ他人行儀はおよしなさい、どうかそのままです」と言いながら、ヴェリチャーニノフは木の椅子に腰をおろした。

「いや、その段じゃありません、とんだ恰好を御覽に入れて。さあこれでどうやら恰好がつきました。おや、あなたはまたなぜそんな隅っこへなんぞ？さあこちらへ、この肱掛椅子にどうぞ、テーブルのそばへお寄りなすつて……。いやまったく思いがけませんでしたよ、あなたがい

らしてくださいさうとは！」

そう言いながら、彼のほうでも籐椅子の端っこへ腰をおろしたが、ヴェリチャーニノフと肩を並べる位置にはなく、この『思いがけぬ』客の顔がよく見えるように、長椅子をくるりと半回轉させたのである。

「思いがけないなんて、なぜです？ ちょうど今ごろお伺いすると、昨夜ちゃんとお約束していたじゃありませんか？」

「来てはくださるまいと思つたのです。今朝目がさめて、昨夜のことを残らず思い返して見ましたら、もうとても、おそらく永遠に、あなたにお目にかかれる望みも絶えた、とそんなふうに思われたんですよ。」

ヴェリチャーニノフはそのあいだにぐるりを見廻した。部屋のなかは雜然たる有様で、床は取りっぱなしになっているし、着物はそこらに脱ぎっぱなしだし、テーブルのうえには飲み乾した珈琲カップがあるかと思えば、パン片がころがっている、まだ半分も飲んでないシャンパンの壺が、栓もせず立っている横には、コップも伏せずにあるといった始末であった。彼は横目でちらりと隣室を盗み見たが、そこではこそりとも音はしなかつた。女の子はかくれたまま、じっと息を殺しているらしい。

「これを飲つてらっしゃるところじゃなかつたんですか？」とヴェリチャーニノフはシャンパンを指さした。

「昨夜の飲み残しですよ……」とパーヴェル・パーヴロヴィチはへどもどした。

「いや、まったくあなたは變りましたなあ！」

「じつは、ひょいとこんな悪い癖がつきましてね。まったく妻が亡くなってからのことなんです。嘘は申しませんよ！ なんと我慢ができたのでしてね。ですが今日は御心配には及びませぬよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、大丈夫今日は酔っちゃおりませぬし、したがって昨夜お宅でやったような管を巻く氣づかいはありませんからね。とにかく正直の話が、こんなことはみんな妻が亡くなって以来のことなんですよ！ まったく假りに半年前に誰かが、私がやにわに心をもち崩して今日のようなふうたらになると言つたところで、またその私の姿を鏡に映して見せてくれたとしたところで、とても本氣にしやしなかつたに違いないでさ！」

「じゃあなたは、昨夜は酔つてらしたんですね？」

「じつはね」とパーヴェル・パーヴロヴィチは小聲で白状して、やり場に窮した眼を伏せた、
「ですが、本當をいうとあれは酔いの絶頂じゃなくて、幾ぶんもう下り坂だったんですよ。私にそれを申すのはつまり、私の酒はあとのほうがむしろ悪いということがわかつて頂きたいからなんです。酒っ氣はもう幾らも残っていない、そのくせ一種殘忍な氣分と無分別な氣持だけは尾をひいている、おまけに悲哀という奴が一そう身にしみて感じられる、とまあそういう工合で、もつとも悲しいからこそ飲むんでしょうけどね。そうなるともう私は、愚にもつかん厭がらせでもなんでもどしどしとやってのけるようになるんですし、人に赤恥をかかせるぐらい平氣の平左

です。昨夜はさだめし、よほど變なところをお目にかけてでしょうね？」

「覺えがないと仰しゃるんですか？」

「覺えがないどころか、残らず知っていますよ……。」

「そら御覽なさい、パーヴェル・パーヴロヴィチ、私もつきりそんなことだろうと思って、そう解釋していたんですよ」とヴェリチャーニノフは和解除するような口調で言った。「それに私も、昨夜はあなたの前で少々激しすぎましたよ……おまけに妙にいらいらして失禮でした。これははつきり白状させてもらいます。じつは時にどうも氣分がよくないことがあるんでして、そこへあなたがいきなり眞夜中に見えたものだから……。」

「そうそう、眞夜中でしたからねえ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、さも驚いたように、また自分を非難するように、頭を振りながら言った、「まったくなんという魔がさしたもんでしょうなあ！あなたのほうでドアをあけてさえくださらなければ、私は決してお寄りはしなかったはずなんですよ。戸口のところで引き返したに違いないんです。じつはね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、私は一週間ほど前にも一度お訪ねしたことがあるんですがね、あいにくお留守だったんです。で、とにかくもう二度とお訪ねはしないはずだったんです。こう見えても私だって多少の自尊心はありますものね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。現在自分がこんな……境涯になっているとは百も承知でいながら、やつぱり抜け切れないものでしてね。往來でちょいちょいお目にかかった時にも、私はいつもこんなふうに考えていたものです——『私だということがわから

んはずがない、だのに外方そっぽを向いて行く、なるほど九年の歳月は争われんものだ」とね。ですからおそばへ寄ってみようという氣にもなれなかつたのです。ところが昨夜ペテルブルグスカヤ區を振り出しにぶらぶら歩き廻っているうちに、つい時間まで忘れちまつたのです。みんなこれと（と彼は酒壇を指さした）、それから感情のさせたことなんです。いやはやなんともはや、馬鹿げた話でして！ですから、もしこれがあなたのようなかたでなかつたら、——だってあなたは、昨夜のような醜態があつたにもかかわらず、昔の友誼に免じてこのとおり訪ねて来てくださったのですものね、——私には定めし、昔の交誼を結び直そうという希望も失せてしまったに違いないのです。」

ヴェリチャーニノフはじつと耳を澄ましていた。この男は打ち見たところ、誠意をもって一種の權威をさえもつて、語っているらしい。それにしても彼は、そもそもこの部屋へはいつて来た瞬間から、この男の言うことには何一つ信を置いてはいなかったのである。

「ときに、パーヴェル・パーヴロヴィチ、するとあなたは、一人ずまいというわけでもないんですね。さつきあなたのそばにいたあの娘さんは、あれは誰のお子さんなんですか？」

パーヴェル・パーヴロヴィチはむしろこの問いが意外だといった面持ちで眉を釣り上げたが、そのくせ晴々と樂しげな眸でヴェリチャーニノフを眺めた。

「誰の娘かって仰しゃるんですか、驚きましたね。あれはリーザじゃありませんか！」と、彼は人懐こい微笑を浮かべて口走った。

「リーザという？」とヴェリチャー・ニノフは呟き返したが、その瞬間不意にどきりと胸にこたえたものがあつた。あまりにも突然な衝撃だつた。先刻この部屋へはいつて来てちらとリーザの姿を認めた時も、意外の感はあるにはあつたが、とはいへ豫感だとか特別な想念だとかいふものは、爪の先ほども浮かんではこなかつたのである。

「そうですね、うちのリーザですよ、うちの娘のリーザですよ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチはにこにこした。

「娘さん？ じゃあなたとナターリヤさん……亡くなられたナターリヤ・ヴァシーリエヅナとのあいだには、お子さんがあつたと仰しゃるんですか？」おずおずとさも訝かしげにヴェリチャー・ニノフは問い返したが、その聲はもうほとんどひそひそ聲に近かつた。

「なんだつてまたそんな？ あ、そうでしたか、なるほどこりゃあ、あなたのお耳にはいるわけはないはずでした！ まったく私は何をぼやぼやしてたんだらう！ あの子を授かつたのは、あなたがお發ちのあとのことでしたものなあ！」

パーヴェル・パーヴロヴィチは妙に興奮して、椅子から跳びあがつたほどだつた。とはいへそれはやっぱ嬉しさのあまりだつたらしい。

「私はちつとも知らなかつた」とヴェリチャー・ニノフは言つて、さつと蒼くなつた。

「ごもつともです、ごもつともです、まったくお耳にはいるはずはありませんよ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは感動に聲をくもらして、おなじ文句をくり返した、「あなたも覚えて

おいででしょうが、私も亡妻も、もうとても子供はできないものと、二人して諦めておりましたのですよ。そこへ思いがけなく神様のお恵みがあつたわけです。その時の私の氣持といつたら、これは神様にしかわかつては頂けませんよ！ たしかあはれは、あなたがお發ちになつて、ちょうど一年してからだつたでしたな！ いやそれとも、いや一年じゃない、とてもそうはならない、ちよつとお待ちください。あの時あなたがお發ちになつたのは、私の覚え違いでなければ、たしか十月でしたな、それとも十一月にはいつてからでしたかな？」

「私がT市を發つたのは九月のはじめでしたよ、九月の十二日です。今でもよく覚えていますが……。」

「おや、九月でしたかしら？ ふむ……何だつてそんな思い違いをしたもんだらう？」パーヴェル・パーヴロヴィチはひどくびつくりした様子だつた、「じゃまあ、そうすると、ええとどうなりますかな。——あなたの發たれたのが九月の十二日と、そしてリーザの生まれたのが五月の八日とすると、——九、十、十一、十二、一、二、三、四——つまり八カ月と少しになりますね、ね！ せめてあなたが御存じだつたらと思ひますよ、亡くなつた家内がどんなに……。」

「見せては頂けませんかしら……ここへ呼んでくださいませんか……。」と、妙に上ずつた聲でヴェリチャー・ニノフは口ごもつた。

「よござんすとも！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、自分の言いかけていたことなど、まったく無用のことのようにあつきり思いきつて、せかせかと言つた。「すぐ、今すぐ御覽に入れま

しょう！」そして急ぎ足でリーザのいる小部屋へはいつて行った。

それから三四分はたしかにたつたと思われる。隣りの小部屋では何か早口にひそひそと囁き合う氣配がして、リーザの聲もかすかにそれにまじって漏れて来た。「引つ張り出されるのが厭だと謝ってるんだな——とヴェリチャーニノフは思った。やがて二人は出て来た。

「何せこのとおり、はにかんでばかりいましてな」とパーヴェル・パーヴロヴィチは言った、「どうも恥かしがりで、そのくせ氣位が高くて……まるで亡妻に生き寫しですよ！」

出て来たリーザはもう泣いてはいなかった。目を伏せて、父親に手を引かれている。見ると年の割には身丈が伸びてすらりとした、非常に美しい少女だった。彼女は大きな空色の眼を、物珍らしげに、ちらと客のほうへあげた。しかし彼の顔を無愛想に一瞥するなり、すぐまた目を伏せてしまった。子供というものは知らない人と二人きりにされると、部屋の隅へ逃げて行って、そこからこのついぞまだお客に来たこともない目新しい人の顔を、妙に生まじめな不審そうな眼つきでじろじろと眺めるものだが、ちょうどそれと同じ子供らしい他所他所しい生まじめさが、彼女の眼差しにも浮かび出ていた。と同時にまた、何かしらもう子供の考えとはいえぬようなものも、どうやらあらわれているらしい——とそんな風にヴェリチャーニノフには思われた。父親は娘を彼のすぐそばまで連れて来た。

「そらね、この小父さんはお前のお母さんを御存じだったかただよ、お父さんたちの仲好しだったんだよ。だからちつとも怖くはないんだよ、さ、お手をお出し。」

少女はかるく會釋をして、おずおずと手を差しのべた。

「私もでは、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナが、あのお客を迎える時膝頭でやる禮を、この子に教えるのを嫌って、こうして英國流に、かるく會釋をしてお客に手をさしのべるように仕込んで置いたんですよ」と、父親はヴェリチャーニノフの顔にじつと眼をつけながら、言いわけがましく言葉を添えた。

ヴェリチャーニノフは見つめられているとは知っていたけれど、もうこうなつては自分の動搖を押し包もうともしなかった。彼はじつと身じろぎもせず椅子にかけたまま、リーザの手をおが手に握りしめて、その子の顔につくづくと見入っていた。一方リーザは何かひどく氣にかかることがあるとみえ、自分の手を客にあずけていることも忘れて、父親の顔から眼をそらさなかった。彼女はおどおどした様子で、父親の話を何一つ聞きもらすまいと耳を澄ましていた。ヴェリチャーニノフは早速その大きな空色の眼に目をつけて、これはと思ひあたったが、何よりもはげしく彼の胸をうったのは、彼女の顔の人並はずれた、抜け出るばかりの美しい白さと、もひとつ髪の毛の色合いであった。これらの特徴は、彼にとつてあまりにも意味深いものだったのである。これに反して顔だちや唇の恰好は、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナをさながらに彷彿させた。一方パーヴェル・パーヴロヴィチは、そのあいだに何かしきりに喋りはじめていた。ひどく熱のこもったしみじみとした語調でやっているらしかったが、ヴェリチャーニノフの耳には一言もはいつてこなかった。彼がちらと耳にはさんだのは、こんな最後の一句だけだった。——

「……というわけだね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、この子を授かった時の私どもの喜びようときたら、とてもあなたには御想像もつきはしませんよ！ 何しろこの子が生まれてからというもの、この子が私の一切になってしまったわけですし、ですからよしんば不幸にして、私の静かな幸福が消えてしまったにしろ、——このリーザだけはこれとおりの手許に残っている、まあこう考えているんですよ。これだけはまあ、私が固く信じて来たことなんですよ！」

「で奥さんのほうは？ あの人はどう思っておいででした？」とヴェリチャーニコフは訊いた。「家内ですか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチはちよつと鼻白んで、「あなたは家内を御存じだから覚えておいででしょうが、何しろあのおりの至って口数の少ない女でしたからな。がその代り、臨終の床でこの子と別れの言葉を交わした時の様子といったら……その際まじになつて平生胸の底に押し包んでいたことを、すっかり出してしまったというわけですよ！ 今私は『臨終の床で』と申しましたね。ところがじつは、息を引きとる前の日になると、にわかに興奮してぶりだしてしまつてね、——こんな薬なんかで癒そうとしているが、自分のはただほんの當り前の熱病に過ぎない、第一今のお醫者は二人ともてんで盲目なんだ、あのコッホさん（御記憶でしょう、私どもの町で一等軍醫をしていたあの老人ですよ）、あのコッホさんさえ歸つてみえたら、二週間もすればもうお床上げができるんだ、とこんなことを口走る始末なんです！ それからまた、臨終がもう五時間さきに迫っているという時になると今度は、三週間すると叔母さんの誕生

日だ、誕生祝いには是非とも行つてあげなければならぬなどと、そんなことを言い出したものです。この叔母さんというのはリーザの教母でしてね……」

ヴェリチャーニコフは急に椅子をたつたが、リーザの小さい手はやつぱり放さなかつた。この娘が父親の顔にじつと注いでいる燃えるような眼差しに、何かなじるような色のあるようなのが、彼にはどうも氣になつてならなかつたのである。

「お子さんは加減がお悪いんじゃないですか？」と彼はあわてたような、何か變てこな調子で訊いた。

「そんなことはないはずですがね。もつとも……何しろ御覽のとおり状態だもんでして」とパーヴェル・パーヴロヴィチは憂わしげな心痛の色を見せて、しんみりと言つた、「どうも一風變つた子でしてね。ただでも神経質なところへ持つてきて、母親が亡くなつたあとでは二週間ほど病みつきましてね、すっかりヒステリックになつてしまいました。そら先刻も、あなたがはいつていらつしやる時、泣聲がしてましたでしょう、それから、『これ、リーザ、これ！』つて、あれもお耳にはいりましたでしょう？ 事のおこりはそもそもなんだとお思ひですか？ みんなそれこの子が、お父さんが行つてしまふ、あたしを捨てて行つてしまふ、つて言い出したからなんですよ。つまりその、ママが生きてらつしやるころみたくもう可愛がつてはくださらないんですもの——とそう言つて、この私を責めるんです。まだ玩具でもかかえて喜んで遊んでいるはずのこんな小つぽけななりをして、頭のなかじゃそんなとんでもないことを考えてるんですからねえ。

もつともここではこれという遊び相手もないには違いないんですが。」

「じゃそのあなたは……あなたは本當にこのお子さんとお二人きりの暮らしたんですか？」

「まったくの親一人、子一人です。そのほかは女中が日に一度、身の廻りの世話にちょっと来てくれるだけでして。」

「すると外出される時は、お子さんを一人残して行かれるわけですか？」

「ほかに仕様もないじゃありませんか？ 昨日なんぞは、それ、あの小部屋に閉じこめて錠をおろして出かけたんでして、そのため今日はこうして涙が降りだしたという次第なんです。だってあなた、考えてもみてください、ほかになんとも仕様がなかったんですよ。一昨日なんかはこの子は私の留守に階下へ降りて行きましてね、男の子に石を頭へぶつけられたという始末ですものね。さもなけりやまた、おいおい泣き出しちまって、やたらに屋敷うちの人にとびついて、お父さんはどこへ行ったか？ って訊き廻るんですよ。外聞が悪くってやりきれませんやね。もつとも私のほうも相當なもんでしてね、ちょっと一時間ほどと言って出かけちゃ、朝歸りといったことをやらかすんで、現に昨日なんかもうさうだったんです。まあいいあんばいに、この主婦が錠前屋を呼んで来て錠前をはずしてくれたから、とにかく助かったようなもんですが、——まったくいい恥つさらしですよ。われながらつくづく人でなしだと思えますよ。それもこれもみんな私の心に締りがなくなつたせいでは……」

「お父さん！」と少女はおずおずと心配そうに口を入れた。

「そら、またお前は！ 性もこりもない奴だ！ さっきお父さんはなんと云つたかね？」

「もう言わないわ、言わないわ」とおそろしさに顔色を変えて、急いで父親の前に両手を合わせながら、リーザはくり返した。

「とにかくあなたがたは、こうした環境の生活をつづけるわけにはゆきませんね」とヴェリチャーニノフは、もう我慢がならぬといった調子でいきなり口を切った。權威のこもつた聲だった。——「だってあなたは、……あなたは財産のある人じゃありませんか。それをなんだってあなたは、こんな——第一こんな翼屋の、しかもこんな下卑た環境のところにおられるんです？」

「翼屋になんぞと仰しゃるんですか？ ですがもう一週間もすれば、この町を發つことになるかも知れんですし、それによしんば財産があるにしたところが、それでなくても随分と出費がかさみましたんでねえ……」

「いや、もう澤山です、澤山です」と、ますますじりじりして来るばかりのヴェリチャーニノフは相手を遮つた。まるで、「もう何も言うな、貴様が何を言おうとしてるかぐらいちゃん知ってるぞ、貴様がどんな魂膽でそんなことを言うかも、こつちが先刻御承知なんだ！」と浴びせかけでもするよな勢いだった。——「それよかまあお聞きください、物は相談ですがね、今あなたはたかかもう一週間の滞在だと仰しゃつたですな、しかしそれがまた二週間にならないものでもないです。そこでじつは、當地にさる知り合いの家がありましたね、それがもうこの二十年來、わが生まれた家も同然の心易さで出入りをしている家なんです。ポゴレーリツェフという家なん

ですがね。亭主のアレクサンドル・パーヴロヴィチ・ポゴレリツェフというのは三等官でしてね、そういうこともまあ、あなたの今度の御用件の何かの足しにならないものでもありません。今は一家をあげて別荘のほうへ行っています。貸別荘なんかじゃありません。豪華な自分の別荘があるんです。細君のクララ・ヴヂャ・ペトローヴナ・ポゴレリツェヴァというのが、姉か母親みたいです。私を可愛がってくれるんでね。八人の子持ちなんです。どうでしょう、早速ですが今すぐ、リーザさんをこの私がお連れしようじゃありませんか……善は急げで、この私が一つ走り行って来ましょうよ。……喜んで預ってくださいますよ。そしてあなたが發たれるまでのあいだ、わが娘のように、生みの娘のように可愛がってくださいますよ！」

彼はおそろしく苛だっていたが、別にそれをかくそうともしなかった。

「どうもそれはできそうもありません」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは澁面をつくり、狡るそうに（とヴェリチャ・ニコフは思った）彼の眼を覗きこみながら言った。

「それはまたなぜですか？ なぜできないんですか？」

「なぜってあなた、こんな小さな子を、それもいきなり、どうして手放せましょう。——もちろんそりゃあ、あなたのような真心のこもったかたが仲に立ってくださいるので心配はないわけですし、そこをとやかく申すのじゃありませんが、それにしてもやはり見も知らぬ家へやるんですからなあ。それにまた、先様がそういう御大家のことであつて見れば、どんな扱いを受けるものやら、この私にもとんと見當がつかんものでして。」

「だから今も、この私が内輪の者同然に出入りをしている家だと申し上げたじゃありませんか」とほとんど怒氣を含んだ聲でヴェリチャ・ニコフはどなりだした。「クララ・ヴヂャ・ペトローヴナにしたってこの私がひと言たのむと言つたら、リーザさんの面倒をみるのをどんなに喜ぶか知れませんよ。まるで私の娘でも預るつもりで……ちえっ糞！ 現にあなただって、ただ文句が並べたいばかりにそんなことを言っておられることを、御自分でも知り抜いておられるんじゃないませんか。……さあ、もうかれこれ言うことはないでしょう！」

彼は思わずどしんと足踏みまですした。

「いや私の言うのは、すこぶるその變なことになりはしないかということなんです。私だつてやっぱりせめて一二度はお伺いしてからでなくちゃね、さもないと、まるで父親ておやがないみたいになりはしませんかな？ へ、へ、……おまけに向うがそんな格式の高いお家柄ときちやあね。」

「なあに、ごく氣さくな家ですよ、決してあなたの言われるような『格式』ぶるのなんのといふ家じゃありません！」とヴェリチャ・ニコフは叫んだ、「それに今も言うとおりの、何しろ大ぜいの子供ですからね。あそこへ行けば娘さんはきつと生き返つたようになるでしょうよ、何しろそれが大眼目なんですからね……。で、もしなんでしょう、あなたは明日お引合わせすることにしましょう。それにどうせ一度は禮を言いに行かなきゃなりませんものね。もしお望みでしたら、毎日でも御一緒に行つて見ましょうよ……。」

「でも、やっぱりなんだか……。」

「まだそんなことを！ ちゃんと自分で知り抜いているくせに——あなたの悪い癖ですよ！ じやこうしまししょう、今日は夕方から私のところへおいでになって、一晩泊ってください。そして明日は、十二時には向うへ着くように、ひとつ早目に出かけるとしましょう。」

「何から何まで親切に取計らってくださいって、お禮の言葉ありません。おまけに泊れとまで仰しゃってくださいる——感動に聲をうるませて、パーヴェル・パーヴロヴィチは急に折れて出た、「じつにはやいたみ入った次第ですよ……ところで、その別荘というのはどこにあるんですか？」

「あのうちの別荘はレスノエにあるんですよ。」

「ただ、どうしたもんでしょうなあ、この子の衣裳は？ 何しろそんなお家柄の邸へ行くんですし、おまけに別荘だときちやあ、——わかってくださるでしょう……父親の氣持としてですな！」

「衣裳がどうだと仰しゃるんです。ちゃんと喪服を着ていますね。このほかに何か着せたい衣裳があるとしても仰しゃるんですかね？ いやいや、これが一番です、これほどお誂えむきの衣裳がほかにあるもんじゃありませんよ！ ただその下着だけは、もう少しきれいな奴と取りかえるんですな、その襟あてもね……（襟あても下着の覗いてる部分も、實際ひどく汚れていた。）」

「なるほどこりやあ、すぐ着かえさせなくちゃなりませんわい」とパーヴェル・パーヴロヴィチはせかせかして言った、「そのほかの入用の下着類もすぐ揃えてやることにしましょう。マリ

ヤ・スイソエヴナのところに洗濯に出してあるんですよ。」

「じゃひとつ馬車をそう言って頂きましようか」とヴェリチャーニノフは相手の言葉を遮った、「それもできることなら大急ぎで願いたいですな。」

ところが困ったことができた。リーザがどうしても厭だと言い出したのである。先ほどからの話の模様を彼女は怖ろしそうにじつと聴き耳をたてていたのだが、もしヴェリチャーニノフがパーヴェル・パーヴロヴィチを説きつける合間に、氣をとめて彼女の顔をさし覗く暇があったなら、必らずやそのいたいけな顔に、身も世もあらぬ絶望の色の浮かんでいるのを認めたら違いないのである。

「あたし行かないわ」と彼女はきっぱりと、小聲で言った。

「ほうらね、どうです、母親そっくりですよ！」

「あたし母さんになんか似ていないわ、母さんになんか似てはいなくてよ！」とリーザは、母親そっくりという言葉が彼女にとっては怖ろしい譴責の聲とひびくと見え、まるで父親の前にその身の明かりを立てようとするかのように、懸命に自分のかぼそい兩の手を揉みながら、叫び返すのだった、「お父さん、ねえお父さん、もしお父さんがあたしを捨てるんなら……。」

と言いさして彼女はいきなり、あつげにとられてゐるヴェリチャーニノフにとびついて来た。

「もしあなたが、あたしを連れて行くんなら、あたしもう……。」

が彼女にはその先を言いつぐ暇がなかった。パーヴェル・パーヴロヴィチが、ほとんど頸根っ

こを押えんばかりの劍幕でぐいと彼女の片手を引つとらえると、今はもう包みきれぬ憎悪に顔を引つ攀らせながら、無理やりに例の小部屋へ引きずり込んでしまったのである。そこでまたもや暫くのあいだ、ひそひそ聲や、押し殺した泣聲やらが洩れてくるのだった。ヴェリチャーニノフはすんでのことに自分もその部屋へ出かけて行くところだった。しかしパーヴェル・パーヴロヴィチのほうにそれより先に戻つて来て、妙に歪んだ微笑を浮かべながら、あの子はすぐ行くことになりましたと告げた。ヴェリチャーニノフはつとめて彼の顔を見まいとして、そっぽを向いた。

そこへマリヤ・スイソエヅナもやつて来た。それは彼がさつき廊下へさしかかった時出會つたあの女房で、持つて来た下着類を、リーザの小さな可愛らしい手提袋に詰めこみはじめた。

「じゃあ旦那、あんたがこの娘つ子を連れて行きなさんですかね？」と彼女はヴェリチャーニノフに話しかけた。「じゃ、あんたは家庭うちがおありなさんですかね？なんぼかい功德でござんすよ、ねえ旦那。このおとなしい子を、焦熱地獄から助け出してやりなさんとはねえ。」

「もういいじゃないかね、マリヤ・スイソエヅナさん」とパーヴェル・パーヴロヴィチは呟きかけた。

「あらまあ、マリヤ・スイソエヅナさんだなんて！みんなしてそんな呼び方をして人をおひやかすんだよ。せんたいお前さんとこが焦熱地獄でないとおおいいかね？物ごころのついた子供にさ、恥っさらしの幕ばかり見せてさ、それで済むとでもお思いですかね？さあ馬車

が参りましたよ、旦那。——レスノエまででしたかね？」

「そう、そう。」

「じゃあまあ、道中お氣をつけなすつて！」リーザは眞蒼な顔をして、眼を伏せながら出て来ると、手提袋をとり上げた。ヴェリチャーニノフのほうにはちらとも眼をやらす、じつと自分を抑えて、別れぎわになつても、先刻のように父親に抱きつこうともしなかつた。それどころか、父親の顔は見るのも厭だといったふうにみえた。父親は様子ぶつて彼女の髪に接吻して、それから撫でてやつた。すると彼女の唇が引つ攀つて、顎がぴりぴりと顫えだしたが、眼はやつぱり父親のほうへあげずにいた。パーヴェル・パーヴロヴィチはどうやら顔色が悪く、両手はわなわなと顫えていた。彼のほうを見まいとあらん限りの努力をしていたヴェリチャーニノフにもそれだけは、はつきりと見てとれた。彼はもうただ一つのことしか考えていなかった——一刻も早くここを出て行きたい。

『で一體これが、俺の罪だろうか』と彼は考えた、『いやいやこうなる約束ごとだったんだ。』どやどやと階下へ降りて行つた。そこでマリヤ・スイソエヅナはリーザと接吻を交わした。そしていよいよ馬車に乗りこんでしまつてから、リーザははじめて眼をあげて父親を見て——いきなり両手を打ち合らし、何かひとこえ高く叫んだ。もう一瞬間の餘裕があつたら、彼女は馬車を飛び出して父親に抱きついたに違いないが、車はもう動き出していた。

六 閑人の新らしい妄想

「おや、加減が悪いんじゃないの？」とヴェリチャーニノフはびっくりして尋ねた。「馬車をとめて、水を持ってこさせましょうね……。」

彼女は彼の顔をふり仰いで、非難をこめた燃えるような眼でじつと見た。

「あたしをどこへ連れて行くのよ？」と彼女はだしぬけに鋭い聲で口走った。

「とてもいいお家へ行くんですよ、リーザ。その人たちは今、それは立派な別荘にいるの。大ぜいおともだちがいてね、みんな可愛がってくれますよ、とてもいい人ばかりなんだから。……私のことを怒るんじゃないよ、リーザ、私はあなたのことを思つて……。」

もしこの瞬間に、誰か平生の彼を知っている人が彼を眺めたとしたら、さだめし彼の姿が奇怪なものに映つたに違いない。

「あなたはまあ、——あなたはまあ、——ほんとになんて悪い人でしょう？」と、じつと堪^{こら}えている涙のため、息をはずませながら、怨みに燃えた美しい瞳を彼のほうへきらりと投げかけて、リーザは言った。

「リーザ、私はただ……。」

「いいえ、悪い人、悪い人、悪い人よ！」と彼女は両の掌を揉みしぼった。ヴェリチャーニノフは途方に暮れてしまった。

「リーザ、ねえ可愛いリーザ。そんなに駄々をこねて、この小父さんをこまらせるんじゃないやありませんよ、ね、いい子だから！」

「お父さんが明日来てくださるつて、あれは本當なの？ 本當？」と彼女は、おつかぶせるような勢いで返事を迫った。

「本當だとも、本當だとも！ 小父さんが連れてきてあげよう。しっかりとつかまえて連れてきてあげますよ。」

「お父さんはまた嘘をつくのかもしれないわ」とリーザは足もとに眼を落して囁くように言った。

「じゃ、お父さんはあなたを可愛がってくれないと思うの、リーザ？」

「可愛がつてなんかくれないわ。」

「あなたを酷い目に逢わせたかい？ え、逢わせたかい？」

リーザは暗い眼つきで彼を眺めると、そのまま黙りこくってしまった。そしてまたもや向うへ顔をそむけてしまつて、意固地に顔を伏せたまま動かない。彼は一所懸命に少女を宥めすかしはじめた。熱心こめて話して聞かせているうちに、自分までが熱病にかかったみたいになつてしまつた。リーザは疑わしげな敵意を含んだ態度ではあつたが、それでも耳を傾けていはした。とにかく彼女の注意をひき得たと思うと、彼はひどく嬉しくなつた。で、そもそも酒飲みというのはどういふものであるか、ということまで講釋して聞かせたりした。私はあなたが可愛くてならな

い、だからお父さんが悪いことをしないように、よく見張りをしてあげよう、とも言った。やがての果てにリーザもやつと眼をあげて、まじまじと彼の顔を眺めた。それから彼は、お母さんもよく知っていたという話をしはじめ、この話が彼女の心をひくのを見てとった。次第に彼女の口もほどけてきて、少しずつ彼の質問に返事をするようになったが、相變らず用心深く、強情な態度で、ほんの一言か二言しか口に出さなかった。肝腎な質問になると、彼女はやはり一言も答えなかつた。話が以前の彼女と父親との關係にふれると、彼女は一切片意地な沈黙を守り通すのだった。話をしているあいだ、ヴェリチャーニノフは先刻のように彼女のかほそい手を握りしめて、それを放さなかつた。彼女のほうでも別に振りほどこうとはしなかつた。とはいえまた、この少女がそのあいだじゅうずっと沈黙を守っていたわけでもなくて、曖昧な返事の合間合間には、やはりいろいろと口を滑らしてしまふのであつた。例えば、前にはお父さんのほうがお母さんよりも私を可愛がつてくれた、お母さんは私をあまり可愛がつてくれなかつた、だから私お母さんよりお父さんのほうが好きだつたとか、けれどお母さんがいよいよ駄目だという時になつて、ちやうどみんなが部屋を出ていて私と二人きりになつた時、お母さんは一所懸命に私に接吻してさめざめとお泣きになつたとか……だから今ではお母さんが誰よりも好きだ、世界じゅうの誰よりも好きだ、そして毎晩毎晩この一番好きなお母さんのことを思い出しては泣いている——とかいった類いのことである。しかしこの少女はじつに傲慢な娘で、ふと餘計なことを喋つたと氣がつくと急にまた自分に閉じこもつてしまつて、それなり固く口をつぐんでしまふのであつた。そればかりか、自分に餘計なことを喋らせたヴェリチャーニノフをさも憎らしそうに睨んだりするのである。

向うへ着くころになると、彼女のヒステリックな興奮状態はほとんど消えてしまつたが、その代りにおそろしく陰氣になつてしまひ、まるで頑なな人嫌いのように、挺でも動かぬ暗鬱な意固地さで、むつつりと不機嫌な様子になつてしまつた。その一方、これまで一度も鬨をまたいだことのない見知らぬ人の家へ連れて行かれるということのほうは、今のところでは大して苦にしてはいないらしかつた。彼女を苦しめているのはまったく別のことであることが、ヴェリチャーニノフにはみてとられた。彼女は父のことが恥かしいのだ。つまり父親が、まるで彼女を彼の手へ投げ渡してもするやうに、すこぶる手つとり早く彼と一緒に出してよこしたということが、彼女には恥かしいのだ——とヴェリチャーニノフは推量した。

『この子は病氣なんだ』と彼は考えた、『それも、よほど重いのかも知れない。苛めて苛めて苛め抜かれたんだ。……ええ、酔いどれの汚らわしい畜生め！今こそ奴の正體がわかつたぞ！』彼は馭者を急ぎたてた。静かな別荘、新鮮な空氣、ひろびろした庭園、子供たち、彼女にははじめの變つた生活、それからまたやがて……そうしたものに彼は望みをかけていた。そして、やがてその先がどうなるかということについては、彼はまったく樂觀しきつていた。——充實した明るい希望が輝いているのである。ただ一つ彼がはつきりと意識していたのは、——自分がこれまでについぞ、今この瞬間に味わつていゝような感じを経験したことがない、この感じこそ一

生涯自分の胸から消え去ることはあるまい！ということであつた。『これこそ生の目的なのだ、これこそ人生というものなのだ！』と彼は勝ち誇つたように心に叫んだ。

いろんな想念が今や彼の脳裡をかすめるのだったが、彼はそれらをみなやりすごして、そのどれひとつにも氣をとめようとはせず、こまごました點からは頑固に眼をつぶっていた。そうしたこまごました點を考慮の外に置くと、萬事はじつに明瞭で、確固として不動のものに見えてくるのであつた。そして眼目ともいうべき一つの目論見が、ひとりできあがつてしまつたのである。ほかでもない、彼は『われわれが總がかりになれば、あの胴慾野郎を諾ノクといわせることもできそうなものだな』と空想したのである、『そして彼奴はリーザをペテルブルグに置いて行く、ポゴレーリツェフの家に残して行く。もちろん初めはほんのいつときとか、假りにとかいうつもりでだが、とにかく一人で發つて行つてしまふ。そしてリーザは俺の手に残る。それでも結構だ。これ以上何を望むことがある？ それに……それにあの男だつて、もちろんそうなることを望んでるんだ。でなけりや、なんであんなにあの子を苛めることがある？』

やつと目ざす家に着いた。ポゴレーリツェフ家の別荘は、じつに素晴らしい場所であつた。まず一番先に彼等を出迎えたのは、どやどやと別荘の表段へ躍り出た子供の一團であつた。ヴェリチャーニノフは随分久しくこの家に顔を見せなかつたので、子供たちのはしゃぎようといつたらなかつた。みんなこの小父さんが大好きだつたのである。なかでも年かきな連中は、彼がまだ馬車を降りないうちから、早速もうこんなことを言つて囃し立てた。

「裁判はどうなつたの、裁判はもう済んだの、小父さん？」

すると一番ちいさな子までがそのあとについて、上の子たちの眞似をしてきやつきやつと騒ぎ廻つた。彼はこの家に来ると、きまつて例の訴訟の一件でなぶり物にされるのである。が、やがてリーザの姿を認めると、子供たちは早速くると彼女のまわりに輪をつくつて、子供に特有の物めずらしげな顔つきで、無口のまま穴のあくほど彼女の姿を點検しはじめた。そこへクライヴヂャ・ペトロヴィッチも出て來、つづいて主人も姿をあらわした。夫人も主人もやはり笑いながら、裁判のほうはいかがと、初手からその質問を浴びせかけた。

クライヴヂャ・ペトロヴィッチは年のころ三十七八の、まるまると肥つた褐色ブリュネットの婦人で、つやつやと林檍のような顔をして、まだなかなか美しかつた。夫のほうは五十五六の、利口で抜目のない男だつたが、それでいて無類の好人物であつた。この家庭はヴェリチャーニノフにとつて、どんな意味からしても彼自身の言うように『わが生まれた家』も同然なのであつた。だがまたそこには、ある特殊の事情もひそんでいたのである。というのは、二十年ばかり前にこのクライヴヂャ・ペトロヴィッチが、當時まだ學生でまず一介の少年にすぎなかつたヴェリチャーニノフのところへ、すんでのことで嫁にこようとしたことがあつたのである。それは熱烈な、それでいてたわいもない、美しい、二人にとつては初戀なのであつた。結局はしかし、彼女がポゴレーリツェフのところへ嫁ぐことによつて幕を閉じたのである。それから五年ばかりして二人は再會して、お互いのあいだの感情はついに明るい靜かな友情に形を變えたのであつた。二人のあいだには一

種の温かみが永遠に消えずに残ることになり、その一種特別の光明がお互いの仲を照らすのだった。この關係についてのヴェリチャーニノフの追憶には、一點のやましいところもなく、すべてが清らかであった。そしてそのことが、つまり一點の汚れもない美しいものとして残った唯一の場合であったということが、いよいよ彼をしてこの關係を尊く思わせることになったのである。この家に来ている時は、彼は率直で、無邪氣で、親切で、よく子供の相手をし、偽悪家をきどることもなく、自分の間違いは何によらず素直に認めるし、何ごともかくさずに告白するのであった。彼はよくポゴレーリツェフ夫婦にこんな誓いをたてたものである。それは、もう少ししたら俗世間からさっぱりと足を洗って、彼等のところへ引き移って来る、そしてもう一生彼等から離れずに餘生を送ることにするというのである。この計畫のことを彼はひとりで大まじめに考えていたのである。

彼はリーザに關しての必要な事柄を、かなり詳細にわたってこの夫婦に説明した。だがわざわざそんな説明をするまでもなく、彼が一ことたのむと言いさえすれば事足りたのである。クラヴィヂヤ・ペトロローヅナはこの『孤兒』に頼ずりをして、私の力の及ぶかぎりのことは盡しましよと約束してくれた。子供たちはリーザをひたたくるようにして、早くも庭へ遊びにつれて行ってしまった。半時間ほどの賑かな談笑ののち、ヴェリチャーニノフは起ちあがって別れを告げはじめた。彼は一同がやがて氣づかずにはいなかったほど、ひどくいらいらしていた。みんな呆氣にとられてしまった。三週間も姿を見せずについて、やっと來たかと思うと僅か半時間で歸って行

こうとするのである。自分でもおかしいと見え、からからと笑いながら、明日また伺いますと約束するのであった。夫婦は彼に、どうも非常に興奮しておられるようだと注意した。すると彼はいきなりクラヴィヂヤ・ペトロローヅナの手をとって、すこぶる大切な用件を言い忘れたという口實のもとに、彼女を別室へ連れ出した。

「あなたは覚えておいででしょうが、——私があなたに、あなたにだけ申し上げて置いたことを。それは御主人さえ御承知ないことなんですが——つまりT市時代の私の生活のことです。」

「ええ、よく覚えておりますわ。そのことなら、たびたび話してくださいましたものね。」

「いや私はお話したのじゃない、懺悔をしたのですよ。しかもあなたお一人にだけね！私はいまだついで、その女の苗字をあなたに明かしたことがあります。じつは——その女はトルソツカヤというんです。先刻お話ししたトルソツキイの女房なんです。亡くなったというのはその婦人なんです、リーザはその娘——つまり私の娘なんです！」

「まあ本當？ 間違いはありませんの？」とクラヴィヂヤ・ペトロローヅナは多少の興奮を見せて訊き返した。

「絶対に、絶対に間違いじゃありません！」とヴェリチャーニノフは熱狂して叫んだ。

そして彼は、そわそわとひどく興奮しながら、できるだけ手みじかに一部始終を彼女に物語った。クラヴィヂヤ・ペトロローヅナは前々からその話はすっかり知っていたが、その婦人の苗字だけは知らなかったのである。じつはヴェリチャーニノフとしては、誰か自分の知合いの人間がひ

よつとしてトルソーツカヤ夫人に出會いでもして、彼ともあるものがこんな女にあれほどのほせあがつているとは意外の感を催しはしまいかと思うと、ひどくそら恐ろしい氣がして、自分のただ一人の心友であるクラードヂヤ・ペトロローヴナにさえ、今の今まで『その女』の名を明かす勇氣が出なかつたのであつた。

「そしてあの娘のお父さんはなんにも知らないんですの？」と、彼の話を聞き終ると、夫人はそう訊いた。

「いいや、ちゃんと知ってるんです……。ですがじつは、そこんところがまだはつきり見透せない、それが私にはじつに辛いのですよ！」とヴェリチャーニノフは熱した口調で言葉をつづけた、「知っているんだ、知っていることはたしかなんです。今日も昨日もその氣ぶりが讀めたんです。ただ私は、奴が果たしてどの程度まで知っているか、そこをはつきりつきとめたいんです。だから今私はこんなにそわそわしているんですよ。今晚あの男は私のところへやってくるんです。だがしかし、一體どこからあの男はそれを——というのは一切をという意味ですがね——嗅ぎつけたんだらう、そこがどうも合點がゆかん。バガウトフのことならすつかり知ってるんです、これは疑う餘地がありません。だがこの私のことになるか？ 御承知のとおり人妻というものは、こうした場合に良人をまるめてしまうことにかけては、なかなか達者なものですからね！ 天使がわざわざ天降つて来て掻き口説いたにしてもいつかな信用しない良人が、女房の口にかかるどころりとまるめられちまうんですからね？ ああお願いです、そんなに非難するように首を振ら

277678

ないでください、自分を非難することなら私が自分でやっています。それどころかずつと前々から、われとわが身に苛責の筈をあてているのです！……正直の話が、現に今朝あの男の宿にいた時なんぞも、私にはなんとしても向うが一部始終を知り抜いているものと思えず、彼奴の眼の前でわれから進んで危い橋を渡って見せたりして、奴の氣を引いてみた始末なんです。これはまるで嘘みたいな話ですが、じつのところ私は、昨夜あいつを酷くぞんざいにあしらつてやったことが、妙に氣恥かしく厭な氣持なんです。（この話はまたあとで詳しくお話ししますがね！）あの男が昨日わたしのところへやつて來たのも、もとはと言え、俺は自分の恥辱をよく心得ているぞ、しかもその當の侮辱者も知っているぞということを、私に知らせたいばかりに、つまりその毒々しい慾望がおさえきれなくなったからこそ、のこのこやつて來たんです！ へべれけに酔つ拂つて、非常識きわまる時刻にやつて來た理由は、残らずここにあるんです！ もつともあいつの身にしてみれば、それもさらさら無理はありませんや！ つまり怨みのたけを述べたてにやつて來たという次第でね！ それをまたこの私が、昨夜とていい今朝とていい馬鹿にのぼせあがつた應待ぶりをやつちまいますね！ いやはや輕率ともなんとも、まったく馬鹿げきつた話ですよ！ 自分からのめめと白状したようなものでしてね！ それにしてもなんだって彼奴は、選りに選んで私があんなに平靜を失っている時を狙つてやつて來たもんだらう。これは確と申しあげるときですがね、あの男はリーザを、あの年端もゆかないリーザをまで、そりゃ酷くいびるんですよ。せめて子供を相手にでも怨みを齎らしてやれ、腹いせをしてやれつていう魂膽なんですよ！

じつにあいつは執念深い奴ですよ——取るに足らん奴には違いないが、じつに執念深い奴ですよ、むしろ悪鬼羅刹みたいな奴です。もとはあれでも精一ぱい紳士きどりで構えていたもんですが、もともとあいつは大たわけにすぎんです。だから御覽なさい——あの男が身をもち崩したのだから、元來が自然の成行きにすぎないですよ！と、いった哀れ憫然たる男なんです。ねえ、奥さん、われわれは基督者の目をもつて眺めてやらなきゃならないですよ！ですからね、私はその——あの男に對する態度を斷然變えてみようと思ふんです。つまりあの男を愛しいたわつてやろうと思ふんですよ。これは私の立場からみれば、むしろ『いい功德』になるわけですよ。だって、なんといいつたつて私はあの男に濟まんことをしているに違いないのですからね！それにね、ついでだからこれも申しあげますが、T市にいた時私は急に四千ルーブルの金が入用になつたんですよ。するとあの男は、お役に立ちさえすればどんなに嬉しいことかと本心から喜んで、証文一枚とるではなしに、即座にその金を用立ててくれたんですよ。そしてまあどうでしょう、この私はそれをあの男の手から手渡しに受け取つたんですよ。ねえ、そのお金をあの男から受けたんですよ、まるで親友から受けでもするよ様な平氣な顔をしてね！」

「けどねえ、もう少し仰しやることにお氣をつけ遊ばせな」と、今までの話全體に對して、クラヴィヂヤ・ペトロヴナは氣づかわしげに注意した、「とてもなんだか有頂天になつてらっしゃるわ。それが私ほんとに心配ですよ！そりゃリーザは今じゃもう私の娘も同然には違ひありませんわ、けれどまだまだそこには、未解決な問題がどつきりありますわ！何よりも大切な

ことは、この際あなたがもつと慎重におなりになることですわ。あなたが今のような幸福な、有頂天な氣持になつてらっしゃる時には、なおさらのこと慎重におなりになる必要があるのよ。一體あなたという人は幸福な氣持になると、とても鷹揚になんでもかでも赦したくなるのが癖ね——と彼女は微笑しながらつけ加えた。

そこへヴェリチャー・ニコフを見送りに一同が出て來た。今まで庭でリーザと遊んでいた子供たちも、彼女を連れてあらわれた。打ち見たところ、子供たちは先刻よりも一そうリーザを扱い兼ねているらしかった。やがてヴェリチャー・ニコフがさような言いながらみんなの前で接吻を興えて、明日はきつとお父さんを連れて來るからと、眞情をこめて約束をくり返した時には、リーザはすっかり怯氣づいてしまった。彼女は黙りこくつたまま、彼のほうへ眼をあげずにいたが、いよいよ彼が馬車に乗りこもうという瞬間になると、いきなり彼の袖にしがみついて、哀願するよ様な眼でじつと彼を見上げながら、みんなのいないほうへ引つ張って行つた。何か彼に言いたいことがあると見える。で彼は早速、彼女を別間へ連れて行つた。

「どうしたの、リーザ？」と彼は優しく勵ますように問いかけたが、彼女はまたびくびくとあたりを見廻しながら、彼をもつと離れた隅のほうへ引つ張って行くのだった。一同の視線のまったく届かない場所へ行くつもりらしい。

「どうしたの、え、リーザ、どうしたのさ？」

彼女はやはり無言のまま、まだ口を開く決心がつかないらしかった。例の空色の大きな眼でま

じまじと彼の眼に見入っている、そのいたいけな顔は残る限なく、狂氣じみた恐怖の色に蔽われている。

「あの人は……首を縊るわよ！」と彼女は謔言のように呟いた。

「首を縊るって、誰が？」とヴェリチャーニノフは仰天して問い返した。

「お父さんが、お父さんがよ！ お父さんは夜なかに細引で首を縊ろうとしてたのよ！」と少女はせかせかと息を切らしながら言った、「あたし見たのよ！ こないだも細引で首を縊ろうとしたんですって、自分でそう言ってたわ、そう話して聴かせたわ！ もっと前にだって縊ろうとしたの、しょっちゅう縊ろうとしているのよ。……あたし夜なかに見たの……。」

「そんなことがあるもんか！」とヴェリチャーニノフは半信半疑で囁くように言った。

と、彼女は急に彼に飛びついて手に接吻した。泣きだして、こみあげてくる涙のため息もたえだえに、何ごとかしきりにたのんだり哀願したりするのだったが、何しろヒステリックな片言の連続なので、彼にはさっぱり意味がつかめなかった。そしてこの責め苛まれた子供が、狂氣じみた恐怖にとらわれながら、しかも最後の望みの綱にすがるように、彼にじっと注いだ疲れ惱める眼差しは、その後になっても永久に彼の記憶から消え去らず、夢に現にまざまざと浮かんでくるのであった。

『それにしてもあの子は、それほどあの男を愛してるのだろうか？』——熱に浮かされたような苛立たしい氣分で町へ戻ってくる途々、彼は嫉妬とも羨望ともつかぬ氣持で考えるのだった、

『現にあの子はつい先刻も、お母さんのほうが好きだと言っていたじゃないか……いやいや、おそらくあの子はいつを憎んでるんだ、愛してなんぞいるものか！……』

『それにまた、あの首を縊るといふのは一體どうしたことだろう？ 一體あの子はなんのつもりであんなことを言いだしたんだろう？ あの男が、あの大たわけが首を縊るって？……いや、これは突きとめる必要がある。是が非でも突きとめなくちゃならん！ そしてできるだけ早く萬事を解決せにゃならん——洗いざらい解決をつけにゃならん！』

七 夫と情夫が接吻し合う

彼は『突きとめる』ことをひどく焦った。

『今朝おれは呆氣にとられてぼかんとしていたんだ。ほんとに今朝は冷静に物を見る餘裕がなかったんだ』と彼は、はじめてリーザを見かけた時のことを思い出しながら考えた、『だが今度こそは——突きとめてやらなくちゃあ。』一刻も早く突きとめたい一心で、彼は眞直ぐにトルーソツキイの宿へやれと馭者に命じかけたが、すぐそれじゃ性急すぎるわいと思ひ返した。『いやいや、それよか奴のほうから出かけて来るのを待ったほうが上策だ。俺はその間に、この忌々しい訴訟の一件を急いで片づけちまおう。』

そこで彼は熱にでも浮かされたように、事件の整理にとりかかった。ところが問もなく、今日

のような落着かぬ氣持では、とてもそんな仕事に手をつけるわけにはゆかぬことに氣がついた。彼が食事に出かけたのは五時だったが、その時になって不意とある笑止な想念が初めて彼の頭を訪れた。「待てよ、こうして俺は自分からこの事件に嘴を突っ込んで、裁判所から裁判所へとせかせか駆けずり廻ったり、今ではもう俺を敬遠しかけている辯護士を捉まえて御託を並べたりしているが、そのじつおれは、ただ事件の運びの邪魔をしているのにすぎないのじゃあるまいか」と、ふとそう思ったのである。彼はこの自分の推量が面白くなって、愉快そうにからからと笑った。「ところで、もしこんな考えが昨日おれの頭に浮かんだとしたら、俺はさだめしひどく惱げ返つたに相違あるまいか」と彼はますます面白くなって、こうつけ足したところが、こうした愉快な氣持になつたにもかかわらず、その一方では彼はますます落着きのない苛々した氣分になつてゆくばかりだった。やがての果てには陰氣な氣持に沈んでしまった。平静を失つた彼の想念は次から次へといろんな題目に取り纏つて行つたが、結局のところ彼が本當に求めているものは一つとして捉えられはしなかつた。

「俺に必要なのはあいつなんだ、あの男なんだ！」と、彼はやがて斷案をくだした、「まずあいつの謎を解かなくちゃならん。裁斷するのはそのうえでのことだ。ようし——決闘だぞ！」

七時に宿へ歸つてみると、パーヴェル・パーヴロヴィチがまた來ていないので、ひどく意外な氣がした。やがて意外さは忿怒に變り、暫くすると今度はがっかりと氣落ちがして來、とうとうしまいには心配になりはじめた。「わからない、わからない、ああ一體この結末はどうつくんだ

ろう！」と彼は、部屋のなかを歩き廻つたり、安樂椅子にごろりと横になつたりしながら、一刻も時計から眼を放さずに、そうくり返した。そろそろ九時近くなつて、やつとのことでパーヴェル・パーヴロヴィチが姿を見せた。

「もしこの男が初めから一ぱい喰わす氣でいたのなら、俺をやつつけるに今みたいな機會はまたとないに違いない——御覽のとおり、俺は土臺もうこんぐらかつているからなあ」と、急に元氣づいて、おそろしくはしゃぎだしながら、彼は心に思った。

なぜこんなに遅くなつたのかと、勢いこんだ浮き浮きした調子でヴェリチャーニノフは浴びせかけたがパーヴェル・パーヴロヴィチは妙に歪んだ微笑でそれに答え、昨夜とはうって變つたうち融けた態度で椅子に腰をおろし、例の喪章つきの帽子を氣輕にぼいとそばの椅子へほうつた。ヴェリチャーニノフは早くも相手のうち融けた態度を見てとつて、それをまず胸に疊んだ。

先刻までの興奮はどこへやら、至極おだやかな口調で、餘計な言葉は交えずに、彼はまるで上役に報告でもするような調子で、リーザを先方へ送りどけた話から、向うの人たちが彼女を親切に迎えてくれた話、あそこの生活が彼女にはどんなに藥だか知れないということ物語るのだった。そのうちだんだんとリーザのことはまるで忘れてしまったような顔をして、目だたぬように話の向きを變えながら、しまいにはボゴレーリツェフ一家のことに話を集中してしまつた。つまり、じつに氣心のいい人たちであるとか、自分がどんなに昔から彼等と馴染であるとか、ボゴレーリツェフという男がどんなに立派な、のみならず有力な人物であるとか、そういつた

話をしだしたのである。パーヴェル・パーヴロヴィチは放心したような様子で耳を傾けていた。そして時々じろりと上目を使って、氣むずかしげな狡るような薄笑いを浮かべて、相手を見やった。「あなたは燃えたち易い方かたですな」と、何か特別に厭味つたらしい微笑を浮かべては、呟くように言った。

「ところであなたは、今日は妙にひねくれてますね」と、ヴェリチャーニノフはさも心外そうにやり返した。

「だが私だって、人並みにひねくれてみたってよさそうなもんですな？」と、いきなり部屋の隅から躍り出るような勢いで、パーヴェル・パーヴロヴィチは突然どなりたてた。まるでその一言をきっかけに躍り出してやれと、待ち構えていたようであった。

「そりやまったく御随意ですがね」とヴェリチャーニノフは、にたりと笑った。「じつは、何ごとかあなたの身にあつたのじゃないかと思つたもんで。」

「そりや大ありでさあ！」と、まるで何ごとかあつたということを自慢するような口吻で、相手は叫びたてた。

「そりやまた、何ごとがね？」

パーヴェル・パーヴロヴィチは、ちよつと返事をためらつたが、

「じつはね、例によつてあのステパン・ミハイロヴィチに、まんまと一ぱい喰わされたんで……。ほら、あのバガウトフですよ、上流社會出の、ちゃきちやきのペテルブルグっ兒でさあ。」

「またしても玄關拂いを喰つたんですかね？」

「いいや、そうじゃない。今度はどうぞお上がりくださいってわけでしたな、初めてなかへ通されて、拜顔の榮を得たんです。……ただその、御當人はもう亡者だつたんで！……」

「な、なんですと！バガウトフが死んだって？」とヴェリチャーニノフは、何もそんなにびっくりする義理合もなさそうなものを、ひどく仰天して叫び返した。

「そのとおりに！ 思えばこの六年のあいだ、かわらざる親友でした！ それもつい昨日、おひる正午近くに亡くなったのを、私は夢にも知らなかつたんです！ 考えてみると、私はちよつどその臨終の瞬間に、時候見舞いに訪ねて行つたわけでした。明日葬式を出して埋葬してしまふとかで、もうお棺に入れてありました。お棺には暗紅色の天鵞絨の蔽いがかけてあつて、縁どりは金の組紐でしたっけ……そうそう、死因は神経熱だつたそうですよ。ちゃんと奥へ通されて、つくづくと死顔を拜んで來たんです！ あがる時、故人の莫逆の友人だと名乗つたもので、それで奥まで通してもらえたんですな。ところで、あの男がこの期に及んでやつと、六年間のかわらざる友情で結ばれた心からの友達になつてくれたのは、これは一體どうしたわけでしょうかね？———そこですよ、私の伺いたいのは！ じつをいうと私のほうはどうかという、ただあの男に會いたいばかりに、ペテルブルグ三界までのこのこ出かけて來たとも言えるんですからね！」

「だが、あなたはなんだつてあの男のことでそんなにぶりぶりしてるんですね」とヴェリチャーニノフは笑いだした。

「まさかあの男が、故意と死んだんじゃあるまいし！」

「だから私だって、このとおりの哀悼の意を表しながら物を言ってるじゃありませんか。何ものにも代えがたい親友でした。あの男は私にとって、つまりこれだったんです。」

と言わざまパーヴェル・パーヴロヴィチは、いきなりまっただしぬけに、禿げあがった自分の額のうえに二本の指で角の形をこしらえて（譯者註。他人の妻と通ずることを、その良人に「角を」生やさせる」という。この慣用句に基く動作である。）小聲で連続的にひゅゅと笑った。彼はものの三十秒ほどそうして角をこしらえたまま、ひゅゅと笑いながら、自分の毒々しい鐵面皮さにさながら陶酔したもののような眼つきで、じつとヴェリチャーニノフの眼を覗きこみながら坐っていた。こっちはまるでもう、幽霊でも見たような工合に、その場に釘づけになってしまった。しかし彼の釘づけのていは、ただほんの瞬間つづいたにすぎなかった。次の瞬間ヴェリチャーニノフの口邊には、せせら笑うような、それでいて鐵面皮なほど落着き澄ました微笑の影が、ゆるやかに浮かびあがってきた。

「それは一體なんのおつもりですかね？」と彼は空とぼけて、また言葉を長く引っぱりながら訊いた。

「これは角のつもりでさ」と、パーヴェル・パーヴロヴィチはずばりと切つて返し、ようようのことで額から指を離した。

「というところ……あなたの角ですか？」

「いかにもこの私のです、私の授かり物なんですよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、また

もやじつに厭らしいしかめ面を見せた。

二人は暫く無言だった。

「いやこれは、あなたもなかなか勇敢な人だ！」とヴェリチャーニノフは口に出した。

「それは私が角をお目にかけてからですか？ 時にどうです、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、それよか何か御馳走しては頂けませんかなあ！ あなたがTにおいでのところは、まる一年というもの毎日のように、あんないい御馳走をしてあげたじゃありませんかね……。一杯飲ませてくださいよ、咽喉がからからになっちゃった。」

「ようござんすとも。そうならそうと、早く仰しゃってくださいればよかったのに。——時に何を召あがりですか？」

「召あがりですか、じゃありませんよ。何を一緒にやりましようかと仰しゃい。ねえ、ひとつ一緒に飲ろうじゃありませんか、いかがです」と挑みかかるような、それでいて同時にまた一種奇妙な不安そうな様子で、パーヴェル・パーヴロヴィチはじつと彼の眼に見入った。

「シャンパンにしますか？」

「でなくて何にしますかね？ まだヴォトカの出る幕でもなし……。」

ヴェリチャーニノフは緩くりと起ちあがって、呼鈴を鳴らしてマーヴラを階下から呼び、酒の仕度を命じた。

「喜ばしき再會をことほいで、祝杯をあげるわけですな。何しろ相見ざること九年でしたから

なあ」と、要りもせぬ文句を取ってつけたようにパーヴェル・パーヴロヴィチは言つて、くすくす獨り笑いをした、「今じゃもうあなたが、いやあなたお一人だけが、私にとつてのまことの友だちというわけですからね！ ステパン・ミハイロヴィチ・バガウトフ今や亡いですからなあ！ 詩人の文句で言えばこうですよ。――

大いなるパトロクルス*は今や亡く
（譯者註。「イリアッド」中のギリシヤの勇士。アキレスの親友で、トロイ勢を追撃中へクトルのため仆された。）
 卑しきテルシーテス*は残りける！
（譯者註。トロイ攻圍のギリシヤ陣營中で最も醜惡で卑劣漢。ホメロスによればアキレスに殺されたという。）

この『テルシーテス』という言葉を口にした時、彼は自分の胸を指先でとんと突いた。

『ちえつ、この豚野郎め、さつさと腹のなかをぶちまけたらいいじゃないか、もともと俺はあてこすりは大嫌いなんだ』とヴェリチャーニノフは心に思った。憎念に胸は煮えくり返つて、彼はもう先刻からやつとのことで自制していたのである。

「ちよつと伺いますがね」と彼はさも忌々しげに口を切つた、「そんなに眞向からステパン・ミハイロヴィチを非難されるのでしたら（彼は今ではもうこの男をバガウトフなどと呼び棄てにはしなかつた）、――その當の侮辱者が死んだことは、あなたには嬉しいはずじゃありませんか。それをなんだつてあなたはぷりぷりしてゐるんです？」

「そりやまたどんな嬉しさですわ？ なんだつてまた嬉しいんでしよう？」

「私はあなたの氣持になつてそう考えるだけですよ。」

「えへへ、その點に關する限り、あなたは私の氣持を誤解してらっしゃるですな。さる賢人の言い草じゃないが、『死せる敵はよし、されど生ける敵はさらによし』つてね、ふ、ふ！」

「だがあなたはその生ける敵なるものを、たしか五年間も毎日見てらしたはずじゃありませんか。いいかげん見飽きはしませんでしたかね」とヴェリチャーニノフは、底意地悪くつけつけと斬りこんだ。

「じゃそのころから……そのころから私が感じてたど仰しやるんですか？」と突然パーヴェル・パーヴロヴィチは、またもや隅から躍り出るような勢いで叫びたてた。その様子には、とうとう待ち構えていた問いを相手にかけてきた、とでもいいいたげな喜びの色さえ見えた。――「じゃ一體あなたという人は、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、この私をどんな人間だと思つてらっしゃるんです？」

と、にわかには彼の眼差しには、あるまじく新らしい思いもかけぬような色が閃めいた。それは、今まで厭らしい澁面ばかり作つていた、毒念に満ちた彼の顔を、まったく別の顔つきに變えてしまうほどはげしいものであった。

「じゃ、あなたは本當に何一つ感づかなかつたんですか！」とヴェリチャーニノフは、あまりのことの意外さに途方に暮れて口走つた。

「どうして感づくはずがありませんか！ おお、ユピテ

ルのともから(譯者註。みずからを全智)よだ！あなたにかかっちゃ、人間も犬っころとおなじなんだ。なんでもかでも自分の狭い了簡で判断しようとなさる！さあ、これだ！これを一つ鶏呑みにしてもらいましょうか！——と言いきま、彼は憤然としてテーブルを拳で叩いた。が、すぐさま自分のほうがその音にびっくりして、おどおどした眼つきをした。

ヴェリチャーニノフはきつと相手を見返した。

「いや、パーヴェル・パーヴロヴィチ、あなただっておわかりでしょうが、そもそもあなたが感づいておいでだったろうと、おいででなかつたらうと、私にとってはまったくどっちだっていいことじゃありませんか？もしあなたが知らずにおられるのなら、それはなんといいってもあなたの名譽になるんだし……。それはそうと、私にはどうも腑に落ち兼ねるんだが、なんだってあなたは私なんぞを、打明け話の聴き役に選ばれたんですか？……」

「私は何もあなたのことを……。怒らないでください、何もあなたのことを言ってるんじゃないんです……」とパーヴェル・パーヴロヴィチは眼を落として、呟くように言った。

マーヅラがシャンパンを持ってはいって来た。

「そうら来た！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは一條の血路を見出した者の喜びを明らかに見せて、叫びたてた。

「コップは、姐さん、コップはどうしたね、よう、素敵、素敵！いやもうこれで何一つ不足はありませんよ。おまけに栓まで抜いてあるんですかい？大した氣の利きようだ、全く恐れ入

ったね、別嬪さん！じゃ、もう向うへ行ってもよござんすよ！」

そして、みるみる勢いを盛り返して、またもや不敵な眼つきをヴェリチャーニノフに注いだ。「まあ白状するんですね」と彼はいきなり忍び笑いをした、「こういった話はあなたにとつてじつに興味津津たるものがあるんでしょう。今仰しゃったように『まったくどっちだっていいこと』どころじゃないんでしょう。だから、もし私がこのまま話を打ち切つて、今すぐ起ちあがつて歸つてしまつたら、あなたはさだめし憎げ返るに違いないですな。」

「なあに、平氣ですよ。」

『へ、嘘つけ！』パーヴェル・パーヴロヴィチの微笑がそう言った。

「ところで、ぼつぼつはじめましょうか！」と彼は二つのグラスをなみなみと満たした。

「乾杯を致します！」と彼はグラスを上げながら宣言した、「天國に眠る友ステパン・ミハイロヴィチの健康を祝す！」

彼はグラスをあげてぐつと飲みほした。

「そんな乾杯は御免を蒙りましょう」とヴェリチャーニノフはグラスを下に置いた。

「なぜですか？愉快な乾杯じゃありませんか？」

「ねえ、あなたは今ここへいらした時、もう酔つてらしたんじゃないありませんか？」

「ちよつと飲つて来ました。それがどうかしましたかね？」

「いや別になんでもありませんがね。ただ私には、あなたが昨夜も今朝も、わけても今朝など

は、亡くなったナターリヤ・ヴァシーリエヴナの事を心から悲しんでおられるように見えたものでね。」

「で、今は家内の事を心から悲しんでいないと、どこの誰があなたに言いました？」とたちまちパーヴェル・パーヴロヴィチは、またもや撥條せんまいを引き抜かれでもしたように、躍りかかってきた。

「いや、私はそんなことを言ってるんじゃない。御自分でもおわかりのことと思うが、ステパン・ミハイロヴィチの一件は、ひょっとしてあなたの思い違いかも知れんですからねえ。そして、何しろことは重大ですからなあ。」

パーヴェル・パーヴロヴィチはにやりと狡るそうに笑って、妙な目くばせをした。

「ははあ讀めた。あなたは、この私がどうしてステパン・ミハイロヴィチのことを嗅ぎつけたか、それが知りたいとみえますなあ！」

ヴェリチャーニノフはさつと顔を赤らめた。

「もう一度言わせてもらいますが、私にはどっちであろうとおなじことですよ」と言つて、『こいつめ、この酒壇もろとも今ひと思いにほうり出せないもんかなあ』と、ぷりぷりしてそう考え、そのためますます赤くなった。

「なあに、いいでさ！」と、相手を力づけでもするようにパーヴェル・パーヴロヴィチは言つて、自分のグラスを再び満たした。

「じゃ只今すぐ、いかにして私が『一部始終』を嗅ぎつけたかをお話しして、あなたのその火のような熱望を満たして差上げることにしましょう……だって、何しろあなたは燃えたち易い方かたですからね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、おつそろしく燃えたち易い方ですからねえ！えへへ！とときにまず煙草を一本頂きたいですな、というのはこの三月からこつち、私は……」

「さあどうぞ。」

「三月からこつち、すっかり身をもち崩しちまいましたねえ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。それというのも、みんなこうしたことからなんですよ——では聽いて頂くとしましょうかね。——そもそもですな、あの肺病という奴は、あんたも先刻御承知のとおり」——彼は次第に狎々しい口の利きようを شدした、「まことに面白い病氣でしてなあ。肺病患者というものは、自分が明日死ぬなんてことは夢にも考えずに、時々刻々に死に近づいて行くものなんです。そこであのナターリヤ・ヴァシーリエヴナも御多聞にもれず、息を引きとる五時間前だというのに、もう二週間したら四十露里離れた町に住んでいる叔母さんのところへ出かけるつもりでいたんです。それからもう一つ、これは多分あなたも御存じのことと思うが、世の婦人たちに共通な、いやおそれらくその婦人たちをめぐる紳士方にさえも共通な、一つの習慣——というよりむしろ悪習がありますな。つまりそれは、戀文にぞくする古反古を手許に藏たくっておくという奴ですな。安全なことを言つたら煖爐へほうりこむに越したことはないでしょうにね、そうじゃありませんかね？とところが、連中ときたらどんな紙屑の切れっぱしでも、後生大事に手文庫や針箱のなかに藏いこ

んで置くんです。それどころか、年代や日付や部類わけにして、番號まで打つてあるという始末なんです。そんなのが御當人にしてみりゃあよほど心の慰めになるんでしょかね——そこんところは私にはわかりませんが、とにかく楽しい思い出のための所作には違いないですな。——さて、何しろ亡くなる五時間前までは叔母さんの誕生祝いにしかけるつもりでいたほどですから、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナはむしろ自分が死ぬなんてことは考えてもいませんでしたし、いよいよ息を引きとるという時まで、相變らずゴッホ先生の來られるのを待っていたようなわけです。そんな様子でナターリヤ・ヴァシーリエヴナが亡くなると、螺鈿と銀で象眼のしてある黒檀の手文庫が、そのまま彼女の書卓のなかに残ってしまったのです。それは妻が祖父から受けついで謂わば父祖相傳の手文庫でしてね、ちゃんところ鍵のかかるようになった、なかなかきれいなものでしたよ。ところで——じつにこの手文庫からして、一切の事情が暴露することになったんですよ。つまり何もかも洗いざらい、およそこの二十年來あったことが一つ残らず、御丁寧に目付別け年代別けになって、ばれちまったんです。おまけにまたあのステパン・ミハイロヴィチという男がすこぶる文學好きときてたもんでね、一篇のすこぶる情熱的な戀愛小説を物して雑誌に投稿したことさえあるくらいですから、くだんの手文庫に發見された彼の作品は百篇に垂んとするといった始末でしてね——もつとも五年の月日でしたからなあ。なかにはナターリヤ・ヴァシーリエヴナが手ずから番號を記入した奴までありましたっけ。でどうでしょうな、こんなことは一體良人の身にとって、愉快なことでしょうか？ どうお考えですか？

ヴェリチャーニノフは素早く當時のことを思い合せて、自分が一通の手紙も一通の覚え書きもついでナターリヤ・ヴァシーリエヴナ宛に出した覚えのないことを確かめた。ペテルブルグへ舞い戻つてからは、なるほど手紙を二通出すには出したが、それはかねての申しあわせにしたがつて上書きを夫妻連名にして置いたのである。またお拂箱を宣言してきたナターリヤ・ヴァシーリエヴナの最後の手紙には彼は返事も出さなかった。

物語を終えたパーヴェル・パーヴロヴィチは、たつぷり一分間は口を噤んで、にやにやと押しつけがましい微笑を口邊に漂わし、相手の返事を暗に促すのであった。

「どうしてあなたは、私の質問に返事をなさらないんですね？」と、とうとう瘡れを切りして、苦痛の色をありありと浮かべながら、彼は口走った。

「と仰しゃると、どんな質問でしたっけ？」

「それ、手文庫の蓋を開いた夫の氣持が、愉快なものかどうかということですよ。」

「おやおや、それが私の知ったことですかい！」とヴェリチャーニノフは苦々しげに片手を振り、椅子を離れて、部屋の中をあちこち歩きはじめた。

「して私はあえて斷言しますがね、あなたは今私のことを、『自分から寝とられの一件をしゃあしゃあと白状するなんて、この汚らわしい豚野郎め』とお考えですね、へ、へ！ なんともはや口喧ましい人だな……あなたという人は。」

「そんなことはちつとも思つちやいせんよ。それどころかあなたのほうが、當の侮辱者に死

なれておそろしく気が立っていらつしやるんですよ。おまけに酒もやりすぎておられるようだ。もつとも私としちゃ、それもこれもそうそう御無理のない次第だと思えますがね。あなたが生きたバガウトフを求めてらした気持は、私にはじつによくわかるんです、だからあなたの御無念さはさぞかしと察し入る次第ですがね。ただ……」

「だが、そのあなたの御見解によると、私はなんでバガウトフを求めていたことになるんですか？」

「それは私の知ったことじゃないですなあ。」

「いや、てつきり決闘のことを仰しゃってらしたんでしょう？」

「ちえつ、くだらない！」ヴェリチャーニノフはますます自制を失ってきた、「私の考えていたのはこれですよ——つまり、いやしくも紳士たる者は……こうした場合にあっては、茶番じみた寝言や、愚にもつかないお芝居や、笑止千萬な愚痴や、へどの出そうな當てこすりや——そういった仕事にまで身を落とすことはあえてしないものだ、なぜってそれじゃますます恥の上塗りになるばかりですからね。それより、正々堂々と正面きって行動するものだ、と思うんですよ——紳士としてね！」

「ほほうなるほど、ですがこの私が紳士なんかじゃないとしたらどうなりますね？」

「それもやはり私の知ったことじゃないですな……それはそうと、そういうことのあるあとで、生きたバガウトフがあなたに入用になったのは一たいどうしたわけなんです？」

「いやそれは、ほんの一目でも友だちの顔が見たかっただけです。まあ一本買って、ともに杯をあげたかったんですな。」

「あの男があなたと一杯やろうとは思えませんなあ。」

「そりやまたなぜね？ *Noblesse oblige* (譯者註。貴族の體面にかかわる) ですかね？——だが、現にあなただつて、こうして私と差向かいで飲んでおられるじゃありませんか。あの男のどこがあなたより立派だというんです？」

「私はあなたと一杯やった覚えはありませんよ。」

「なんだつてまたあなたは、急にそんなに高慢になられたんです？」

ヴェリチャーニノフはいきなり、引撃ったような神経質な笑い聲を立てて、

「へっ、糞っ！ あんたという人は、じつにその一種『肉食型』の人ですなあ！ じつをいうと

今の今まで、あなたは一介の『永遠の夫』にすぎんと思つてたんだが、なかなかどうして！」

「そりやなんのことで、その『永遠の夫』つていうのは？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは俄然聴き耳をたてた。

「いやなに、夫の一つの型タイプなんですがね……説明すると長くなります。それよかそろそろ引き上げて頂きましょうか、もう歸つておやすみになる時刻ですよ。あんたにはうんざりしましたよ！」

「それに、その肉食つていうのはどういうことです。今たしか肉食型とか仰しゃいましたね？」

「ええ、言いましたよ、あなたは『肉食型』だってね。——あなたに對する嘲罵としてね。」
 「で、その『肉食型』っていうのは一體どういう意味なんです？ 話してくださいよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、お願いです、後生です。」

「いや、もう澤山だ、澤山ですよ！」と急にまたもおそろしく腹をたてて、ヴェリチャーニノフはどなった、「もうお歸んなさい、出て行ってください！」

「どっこい、澤山じゃないですよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチも憤然として躍り上がった、「よしんば私のほうでもあなたにうんざりしているにしても、まだまだ澤山どころの騒ぎじゃありませんや。だって私たちはまず一杯やらなければならんですからね！ プロジット、かちんとゆかなけりゃならんですからね！ それが濟んだら引き上げますがね、今んところはまだまだでさあ！」

「パーヴェル・パーヴロヴィチ、あなたは今夜ここを出て失せてくださるんですか、否ですか應ですか？」

「そりゃ、いかにも出て失せてはあげますがね、その前にまず一杯いきましようや！ あなたはこの私とは飲みたくないと言っちゃったが、私のほうじゃまた、この私と一杯つき合って頂きたいんですよ！」

彼はもう道化の面をはずしていた。えへら笑いもしていなかった。またしても俄かに彼の相貌は一變してしまい、つい今しがたまでのパーヴェル・パーヴロヴィチの姿や調子とは、似ても似

つかぬものになってしまったので、さすがのヴェリチャーニノフもすつかり見當がつかなくなつた。

「さあ飲みましよう、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。嫌だなんて言わないでさ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、ぎゅつと彼の手首をつかみ、異様な眼つきで相手の顔に見入りながら、言葉をつづけた。それで見ると、ただの乾杯だけの話でないことは明らかだった。

「じゃあ、やりますか」と相手は呟くように言った、「だが肝腎の酒が……飲み滓じゃあ……」
 「ちやうど二杯分残ってる、きれいな飲み滓がね。じゃあ飲りましよう、かちんとゆきましようぜ！ さ、どうぞ杯をお取りなすつて。」

二人はグラスを打ち合わせて、ぐつと飲みほした。

「さあ、こうなつた以上は、もうこうなつた以上は……ああ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチはやにわに片手で額をひつつかんで、數秒のあいだそのままの姿勢でいた。ヴェリチャーニノフは、今こそいよいよ相手が最後の言葉を吐き出そうとしている、とそんな氣配を漠然と感じた。しかしパーヴェル・パーヴロヴィチは一言も言い出さなかった。彼はただ、ヴェリチャーニノフをじろりと瞥して、またもや先刻のように、にやりと狡猾そうな、目くばせでもするような微笑を、口もと一ぱいに靜かに浮かべただけであった。

「一體あなたは、この私にどうしろと言うんです、ええ酔っ拂いの先生！ 私をからかうんですね！」とヴェリチャーニノフは地團駄を踏んで、狂氣のようになつた。

「まあお静かに、お静かに、なんだってそうがなるんです？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチはあわてて片手を振った。「からかうなんて、とんでもないこつてすよ！あなたにはおわかりですか、今ではあなたが私にとって——それ、このとおりの方かたになられたことがですよ！」

と言うが早い、いきなり彼の手をとって唇を押し當てた。ヴェリチャーニノフはハツと思う暇もなかった。

「今じゃあなたは、私にとってこういうかたなんですよ！じゃあもう——ここらで出て失せるとしましようかな！」

「ああ、ちよつと。ちよつと待つてください！」とヴェリチャーニノフはわれに返つて、呼びとめた、「つい申し忘れたんですが……」

パーヴェル・パーヴロヴィチは戸口でくると振り返つた。

「つまりですね」とヴェリチャーニノフはおそろしく早口に、顔をあからめて、まったくそつぽを向いたまま、呟くようにはじめた。「あなたは明日はどうしてもボゴレーリツェフの家へ顔を出さなきゃいけませんね……お近づき旁々お禮につてわけですな——どうしてもね……」

「行きますとも、必らず行きますよ、ちゃんんと承知のすけでさあ！」とわざわざ念を押すには及ばんというしるしに片手を素早く振りながら、待つてましたと言わんばかりの勢いでパーヴェル・パーヴロヴィチは相手の言葉を引きとつた。

「おまけにリーザさんもあなたのおいでを待ち焦れていますからね。私は連れてくると約束

を……」

「リーザ？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチはやにわにまた振り返つた、「リーザですと？だがあなたは御存じですか、あのリーザが私にとって何者であつたかということ。曾て何者であり、現にいま何者であるかということ？いいですか、曾てあり、現にある、ですよ！」と、彼はほとんど狂せんばかりのいで、急に叫びたてた、「だが……へっ！そりやまああと廻しでさ。そのほうは一切後廻しにしましょうぜ。……さし當つてはと、じつはねアレクセイ・イヴァーノヴィチ、あんたと乾杯しただけじゃ、どうも私は物足りないんですがね。も一つ、是非とも聴きとどけて頂きたいお願いがあるんですよ……」

彼はそばの椅子に帽子を置くと、また最前のように、少々息を切らしながら彼を見つめた。

「私にキスしてください、アレクセイ・イヴァーノヴィチ」と、だしぬけに彼は切りだした。

「酔っていますね？」と、こつちは叫んで、たじたじとなった。

「いかにも酔つちやおりますがね、それはとにかく、キスしてください。アレクセイ・イヴァーノヴィチ、さあ、キスしてください！私だって今しがた、あなたの手にキスしたじゃありませんか！」

アレクセイ・イヴァーノヴィチは、棍棒の一撃を眉間に喰らいでもしたように、暫らくは口も利けなかつた。が突然、彼は自分の肩までしかないパーヴェル・パーヴロヴィチのほうへ身をかがめて、その唇に接吻した。ひどく酒臭かつた。とはいえ彼は、自分が相手に接吻したというこ

とを、必らずしもはっきり意識していたわけではなかった。

「さあやつと、今だからこそやつと……」と、酔眼をきらきら光らせながら、再び狂せんばかりの酔態をあらわして、パーヴェル・パロヴィチは叫びたてた、「今だからこそ言いますがね、あの時私はこう考えたもんでさ——『あの男も本當にそうなんだらうか？もしあの男も、あの男までそうだったとしたら、この先誰一人として信用は置けんことになる！』ってね。」

パーヴェル・パロヴィチは、急に聲をあげて泣きだした。

「だから、わかつてくださるでしょうね、今じゃ本當の友だちは、あなた一人だということがね？……」

そう言うとき彼は帽子をかかえて、逃げるように部屋を出て行ってしまった。ヴェリチャーニフは、ゆうべのパーヴェル・パロヴィチの最初の來訪のあととおなじく、またもや數分間ひとつ場所に、じつと立ちつくしていた。

『ええ、相手はどうせ酔っぱらいの大たわけだ、それだけの話さ！』彼は片手を振った。

『斷じてそれだけの話さ！』と、やがて服をぬいで寢床に横になった時、彼は力をこめてもう一度くり返した。

八 リーザの病氣

あくる朝、ヴェリチャーニフは、ポゴレーリツェフ家へ行くためきつと遅れずに來ると約束したパーヴェル・パロヴィチを待ちうけながら、部屋のなかをあちこち歩き廻っては、珈琲をちびりちびりやったり、煙草をふかしたりしていた。その間じゅう絶えず彼は、自分が朝ふとめざめて、その前夜おのれの頬べたに受けた平手うちのことを絶えずじりじりと思ひ出している男に、つくづく似ているなと思えてならなかった。『ふうむ……さてはあいつめ事の真相を知り抜いてるんだな、そしてリーザをだしに使って俺に復讐を企んでるんだな！』と、彼はぞつとしながら思った。

哀れな幼女の愛らしい面影が、ふと物悲しく彼の眼の前を横切った。今日、それもほどなく、もう二時間もすれば、俺のリーザにあえるんだと思うと、彼の胸ははげしく高鳴りはじめた。『ええつ、このうえ何の文句があるんだ！』と彼は熱をこめて斷定した、『これこそ俺の生活の全部じゃないか、俺の目的の全部じゃないか！平手打ちがなんだ、じめじめした追憶がなんだ！……俺のこれまでの生活ときたら一體なんのさまだ？ 混亂と悲哀だけだったじゃないか。……ところが今じゃ——まるで別物だ、心機一轉だ！』

だが、こうした有頂天な氣持にもかかわらず、彼はますます憂鬱になつてゆくばかりだった。『あいつはリーザをだしにを使って俺を苦しめようというのだ——これは明白だ！だからこそリーザをあんなに苛めるんだ。つまりそれでもって、過去の一切に對して俺に返報しようって魂膽なんだ。ふうむ……もちろんこの俺としちゃ、昨夜のような亂暴な眞似を奴が仕かけてくるのを、

そのまま許して置くわけにはゆかなくて——彼はさつと顔を赤らめた、『だが……しかし、これはどうだ、まだやって来ないわい。もう十二時だというのに!』

彼はじりじりしながら十二時半まで待った。胸の苦悶はますますはげしくなるばかりだった。パーヴェル・パーヴロヴィチは姿を見せない。とうとうしまいに、ずつと前から彼の胸に首をもたげていた想念——つまり、あの男はまたもや昨夜のような不意うちを喰わせたばかりに、わざとやって来ないつもりだなという想念が、彼を憤激の極に追いこんでしまった。『奴は知ってるんだ、俺の行動が奴の手中に握られてることを! それから、このまま行かずにいればあのリザがどうなるかということも! だが奴を連れずにどうしてこの俺が、おめおめとあの子の前へ出られよう!』

とうとう待ちきれなくなって、きつかり晝の一時に、自分からボクローフスキイ・ホテルへ馬車を驅った。宿の者に尋ねると、パーヴェル・パーヴロヴィチは昨夜はとうとうお歸りがなく、今朝八時過ぎに歸つてみえたが、ものの十五分もたたぬうちにまたお出かけになった、という話だった。ヴェリチャーニノフは、パーヴェル・パーヴロヴィチの部屋の戸口につつ立って女中の話をききながら、錠のおりてるドアの把手を無意識のうちにひねってみたり、押したり引つ張ったりしていた。ふとわれに返ると、彼はぺつと唾を吐いて錠前を思いきり、マリヤ・スイソエヅナのところへ案内をたのんだ。だが彼の来たことを耳にすると、自分からいそいそと出て来た。この女は氣立てのいい女房だった。ヴェリチャーニノフがあとになってこの女との話の顛末を、

クラウヂヤ・ペトロヴナに傳えた時の形容にしたがえば、『高尚な感情を具えた女房』であった。昨日あの『嬢っちゃん』を連れて行った先の首尾を手短かに問い訊してから、マリヤ・スイソエヅナはすぐさまパーヴロヴィチの行状に話題をむけた。その言葉を借りていうと、『あの娘っ子さんさえないなけりや、とうにあんな男は追つたてを喰わしてやるんですよ。ホテルからこの翼屋へ無理やりに移してもらったのも、じつを申せばあまりと見兼ねる振舞いが多いからなんでございますよ。一體あなた、物ごろのついた子供のいるところへ、よる夜なか變な女を連れこむなんて、なんぼなんでもひどすぎるじゃありませんかね!』『おい、この女はな、俺の氣持ひとつでお前のお母ちゃんになる人だぞ!』とこうどなるんでございますよ。おまけにどうでしょうね。その賣女ときた日にや、あの男の鼻面へぺつと唾を吐きかけたんですからね。そして『お前さんがあたいの娘なもんかね、お前さんなんか、うらなりの鬼子だよ』って、こうなんですよ。』

「まさか、そんなことが?」とヴェリチャーニノフは眼をまるくした。

「この耳でちゃんと聞いたんです。いくら酔っ拂っていて、まるで正體がないからといって、そんな眞似を子供の前でしていいものですかね。なんぼ年端もゆかない子供だといつても、それなりにちゃんと物の見分けはつくんですからね! 嬢っちゃんはしくしく泣いて、まるでもう生きた心地もないほどの悶えようなんです。それからまた近ごろのこと、この屋敷のなかで大ごとが持ち上がりましてねえ。なんでも人の話じゃ議員さんとか何さんだとかいう話でしたがね、その男が晩方来てホテルの一間を借りたかと思うと、あくる朝にはもうぶらんこ往生をしちまっ

たんですよ。お金をすつかり使い果たした擧句のことだとかいう話でしたがね。どやどやと人だかりがする。ちょうどパーヴェル・パーヴロヴィチが留守だったものですから、あの子は鬼のいない間というわけでその邊を駆けずり廻っていたんですね。私が見ていると、あの子はその部屋の廊下で、ぎっしりの人垣のあいだから、その有様を覗いてるじゃありませんか。さも不思議だといった顔つきで首つり人を眺めているんですよ。私はびっくりして、大急ぎでこっちへ引っ張って来たんですがね、まあどうでしょう、あなた——あの子はもう身體じゅうぶるぶる顫えが来て、まるで土色になつてるんですよ。おまけにやっここまで連れて来たと思うと、そのままばったり倒れちまつたんです。それからまあそのもがき廻ることといったら、あなた。でもそのうちに、やつとのことと気がついてくれましたんですよ。きつと驚風がなんかにとつつかれたんでしよう、その時からどつと寝ついてしまつたんです。やがてあの人を話聞いて歸つて来る——それからが大變、もう無暗矢鱈に振り廻すんです。あの子はめつたに手を上げることはない代りに、もうひどく抓るのが癖でしてねえ。暫くすると今度は一杯ひっかけた歸つて来てからに、そばへ寄るなりおどし文句を並べたもんなんですよ、『俺も首をくぐるぞ、お前が悪いばかりに首をくくつちまうぞ。それこの紐で、あの窓掛のところで首をくくつちまうぞ』って、そう言ひましてね、あの子の眼の前でわざわざ輪を結んで見せるんですよ。あの子は可哀そうにもう人心地も何もなくなつて——小ぢやな手であの人の袖にしがみついてね、喚きたてる始末なんですよ、『もうしないわ、もうきつとしないわ』ってね。みじめで、とても見ぢやいられませんでした。

わ！』

ヴェリチャーニノフは何か異様な話を聞かされることと覺悟はしていたものの、この話にはすつかりもう度膽を抜かれてしまつて、暫くは本當にすることもできなかつた。マリヤ・スイソエヴナはなおも言葉をついで、次々にいろんな話をしてきかさせた。例えばある時のごときは、幸いそばにマリヤ・スイソエヴナがいたからよかつたものの、さもない日にはリーザはきつと窓から飛び降り自殺を圖つたに違いない、とも言つた。

彼はまるで自分までが酔つ拂つたような氣持になつて、その宿屋の門を出た。『よおし、あいつめ、ステッキで殴り殺してやるぞ、犬つころみたいに脳天をがぁんとな！』そんな文句が頭にちらつくのだった。そして彼は長いことその文句をくり返しくり返し吐いていた。

彼は辻馬車をやとつて、ポゴレリツェフの家をめざした。そろそろ郊外へかかろうというころ、溝河にかかった小橋の袂の四辻で、馬車は停車を餘儀なくされてしまつた。その狭い橋を、長い葬式の行列が、やつとすり抜けるようにして渡つているところであつた。橋の向う側にもこちら側にも、幾臺かの馬車が犇めき合つて、葬列の渡り終えるのを待つていた。歩行者もやはり堰かれていた。なかなか立派な葬式で、お棺にしたがつた馬車の列は颯々とうち連なつていた。ところが驚いたことには、それらの馬車の一つの窓から、パーヴェル・パーヴロヴィチの顔がいきなりヴェリチャーニノフの眼に飛びついて来たのである。もしこの時パーヴェル・パーヴロヴィチが、馬車の窓から身を乗り出して、にやりと頷いて見せなかつたなら、彼は自分の眼を信じ

なかつたに相違なかつた。うち見たところ、彼はヴェリチャーニノフが眼にとまつたことをひどく喜んでゐるらしく、馬車のなかからおいでをしはじめたほどであつた。ヴェリチャーニノフは馬車を飛び降りると、人垣を無理やりに掻き分け、警官の制止を振りきつて、パーヴェル・パーヴロヴィチの馬車はその時はもう橋にかかつていたにもかかわらず、その窓のところへ走せ寄つた。なかにはパーヴェル・パーヴロヴィチが一人いるだけだつた。

「こりやどうしたことですか！」とヴェリチャーニノフはどなりつけた。「なぜあなたは來なかつたんです？ なんだってこんななかにいるんです？」

「義理を果たしてるところですよ。——まあお静かに、そうがなり立てないで——義理を果たしてるところなんですから」とパーヴェル・パーヴロヴィチは面白そうに眼を細めて見せながら、くすくす笑いだした。「莫逆の友ステパン・ミハイロヴィチの哀れ無常なる亡骸を、こうして送つて行くところですよ。」

「ばかばかしい！ ええ、この飲んだくれのへべれけ先生！」ヴェリチャーニノフは一瞬、われにもあらずたじろいだが、すぐまた前より一そのうの大聲でどなり立てた。「さあ降りるんです、そして私の車に乗りなさい、さあすぐ！」

「そりやできませんな。何しろ義理を……」

「引きずり出しますぜ！」とヴェリチャーニノフは咆えたてた。

「そんなことをしたら悲鳴をあげますよ！ 悲鳴をね！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、

相變らず面白そうにくすくす笑いながら應酬した。まるで遊戯でもしているような調子だつたが、そのくせ座席の向うの隅へ身をにじり退さかつた。

「さあ危い、危い、轢き殺されたらどうする！」と警官が叫んだ。そう言われて気がついてみるとちやうどこの馬車が橋を渡りきつたところだつたが、その時誰かよその人の馬車が行列を無理やりにつつ切つたため、大騒ぎが持ち上がったのである。ヴェリチャーニノフがやむを得ず飛びすざると、たちまちのうちにいろんな馬車や群衆が割りこんで來て、彼はぐんぐんと押しへだてられてしまつた。彼はぺつと唾を吐くと、そのまま自分の馬車へ引き返した。

『まあいいさ、どうせあんな男を連れて行くわけにはゆかんからな！』と、驚愕のあまり胸騒ぎのまだ収まらぬ状態で、彼はそう考えた。

やがて彼がクラーヴヂャ・ペトローヴナに會つて、マリヤ・スイソエヅナから聞いた話や、今しがたの葬列のなかでの奇怪な邂逅のことを傳えると、夫人はすっかり物思いに沈んでしまつた。「私、あなたのが心配ですわ」と彼女は言つた。「あなたはそこかたとの關係を一切お絶ちにならないといけませんわ。それもなるべく早いほうがよござんすわ。」

「なあに、飲んだくれの大たわけですよ、それだけの話ですよ！」とヴェリチャーニノフは、むつとしてやり返した。「そんなことをしたら、私があいつを怖がつてることになりまさあね！ それにリーザというものがあるのに、どうしてあいつと關係を絶つなんてことができましょう。少しはリーザのことも考えてくださいよ！」

一方リーザはというと病氣で寝ていたのである。昨日の晩方から熱が出たので、今朝は夜が明けるのも待ち兼ねるようにして都へ急ぎの使を出して、ある有名な醫者を迎えにやった。その醫者の到着を待っているところなのであった。またもや降って湧いたこの出来ごとに、ヴェリチャーニノフはもうすっかり滅茶苦茶になってしまった。クラーヴヂヤ・ペトロヴナは彼を病床へ案内した。

「わたしは昨日、じつとあの子を見ていましたんですけどね」と彼女はリーザの部屋の前で立ちどまって、相手に注意するような口調で言いだした。「傲慢な氣むずかしい子ですことね。あの子は私どものところにいるのが恥かしいんですよ。それにまた父親にほいと棄てられたことがね。それが今度の病氣のもとだと私は思いますわ。」

「棄てた？ なんだってあなたは、棄てたなんてお考えになるんです？」

「だってそうじゃありませんの、あの子をこうして見も知らぬ家へ、それもあなたのよう……やっぱり見も知らぬ人同然の方、というより今のような關係にあるかたと一緒に、平氣で手離してよこすんですもの……。」

「だがあの子を連れ出したのはこの私なんですよ、私が力づくで連れ出して来たんですよ、私には別に不都合があるとも……。」

「まあまあ、あなたはまだそんなことを！ そこに不都合があることくらい、年端もゆかぬあのリーザだって、ちゃんと見抜いていますことよ！ 私の考えでは、あの人はずでここへ寄り

つきもしまいと思えますわ。」

ヴェリチャーニノフが一人で来たのを見ても、リーザは別に驚きもしなかった。彼女はにっこり悲しげな微笑を洩らすと、そのまま熱にほてった自分の頭を壁のほうへ向けてしまった。ヴェリチャーニノフのおずおずした慰めの言葉にも、明日はきつとお父さんを連れて来るからという熱心こめた約束にも、彼女は一言も返事をしなかった。病室を出ながら、彼は突然聲をあげて泣きだした。

醫者は夕方になってやっと到着した。患者の診察が済むと、彼は最初のひとことでまず一同の度膽を抜いてしまった。こんな手遅れにならんうちになぜ早く呼んでくださらなかったか、と咎めるように言い放ったのである。それに答えて、つい昨夜發病したばかりだと説明してやっても、彼は初めのうちは本當にしなかつた。

「まあ今夜の模様次第と見るほかはありませんな——とどのつまり彼はそう斷定して、醫者としての注意を興え終ると、明日はなるべく早く伺いますと言ひ残して歸って行つた。ヴェリチャーニノフはなんとしても今夜はここに泊りたかつた。ところが、さつきあんなことを言つたクラーヴヂヤ・ペトロヴナが、今度は自分のほうから、『あの人非人ひとぢなを引つ張つて来る試み』をもう一度やって御覽なさいと言ひだして、どうしてもきかなかつた。

「もう一度ですと？」と、のぼせあがっているヴェリチャーニノフは鸚鵡返しに訊き返した、「よしきた、今度こそはふん縛つて、この手で引つ擔いで来てお目にかけますよ！」

パーヴェル・パーヴロヴィチをふん縛つてわが手で引つ擔いで來るといふ想念は、たちまちのうちを、いても立つてもおられぬほど、はげしく捉えてしまった。

「今じゃもう、あの男に對して濟まんなんて氣持はこれっぽかりもありませんよ、これっぽかりもね」と彼は、クラヴィヂヤ・ペトロヴィチに別れの挨拶をしながら言うのだった。「昨日私がここでした、あの卑屈なめそめそした言葉は、みんなもう打消しです！」と彼はぷりぷりしながらつけ加えた。

リーザは眼をとじて臥せていた。どうやら眠っているらしく、持ち直してきたように見受けられた。歸る前にせめて着物の端にでも接吻しようと思つて、ヴェリチャーニノフがそつと彼女の頭のほうへ身をかがめた時、——彼女はまるで待ち受けていたように不意にぼつちり眼を見開いて、こう囁くように言った。

「あたしを連れてつて。」

それは物靜かな、悲しげな願いで、昨日の興奮などは跡かたも見えなかつたが、また同時に、とてもこの願いが聴き届けてはもらえないことを自分でも深く信じているような、一種あきらめのひびきがこもっていた。そしてヴェリチャーニノフが絶體絶命の氣持で、それはとてもできない相談だということの説きにかかるが早いか、彼女は黙つて眼をとじてしまい、まるで彼には耳も目も借さないといったふうに、それっきりひとことも口を利かなかつた。

馬車が町へはいると、彼は眞直ぐにポクローフスキイ・ホテルへ乗りつけると命じた。もう夜

の十時だつたが、パーヴェル・パーヴロヴィチは宿にいなかった。ヴェリチャーニノフは、病的にじりじりしてくる心を無理に抑えて、廊下を行きつ戻りつしながら半時間はたつぷり待った。マリヤ・スイソエヅナは見るに見兼ねて、パーヴェル・パーヴロヴィチは夜の明けるまではとても歸つて來まいと斷言する始末だつた。「じゃ俺も夜明けに出直して來るとしよう」とヴェリチャーニノフは決心してしぶしぶわが家へ歸つた。

ところが、まだ自分の部屋にはいらぬ先にマーヴラの口から、昨夜のお客が十時前からお歸りを待つていらつしやいますよと聞かされた時の、彼の愕きはどうかだつたらう。

「私どものところでお茶を召上がつて、——それからまたお酒を買いにおやりになつて、そのお代に青札を一枚くださいましたよ。」

九 幽 靈

パーヴェル・パーヴロヴィチはさも居心地よげにお神輿を据えていた。昨夜と同じ椅子に腰をおろして、くわえ煙草としゃれながら、酒壺を傾けて、四杯目の最後のグラスを満たしているところだつた。土瓶と飲みさしのコップが、卓上のすぐ手ちかのところに置いてある。眞赤に色あげのできた顔は、柔和そうにてらてらしていた。おまけに夏場らしく上着をぬいで、チョッキ一つになつていた。

「いやあこれは、つい御交誼にあまえましたな！」と彼はヴェリチャーニノフの姿を見ると、上着をひっかけようと急いで席を立ちながら、大聲をあげた、「東の間の歡樂をひとしおならしめんとて、かくは上着をとり……」

ヴェリチャーニノフは物凄しい劍幕でつめ寄って來た。

「あなたはまだ正氣が残っていますかね？ まだ話が通じますかね？」

パーヴェル・パーヴロヴィチはいささかどぎまぎした。

「いやその、まだそれほど……。亡友をしのんで一杯やりましたがね、しかし——まだそれほどでも……。」

「私の言うことがわかりますかね？」

「それを伺いにかくは參上……。」

「よろしい、じゃあ、のっけからびしびしやりますがね、まず第一にあんたは——碌でなしだ！」とヴェリチャーニノフは吐き出すような聲でどなりつけた。

「のっけからそれじゃあ、おしまいはどうなりますかね？」とパーヴェル・パーヴロヴィチはひどく恐れをなしたらしく、情ない聲で異議の申したてにかかったが、ヴェリチャーニノフは耳も借さずにどなりたてた。——

「あなたの娘さんは死にかけてるんですよ、病氣なんですよ。あんたはあの子を棄てたんですか、棄てたんじゃないんですか？」

「死にかけてるって、そりやまた本當ですか？」

「病氣も病氣、極めて重態なんです！」

「いや多分、例のちよつとした發作で……。」

「馬鹿なことを！ あの子はき・わ・め・て・重態なんです！ それでなくてもあなたは當然、顔を出すべき……。」

「お禮を申しあげにね、おもてなしにあずかった御禮を言上にね！ もとより百も承知でさ！

アレクセイ・イヴァーノヴィチ、まあきいてくださいよ」と言いざま、彼はいきなり兩手でもって相手の手首をしっかりと捉え、酔漢特有の感動にあやうく涙をこぼさんばかりのいで、まるで謝罪でもするような調子で叫びたてた、「アレクセイ・イヴァーノヴィチ、まあお静かに、お静かに！ よしんばこの私がですな、くたばったにしたところで、たった今、ぐでんぐでんのままネヴァ河へはまりこんだにしたところで、——目下の局面からみて別に大したこともないじゃありませんか？ それにまた、ポゴレーリツェフさんのところなら、行こうと思えばいつだって行けるんですし……。」

ヴェリチャーニノフははつと気づいて、腹の蟲を少し抑えつけた。

「あなたは酔っておいでですよ。だから私には、あなたがそんなことを仰しやる意味が呑みこめないのです」と彼は嚴かな口調で言いだした、「あなたとつくり話しあうためなら、私はいつ何時でも、時間を割く用意がありますよ。それもなるべく早くとさえ思ってるんです。……だ

から現に、今もあなたのお宿へ……。いや、それはそうと今日は駄目ですよ。そんなことよりまず、私はもう斷乎たる手段をとることにきめたんです。つまり、あなたは今晚ここに泊るんですよ！明日の朝になったら、私はあなたを連れてあの家へ行きます。斷じて放さんですよ！……とまたもや彼は喚きたてはじめた、「あなたを縛り上げて、両手で抱えて持つて行くんだ！……」ところで、その安樂椅子で寝られますか？——と息を切らしながら彼は、自分が寝ることになっている安樂椅子のちようど反對の壁際にある、幅のひろいふかふかした安樂椅子を指した。

「寝られる段じゃありませんよ、私はもうどこでも……」

「どこでもじゃありません、その安樂椅子になさい！さあ受けとつてくださいよ、そうら敷布、それから夜着、枕と（といった物をヴェリチャー・ニノフは戸棚から引きずり出して、おとなしく手を差し出しているパーヴェル・パーヴロヴィチめがけて、大急ぎでぽんぽんほうり出した）——すぐ床をとるんです、床・を・と・るんですよ！」

寢道具を抱えさせられたパーヴェル・パーヴロヴィチは、醉眼朦朧とした顔に酔いどれに附きもののだらだらした微笑を浮かべて、さも決心し兼ねたといった様子で部屋の真中につつ立っていた。が、ヴェリチャー・ニノフの二度目の大喝にあうと、急にそそくさと全速力で仕度にとりかかり、卓子を横へ片寄せ、ふうふういいながら敷布をひろげて敷きはじめた。ヴェリチャー・ニノフはそばへ寄つて来て手傳つてやった。客のびっくり仰天した有様とその従順な様子に、彼は幾分溜飲を下げたのである。

「その杯を乾して、横におなりなさい」と彼はまた命令をくだした。命令せずにはいられない氣持だったのだ。「一體その酒はあなたが買いにやっただんですかね？」

「ええ、私が買いに……。私はその、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、とてももうあなたが買いにやつてはくださるまいと思つたもんでね。」

「それを御存じなのは結構。だがついでのことに、その先まで心得て置いて頂きたいもんですね。もう一度くり返して申し上げときますがね、私はもう斷乎たる手段をとることにきめたんですよ。つまりですな、あんな道化芝居の眞似なんかすると、今度こそは承知しませんよ。昨夜みたいな酔つたまぎれの接吻なんか、もう我慢はしませんよ！」

「そのことなら、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、私だつて心得てますよ。あんなことはただの一度しか許されないことだからいはいね」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、にやりと笑つた。この返事を耳にすると、部屋のなかを大股に歩き廻つていたヴェリチャー・ニノフは、莊重といつてもいい程のまじめくさつた顔つきで、急にパーヴェル・パーヴロヴィチの前に歩をとめた。

「パーヴェル・パーヴロヴィチ、ごまかさずに本音をお吐きなさい！あなたは利口なただ、これはくり返し認めることを躊躇しません。だが、はつきり申しあげますがね、あなたは道を踏み違えておられるんだ！思つたことをまっすぐに口になさい、思つたことをまっすぐに行動にお移しなさい。そうなつたら私も、お望みのことはなんなりとお答えしますよ——これは確とお約束します！」

パーヴェル・パーヴロヴィチは例のだらしない微笑でにやりと笑った。それを見ただけでヴェリチャーニノフは赫となつてしまった。

「やめなさい！」と彼はまたどなりだした。「胡麻化そうたつて駄目ですよ、あんたの腹の底は見透しなんだ！もう一度いいますがね、私は何なりと喜んでお返事をするつて、ちゃんと約束したんですよ。つまりお返事のできるのならどんなことでも申し上げて、御満足のお返事にするつもりなんです。いや、それどころか、お返事のでき兼ねることだつて、申しあげる決心なんですよ！ああ、この私の氣持がわかつてくだすつたらなあ……」

「あなたにそれまで御親切がおありだとすれば」とパーヴェル・パーヴロヴィチは用心しい彼のそばへにじり寄つて來た、「差しあたつて伺いたいののはこれですよ。昨夜あなたは『肉食型』とやらいうことを仰しゃいましたな、私はあれにすこぶる興味を覚え……」

ヴェリチャーニノフはぺつと唾を吐いて、前よりも早足に、再び部屋のなかを歩きはじめた。

「駄目ですよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、そう素氣なくしないでくださいよ。じつはあれにすこぶる興味を覚えましてね、それでわざわざ御高説を拜聴に伺つたようなわけなんです……どうも私は口不調法でいけません、まあお許しを願いますよ。じつはね、その『肉食型』という奴と、も一つ『草食型』という奴のことは、私も雑誌の評論欄で讀んだことがありましてね——それを今朝ひよいと思ひ出したわけなんです……ただちよいと忘れていたんで。いや正直に言つと、讀んだ時はわからなかつたんですな。そこで私が一つはつきりさせて置きたいのは、あ

の亡くなつたステパン・ミハイロヴィチ・バガウトフですな、——あの男は一體『肉食型』だつたんでしようか、それとも『草食型』のほうでしょう？どつちの部類へ入れたもんでしょうな？」

ヴェリチャーニノフは相變らず黙りこくつて、大股に歩きつづけていた。

「その肉食型というのはですね」と彼は憤然としていきなり立ちどまつた、「昨夜のあなたが私と一杯やられた時のような、再會の歡びを表するために假りにバガウトフと『ジャンパンの杯をあげる』ことになる、相手の杯にひと思ひに毒を盛つちまうようなてあいのことを言うんですよ。そうしたてあいは、あんたがさつきなすつたような、相手のお棺を墓地まで見送るなんて手ぬるい眞似はしないもんですよ。ええ思つても胸くそが悪くなる——一體あなたは、どんな汚らわしい、とても明るみには出せないような、祕密な下ごころがあつて、葬式へなんぞ出かける氣になつたんです！そんな道化芝居は、ただもうあんた自身の面汚しになるだけなんだ！あんた自身のね！」

「そりやまつたく仰しゃるとおりで、葬式へなんぞ行く手はなかつたんですよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは合槌をうつた、「だがあなたはまた、なんだつてそう私のことを……」

「また、そういうてあいはですね」とヴェリチャーニノフは相手に構わず、かんかんになつて喚きたてた、「愚にもつかんことを考え出して獨りでよくよしたり、善悪正邪の總ざらいをやらかしたり、自分の受けた恥辱を、まるで學科を暗誦するみたいにいづまでもうじうじ考えたり、

やきもきしたり、道化てみたり澄ましてみたり、他人の頸つ玉へしがみついたり、——あつたら自分の大事な時間をそんなことで潰してしまふような、そんな人間じゃありませんよ！ ときに、あなたが首をくくろうとしたって話は、あれは本當ですか？ え、本當ですか？」

「酔つたまぎれにあるいは口走つたかも知れませんがね——覺えがありませんな。だがね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、どうもその毒を盛るといふやつは、われわれには少々うつりが悪いですなあ。こうみえても歴乎とした官吏だなんてことは二の次にしても、——何しろ私には資産もあるんですし、且つはまた再婚したいとも思つてるもんでしてね。」

「それに、そんなことをすりゃ赤いおべも着なきやならんし。」

「そうそう、そのとおりでさ。今どき裁判所でもいろいろと情狀酌量の餘地を考えてくれるとはいへ、やっぱりどうも不愉快なことには違ひないですからなあ。それはそうと、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、飛びきり滑稽な逸話を一つお聞かせしましょうか。さつきあの馬車のなかでふいと思ひ出しましてね、あなたに聞いて頂こうと思つてたんですよ。ところが今あなたが『他人の頸つ玉へしがみつく』つて仰しやつたもんで、圖らずもまた思ひ出した次第ですがね。あのセミヨーン・ペトロヴィチ・リフツォフ、多分覺えておいででしょうな、あなたがTにいらした時分よく私もへやつて來た男ですよ。さてこの男の弟でね、これもやはりちやきちやきのペテルブルグっ兒でしたが、V縣の知事のもとに勤めていたのがあつたんです。これもやはりいろんな點で鳴らしていた男でしたがね。ある日のことです、さる集りの席上、滿座の婦人はいわず

もがな、自分が思いをよせている當の婦人の面前で、この男がゴルベンコという大佐とちよつとした口論をやらかしたんです。そして相手からひどい侮辱を受けたと思つたが、じつとそれを腹におさめて、表にあらわさなかつたんですな。と、さうこうするうちに、そのゴルベンコが、例の彼の意中の婦人を横取りしましてね、とうとう求婚するという始末になつたものです。さあそこで、どうなつたとお考えですな？ くだんのリフツォフはですな、誠心を披瀝してゴルベンコと親交を結んだんですよ、すつかり仲直りをしてしまつたんです。そののみか、——結婚式には自分から無理やり新郎の介添人を買つてでましてね、婚禮の冠を捧げもつ役を引き受けたものです。さて新郎新婦がその冠の下をくぐつて式場へ來着しますとね、奴は祝辭と接吻をやり、ゴルベンコのそばへ寄りましてね、それがどうかという縣知事をはじめお歴々の居並ぶ前でですな、自分もちゃんと燕尾服を着こんで髪を捲き縮らせた姿ですな——やにわにぐさりとばかり新郎のどてつ腹へ小刀を突きたてた——ゴルベンコはひとたまりもなくどうと倒れるつて騒ぎなんですよ！ それに、わざわざ新郎の介添役を買つてでたうえでの話なんだから、いやなんともはや破廉恥きわまることですよ！ ところがまだそれだけじゃないんです！ ここが大事なことですがね、ぐさりとやつてしまうと、今度はいきなりそこらじゅう駆け廻つてね、『ああとんだことをしちまつた！ ああ俺は大變なことをしちまつた！』つてね、おいおい泣きだして齒の根も合はん始末なんですよ。おまけに誰かれの見境もなく、婦人たちの頸つ玉へまでしがみついてね、『ああ、大變だ！ ああ、とんだことをしちまつた！』——へ、へへ！ まつたく笑つちまいます

したね。ここに哀れをとどめたのはゴルベンコですが、これは間もなくもとのからだになりましてたよ。「なんだってそんな話をなさるのか、私には合點がゆきませんな」とヴェリチャーニノフは峻しく眉をひそめた。

「いやつまり、その小刀でぐざりとやったところをお聴かせしたいと思ひましてね」とパーヴェル・パーヴロヴィチはくすくす笑いだした。「何しろ恐怖のあまり禮儀も何も忘れちまつて、知事閣下の御面前で婦人の頸つ玉へしがみつくような男ですから、これはもう仰しゃるような型じゃなく、決つ垂れの大供にすぎませんさ。——だがね、とにかくぐざりとやってのけた、一念を通したのですな！ 申しあげたかったのはそこだけですよ。」

「ええ、さつさと出て失せろ！」と、何物かが胸のなかの堰を切りでもしたように、まるで別人のような上ずった聲で、ヴェリチャーニノフは急に喚きだした。「ええ出て失せろ、その人の腹を探るような小きたない話と一緒に、とつとと出て失せろ。第一あんたからして、縁の下の鼠みたいな小きたない根性なんだ——この私を嚇かそうと企らんだな——子供ばかりいびりやがって——この下種男め——卑劣漢、卑劣漢、この卑劣漢！」彼はわれを忘れて、一言ごとにはあは息をきらしながら、喚きたてた。

パーヴェル・パーヴロヴィチは俄かに引攀つたような顔になった。一時に酔いもさめて、唇はわなわなと顫えだした。

「それはこの私のことですか、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、あなたが卑劣漢とお呼びになるのは、あなたがこの私をそうお呼びになるんですか？」

その間にヴェリチャーニノフは早くもわれに返っていた。

「いやこれは、いつでもお詫びしますよ」と彼はちよつと間を置いて、暗い沈思のうちに答えた。「だがそれは、あなたのほうが今この瞬間から、思ったことをまっすぐに言動にうつすと、約束される場合に限りませぬ。」

「私ならそういう場合、無條件で謝罪しますがねえ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。」

「よろしい、じゃそうしましょう」と言つて、ヴェリチャーニノフは再びちよつと沈黙した、——「どうも濟みませんでした。ところでこれはお断りして置きますがね、パーヴェル・パーヴロヴィチ、こうなった以上私は、今後はもう一切、あなたに對して債務があるとは認めませんよ。それも、單に今しがたの問題についてばかりじゃなく、一切の事柄について言うのです。」

「いいですとも。なんですか、認めるとか認めないとかいつて？」パーヴェル・パーヴロヴィチはにやりと笑つたが、しかし眼は足もとに落としていた。

「あなたがそう仰しゃってくださいるなら、なおさら結構です、一そう結構ですよ！ さあそのコップを空けてお寝みなさい、とにかく今夜はお歸しはしないんだから……。」

「いやお酒はもう、……」とパーヴェル・パーヴロヴィチはややたじろぎの色を見せたが、それでもやはり卓子へ歩みよつて、先刻から注ぎつ放しになっていた最後の一杯を乾しにかかった。もうその前にさんざひっかけていたらしく、杯を持つ手はしきりと顫えて、酒を床やルバーシカ

や、チョッキのうえへだらしなくこぼすのだったが、とにかく最後の一滴まで乾すには乾した。——まるで飲みさしのままでは置けないとも思っているふうだった。そして空っぽの杯を恭しく卓子のうえに置くと、おとなしく自分の寢床の前へ行つて着物を脱ぎはじめた。

「だがやつぱり……泊らないほうがよくはないでしょうかね？」と彼は、なんと思つたか急にそんなことを言いだした。もう片っ方の靴はぬいで、それを両手に抱えている。

「いや、斷じてよかありません！」まだ根氣よく歩き廻つていたヴェリチャーニノフは、彼のほうを見やらずに吐き出すように答えた。

相手は着物をぬいで横になった。それから十五分もするとヴェリチャーニノフも寢床にはいつて枕もとの蠟燭を吹き消した。

彼はうとうとと不安な眠りにはいりかけた。何かしら新らたなことが、不意にどこからとも知れず湧いて出て、問題をますますこんぐらかしてしまつた——それが今彼の胸を騒がせているのであつた。しかも同時に、どうしたわけだか、この自分の不安な氣持が妙に氣恥かしいのであつた。そのうちにやつと深い眠りが訪れたかと思うと、不意に、何やら衣ずれのような音がして、彼の眼をさましてしまつた。彼は突嗟にパーヴェル・パーヴロヴィチの寢床のほうを振り向いて見た。部屋のなかは眞暗だつた（厚地の窓掛がすっかりおろしてあつたのである）が、彼の眼には、パーヴェル・パーヴロヴィチが横になつてはいずに、半身をおこして、寢床の端に腰かけているように思われた。

「どうしたんです！」とヴェリチャーニノフは呼びかけた。

「なんだか影のようなものが」と暫くたつてから、ほとんど聞きとれぬほどの聲で、パーヴェル・パーヴロヴィチが言つた。

「なんですと、どんな影です？」

「あすこに、向うの部屋の、戸口のところに……なんだか幽霊みたいなものが見えたんです。」

「幽霊つて、誰のです？」と暫く間を置いて、ヴェリチャーニノフは訊ねた。

「亡くなつた家内のです。」

ヴェリチャーニノフは寢床をすべり出て足を絨毯へおろすと、控室ごしに、いつもドアをあけ放しにしてある向うの部屋をさし覗いた。その部屋には窓掛がなく、薄い捲上カーテンだけだつたので、こちらにくらべるとずっと明るかつた。

「向うの部屋には何にも見えはしませんよ。あなたは酔つてるんです、お寢みなさい！」ヴェリチャーニノフはそう言い棄てて、横になると毛布にくるまつてしまつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは一言も口を利かずに、やはり横になつた。

「これまで一度も幽霊を見たことはなかつたんですか？」と、ものの十分もたつてから、ヴェリチャーニノフは思い出したように訊いた。

「一度なんだか見たことがあるような氣がしますよ」と微かな聲で、やはり間を置いてから、パーヴェル・パーヴロヴィチは答えてきた。

それから再び沈黙がやってきた。

ヴェリチャーニフは自分が眠っているのかいないのか、はつきりとは断定できないような状態であったが、そのまま小一時間もたったと思われるころ、またしても彼はくりりと半身をねじ向けた。何か衣ずれのような音でもして再び彼の夢を破ったのか——そのところは自分でもわからなかったが、とにかく漆のような部屋の闇のなかに、何やら白いものが、彼のうえにのしかかるようにして立っているような気がした。もつともその気配は、まだ彼の身近かに迫っているわけでもないが、もう部屋の中央には達していた。彼は寢床の端におきなおって、たっぷり、一分間じつと眼をこらしていた。

「あなたですか、パーヴェル・パーヴロヴィチ？」と彼は力のない聲を出した。突然、静寂を破って深い闇のなかにひびいたこの聲は、われながら異様なものに思われた。

返事はなかった。しかし誰かがそこに佇んでいるということは、もはや一點の疑う餘地もなかった。

「あなたなんですか……パーヴェル・パーヴロヴィチ？」と彼は前よりも大声で同じ問いをくり返した、假りにパーヴェル・パーヴロヴィチが、自分の寢床ですやすや眠っていたとしても、必ず目ざまして返事をするに違いないほどの大声だった。

だが返事はやっぱりなかった。その代り彼には、その白っぽい、辛うじて見分けがつくほどの人影が、一そう自分のほうへ近づいて来たように思われた。それから、ある奇怪なことが起こっ

た。ちょうど最前とおなじように、不意に彼の身うちで何物かが腰を切ったのである。そして彼は、満身の力をふりしぼって、ほとんど一言ごとに、はあはあ息を切らしながら、とてつもない狂氣じみた聲で喚きたてはじめた。

「ええ、この酔いどれの大たわけめ——この俺がそんな嚇しに——乗るだろうなんて——よくものめのめと——思いつきやがったな——そんなら俺は壁のほうへ向いちゃってな、頭からすっぽり毛布を引つかぶって、一晩じゅうふり向いてもやらんからそう思え——そうすりゃ、そんな嚇しなんぞこの俺には屁でもないことが、貴様にだって納得がゆくだろうて——馬鹿面さげて……夜明けまでそうしてつつ立ってたつておなじことだぞ……ちえつ、唾でもくらえ……」

そう言いざま、彼はパーヴェル・パーヴロヴィチだと思われる姿が立っているほうをめがけて、おそろしい劍幕でべつと唾を吐きかけ、くるりと壁のほうへ寢返りを打つと、約束どおり毛布を頭から引つかぶって、そのままぴくりともせず鳴りをひそめてしまった。死のような静寂が襲った。その人影がまだ近よって来るのか、それとも同じ場所につつ立っているのか、彼は知るよしもなかったが、胸の動悸は刻一刻と今にもはち切れそうに高まるばかりだった。……そのままの状態で、少くとも五分間はたっぷりたつた。と突然、彼からつい二歩ほどのところで、弱々しい、ひどく哀れっぽいパーヴェル・パーヴロヴィチの聲がひびいた。

「私はね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、さがし物があつて起きたんですがね……（そして彼は必要缺くべからざるある家庭用品の名を言った）（譯者註。尿）——自分のところを探したけ

どないもんですから……そつとあなたの寢床のあたりをさぐつて見たいと思ひましてね。」
 「じゃなぜ黙つてたんです……あんなに私がどなったのに！」とヴェリチャーニノフは三十秒ほどじつと相手の氣配を窺っていたが、やがてとぎれとぎれの聲で訊いた。

「びっくりしちまつたんですよ。あなたのどなりようが物凄かつたんで……度膽を抜かれちまつたんですよ。」

「その左手の隅の、戸口の近くにある、小さな戸棚のなかです、蠟燭をつけて御覽なさい……」
 「いや、明りなんかなくても……」と隅のほうへ行きながら、パーヴェル・パーヴロヴィチは恐縮したような聲を出した、——「ねえ、ひとつ堪忍してくださいよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、すつかりどうもお騒がせしてしまつて……何しろ一時に酔いが出たもんですから……」
 しかし相手はもう何も答えなかつた。彼は依然として顔を壁へ向けたままだつたが、とうとう夜どおしその姿勢で押しとおして、ただの一度もこちらをふり向かなかつた。果して彼は、こうして先刻の約束を守つて輕蔑の情を示したいと思つたのであろうか？——じつをいうと彼は無我夢中で、自分がどうしているかも知らなかつたのである。神経の錯亂は次第に募つて、やがてはほとんど意識の溷濁状態にまで進み、彼は長いあいだ寢つかれなかつた。

あくる朝、彼が眼をさました時は、もうとつくに九時を廻つていた。まるで脇腹を小突かれでもしたように、やにわにはね起きると、寢床の上に坐り直つた。——がパーヴェル・パーヴロヴィチの姿はもはや部屋のなかにはなかつた！もぬけの空の、敷つ放しの寢床が残っているだけ

けで、本人は夜が明けるとか明けぬうちに、姿をくらましてしまつたのである。

『まずこんなことだろうと思つてたよ！』ヴェリチャーニノフは掌で自分の額をぽんと叩いた。

十 墓地で

醫者の心配は不幸にして適中して、リーザの容態は急に悪くなつた。——それは、その前夜、ヴェリチャーニノフやクライヴヂャ・ペトローヴナが思いもよらなかつたほどの、悪化のしようだつた。ヴェリチャーニノフがその朝かけつけて來た時、病人はまだ意識はあつたけれど、全身はまるで火のように熱かつた。その状態で彼の顔を見た時、彼女はにっこりと笑いかけ、燃えるような小さな手を差しのべてきたと、彼はのちになつてしきりに言い張つたものである。果してそれが事實であつたか、それとも彼が氣やすめのためわれ知らず思いついたことにすぎなかつたか——その點は彼も確かめてみる暇はなかつた。夜が更けるに及んで病人はすでに意識を失つて、その後はずっと昏睡状態をつづけた。別荘に引きとられて十日目に彼女は息をひきとつた。

それはヴェリチャーニノフにとっては、歎いても歎ききれぬ日々であつた。ボゴレリツェフ夫婦が彼の身を案じたほど、彼の歎きようはひどかつた。その惱ましい日々を大部分を、彼はこの別荘ですごした。いよいよリーザが危篤に陥つた最後の數日などは、彼は何時間もぶつとおしにそこらの隅つこに、無念無想のていで坐りこんでいたものである。クライヴヂャ・ペトローヴ

ナはそういう彼のそばに寄って来て、氣をまぎらそうとするのだったが、彼はろくろく返事をしないばかりか、時によると彼女と話をするのがいかにも苦痛らしかった。「こうしたことが、これほどまでの心の激動を」彼に與えようなどは、クライヴヂヤ・ペトロヴィチにとつてはむしろ案外なほどだった。そうしたなかでとにかく彼の氣をまぎらしたのは子供たちで、時によると彼等を相手に笑い興ずることさえあったほどである。がしかし、ほとんど一時間おきには椅子を立て、爪先だつてそつと病人の様子を覗きに行くのであった。折り折りは病人が彼の顔の見分けがついているような氣もした。彼女が恢復するなどという希望は、彼もみんなの者と同様に、爪の垢ほどもいだいてはいなかったけれど、それでもやはりリーザが臨終の身を横たえている部屋から離れようとはせず、大抵は次の間に坐りこんでいた。

とはいえ、そういうあいだにも彼は二度ばかり、急に思い立ったように非常な活動ぶりを示したこともあった。いきなりお神輿をあげて、醫者を迎えにペテルブルグへ飛んで行って、幾人かの名醫をすぐつて連れて来て、立會診断をやつてもらうのであった。二回目の立會診断は、患者が息をひきとる前の晩に行われた。その三日ほど前にクライヴヂヤ・ペトロヴィチは、今度こそはどうしてもトルソースキイさんをどこかで探し出してくる必要があると、ヴェリチャーニノフに向つてしつこく口説きたてた。「リーザに、もしものことがあつた場合、あの人がいないじゃお葬式も出せないじゃありませんか」と言うのである。ヴェリチャーニノフは、じゃ手紙でそう言つてやりましようと言葉を濁した。すると今度はポゴレリツェフ氏が、そんならいつそ自分

が警察の手を煩わして搜索してやろうと言いだす始末だった。でとうとうヴェリチャーニノフは二行ほどの通知を走り書きして、ポクローフスキイ・ホテルへ持つて行った。パーヴェル・パイヴロヴィチは例によつて不在だったので、彼はその手紙をマリヤ・スイソエヅナにたのんで歸つた。

やがてリーザは、とある夏の夕べ、落日の光とともに息をひきとつた。その時になつてやつと、ヴェリチャーニノフははつと現實にたち返つた様子だった。クライヴヂヤ・ペトロヴィチの娘の一人の祭日用にとつてあつた純白の晴着を着せて最期の装いをさせ、合掌した手には花を握らせて、亡骸を廣間の卓子のうえに安置した時、——彼はやにわに眼をぎらぎら光らせながらクライヴヂヤ・ペトロヴィチのそばへ進んで行つて、今この足で『あの殺人野郎』を引つ張つて來ますと宣言した。明日まで待つてみてはという夫人のすすめには耳も借さずに、彼はすぐさま都へ出かけて行つた。

彼にはパーヴェル・パイヴロヴィチのとぐるを巻いている場所の目あてがついていたのである。彼が前後二度もペテルブルグへ出て來たのは、何も醫者を迎へに出で來ただけではなかつたのだ。あの惱ましい日ごろ、時として彼には、死にかかつているリーザの枕頭へ父親を連れて來たら、きつとその聲を聞きつけて彼女は氣がつくだらうと、そんな考えが頭にのぼるのであつた。すると彼はもう矢も楯もたまらず夢中になつて、彼の居場所をつきとめにかかるのであつた。パーヴェル・パイヴロヴィチは相變らず例の宿に泊つてゐることにはなつていたものの、その宿へ行

つて在否を訊ねるなどは、訊ねるだけでも野暮だった。『もうこれで三日も、寢に歸つて來るところか、てんで寄りつきはしないんですよ』というのがマリヤ・スイソエヴァの返事であった。『そうかと思うと、ひょっこり酔つ拂つて歸つて來ちゃ、一時間もしないうちに、またひよろひよろ出かけて行くんでございますよ。すっかりもう燃りが戻つちまつたんですわね。』

その一方ヴェリチャーニノフは、いろんな話のあいだに、ふとボクローフスキイ・ホテルの給仕の口から、パーヴェル・パーヴロヴィチが以前よくヴォズネセンスキイ通りに巢喰ういかがわしい女たちのところへ出かけたものだ、という話を聞きこんだ。ヴェリチャーニノフは早速その女たちの巢窟を探しあてた。そして彼女たちにうんと鼻薬を利かせたり、おごつてやつたりしてみると、向うでは苦もなくそのお客のことを思い出したのであった。もちろん、それは主としてあの喪章のついた帽子のおかげであるが、思い出すが早い、たちまちにして彼に對する罵詈雑言が、彼女たちの口をついて出はじめたのには、さすがのヴェリチャーニノフも驚いた。つまりそれは近ごろさっぱり颯の道なので、女たちの怨みを買っていたわけである。なかでもカーチャという女などは、『あのパーヴェル・パーヴロヴィチならいつでも探し出したげるわよ』と、簡単に引きうけてくれた、『だってあの人ったら、この頃はずつとマーシカ・プロスターコヴァんとこに入り浸りなんだもの。それはそうと、あの人はとつても金使いの荒い人だわねえ。でね、そのマーシカっていうのは、プロスターコヴァ(譯者註。間拔)なんて苗字はもつたいなさすぎるのよ、プロフヴォーストヴァ(譯者註。な)で結構なんだわ。そりゃ酷い女なのよ、今病院へはいっ

てるけどね。あんな女なんか、私にちよいとその氣がありさえすりゃ、今すぐになんかシベリヤへ流し者にされちまうんだよ。たった一言で片がついちまうんだよ。』——そうは言つたものの、その日はとうとうカーチャにも彼の行方は尋ねあたらず、その代りまたの日を固く約束してくれたのであった。ヴェリチャーニノフが今あてにしているのは、つまりこの女の助力なのである。ペテルブルグに着いたのはもう十時だったが、彼は早速その女に口をかけて、抱え主に女の不在中の玉代を拂い、さて一緒に連れ立って搜索に出かけた。パーヴェル・パーヴロヴィチを見つけて出してきてその彼を一體どうしようというのか、何か因縁をつけて叩き殺してやる氣なのか、それともただ娘の死を告げて、埋葬には是非とも立ち會つてもらわなければ困ると伝えるために、こうして捜し廻っているのにすぎないものか——そのところは自分でもまだ見當がついていなかった。最初にあたつてみた先では、まんまと失敗してしまつた。つまりマーシカ・プロフヴォーイストヴァがつい一昨日パーヴェル・パーヴロヴィチと大喧嘩をおつぱじめてしまい、用心棒か何かで『パーヴェル・パーヴロヴィチがベンチで頭をぶち割られたんで』という顛末が判明したのである。手じかにいうと、長いことかかつてなかなか捜し出せなかつたのであるが、とどのつまり夜なかの二時になつて、やつとヴェリチャーニノフは、どうもそれらしいと教えられて行つたある樓うちから出てくる、その出會いがしらに、突然ぼつたりと彼にぶつかつてしまつたのだつた。

べろんべろんのパーヴェル・パーヴロヴィチを、街の淑女が二人がかりでその樓へ案内して來

るところだったのである。淑女の一人は彼の腕を支えていたが、もう一人彼等のうしろからは、恐喝漢ゆすりと思ほしい見るからに逞ましい大男がくつついて来て、あらん限りの聲を張りあげて何やら凄文句を並べ立てながら、しきりにパーヴェル・パーヴロヴィチを脅かしていた。その男がどなりたてたなかには、『さんざ人をこき使いやがって、よくも俺をこんな目に逢わせやがったな』という文句もあった。なんでも金のことがもとのいざこざらしかつた。街の淑女たちはひどく怯氣づいて、しきりに先を急いでいた。ヴェリチャーニノフの姿を目にすると、パーヴェル・パーヴロヴィチはいきなり両手を擴げて飛んで来て、今にも斬り殺されそうな聲で喚きたてた。

「あああなたか、助けてえ！」

腕つぶしの強そうなヴェリチャーニノフの姿を認めると、恐喝漢ゆすりはたちまち掻き消すように逃げ失せてしまった。勝ち誇ったパーヴェル・パーヴロヴィチは、その後姿に向って握り拳をふりかざし、何やら勝ちどきをあげはじめた。それを見るとヴェリチャーニノフは、憤然として彼の肩をひつつかんで、われながらわけも理由いわけもなしに、相手の齒が、がちがち鳴りだすほどの猛烈な勢いで、両手でもって揺すぶりはじめた。パーヴェル・パーヴロヴィチはたちまち喚きやんで、いかにも酔漢らしいどろんとした驚きの色を浮かべながら、自分の拷問者を見守るのだった。その先相手をどうしてやったらいいのかわからなかつたのだらう、ヴェリチャーニノフはぐいと相手を握じ伏せると、歩道の小柱くいのうえに腰を据えさせた。

「リーザが死んだんですぞ！」と彼は口早やに言った。

それでもパーヴェル・パーヴロヴィチは依然として彼から眼を放さずに、街の淑女の一人にからだを支えられながら小柱くいのうえに坐っていた。がそのうちに、言葉の意味がやつと呑みこめたとみえ、みるみるげっそりしたような顔つきになった。

「死んだ……」と彼は何か異様な聲で、囁くように言った。その彼が、例の酔漢に特有の厭らしい、だらだらした薄笑いを洩らしたか、それとも何かの情感に驅られてひん曲つたような顔つきになったか——その邊はヴェリチャーニノフには見別けがつかなくかつた。が、ほんの一瞬間するとパーヴェル・パーヴロヴィチは、ぶるぶると顫えている右手をやつとのことと持ちあげて、十字を切ろうとした。しかしその十字も切り終えないうちに、わななく腕はだらりと垂れてしまった。それから暫くすると、彼はそろそろと小柱くいから立ちあがって、そばの女にしがみついて、その女に凭れかかりながら、まるで自失したもののよう——そしてヴェリチャーニノフがその場にいるのも忘れ果てたもののように、ふらふらと今来た道を先へと歩きはじめた。相手はまたしてもその肩をひつつかんだ。

「おい分からんのか、この酔いどれの碌でなしめ、貴様がいないことにヤ葬式も出せんのだぞ！」と彼は息をきらせながら喚きたてた。

相手はくるりと首を振り向けた。

「砲兵の……少尉補……あの男を覚えておいでかな？」と彼は呂律の廻らぬ舌でむにやむにや言った。

「なに、なんだと？」ヴェリチャーニノフは病的にふるふるつと身を顫わして、喚き返した。「それがお前さんの捜してる親父さあね！ まあ見つけるがいいや……葬式を出すにな……」

「嘘つけ！」とヴェリチャーニノフは狂氣したように叫びたてた、「憎い一念から貴様はそんなことを……大かたそんなことでも言い出すつもりだろうと、こっちは先刻御承知なんだぞ！」

彼はわれを忘れて、その物凄い拳固をパーヴェル・パーヴロヴィチの頭上に振りあげた。もう一瞬間であわや相手を一撃のもとに打ち殺しそうな劍幕だった。街の淑女たちはきゃつと悲鳴をあげて飛びのいたが、パーヴェル・パーヴロヴィチはびくりともしなかつた。凄まじい獸的な憎悪からくる一種狂暴な表情が、彼の顔を醜く引き歪めてしまっていた。

「お手前は御存じかな？」と彼は、今までにくらべればずつとしつかりした、ほとんど酔った人とは思えぬほどの語調で言った、「われわれロシヤの……をさ？（ここで彼はとても筆にすることのできないような罵詈の言葉を發した。）——知ってるなら、さっさとそこへ出て失せやがれ！」

そう言いざま、無理やりにヴェリチャーニノフの腕を振りもいだ拍子に、よろよろつとして危く倒れそうになった。淑女たちはその彼を抱きとめて、けたたましい聲をあげながら、パーヴェル・パーヴロヴィチをほとんど引きずらんばかりにして、今度はもういっさんに逃げだした。ヴェリチャーニノフは後を追わなかつた。

その翌日の午後一時に、通常官服を着た、人品卑しからぬ中年の一人の官吏がポゴレーリツェ

フの別荘にあらわれて、自分はパーヴェル・パーヴロヴィチ・トルソツキイにたのまれた者だかと名乗り、うやうやしくクライヴヂヤ・ペトロヴィツナに、彼女名あての一通の封書を手渡した。そのなかには、三百ルーブルの金と、リーザの身柄に關する必要な證明書類を封入した手紙がはいっていた。パーヴェル・パーヴロヴィチが書いてよこした文面は、手じかではあつたが鄭重をきわめ、しかもすこぶる几帳面なものであつた。このたび閣下夫人が天涯の一孤兒に寄せられた恵み深き御同情については、ただただ感謝のほかはなく、その善行に報いることは、ただ神のみがよくするところでありましよう、と書いていた。そして漠然と、自分はただ今、極度に健康を害しているため、わが最愛の薄倅なる娘を、手ずから葬つてやるため、そちらへ出向くことは叶いませぬが、萬事はただ閣下夫人の天使のごとき御心ばえにおすがり申しあげます、とも記していた。なおそれにつづく文面の説くところによれば、封入の三百ルーブルは葬儀萬端および娘の病中の諸がかりにあてて頂きたいということであつた。萬一、またこの金額中のそこばくが餘つた場合には、故リーザの冥福のための永代供養の資にあてて頂きたく、この段つつしんで願ひあげます、とも記してあつた。手紙を別荘にもたらした官吏は、それ以上のことは問われても何一つ説明できなかった。そればかりか彼の洩らした二三の言葉によつて判ずると、彼はただ、パーヴェル・パーヴロヴィチの切なる依頼によつて、この封書を閣下夫人に親しく手渡しする役目を引き受けたにすぎないことがわかつた。ポゴレーリツェは『病中の諸がかり』という文句を見ると、ほとんど腹を立てそうになり、ともかくも父親たる者にその子の葬式を營むことを禁ずる

わけにはゆかないから、このうち五十ルーブルだけは埋葬費として申し受けるとして、残る二百五十ルーブルは即刻トルソースキイ氏に返却するがいいと裁定をくだした。いろいろ考えた擧句、クラエヴヂヤ・ペトロヴナは、その二百五十ルーブルはそのままでは返さずに、亡き少女リザヴェータ（譯者註。リザの正式の名）の魂の永代供養料として、その金額を受領した旨の菩提寺の受けとりを、彼に送りとどけることにきめた。この受けとりはやがて、すぐさま先方に渡すようにヴェリチャーニノフの手に托された。彼はそれを例のホテルあてに郵送して置いた。

葬式が済むと、彼の姿は別荘にみえなくなつてしまつた。まる二週間というもの、彼はなんの目あてもなしに、ただ一人で都會の中をさまよい歩き、それもすっかり考えこんでいるのでよく他人に突き當るのであつた。時によると、日常の最もありふれた事柄をまで忘れ果てて、幾日もぶつ通しに自分の宿の安樂椅子にのうのうと身を伸ばして、寝つづけていることもあつた。ポゴレリツェフ夫婦からは再三、迎えの使がやつて來た。その都度、彼は伺いますと約束するのだったが、すぐけろりとその約束を忘れてしまつた。クラエヴヂヤ・ペトロヴナはわざわざ自分で見舞いに出かけて來たが、あいにくと彼は留守であつた。例の辯護士もそれとおなじ目に逢わされた。しかも辯護士は、彼に報告すべき要件を抱えていたのである。つまりあのさしも行きなやみになつていた訴訟事件が、彼の手ですこぶる手際よく片づけられて、相手かたでは、問題になつてゐる遺産の極めて僅かな部分を補償として受けるだけで、示談にすることを承諾したのであつた。あとは當のヴェリチャーニノフの承認をさえ得ればよい段取りになつていたのである。

やつこのことで彼を宿でとつつかまえた辯護士は、ついこのあいだまであれほどに口喧ましい依頼人であつたこの男が、せつかくの手柄話をまるで別人のような無氣力な、冷淡な態度でふんふんと聞きながす有様に、呆れ返らずにはおられなかつた。

やがて一ばん暑氣のきびしい七月の日々がやつて來たが、ヴェリチャーニノフは季節のことなどは忘れていた。彼の悲哀は、うみきつた腫物のように、胸のなかでしきりに疼いて、絶えず苦しいほどはつきりと意識の表面に浮かび出て來るのであつた。なかでも最も大きな悩みは、リザがろくろく彼を知るひまもなく、彼がどんなにか苦しいほどの愛情を、彼女にいだいていたかを知りもせず、死んで行つたことであつた！彼の眼の前に、あれほど愉しい光明に照らされて、姿をちらりと見せた彼の生き甲斐の全部が、俄かに永遠の闇にとざされてしまつたのである。その生き甲斐というのは、あのリザがくる日もくる日も、毎時間、いや一生のあいだ、絶えず彼の愛情をわが身のほとりに感じていてくれる、ただそれだけのことにほかならなかつたのだ——それを今、彼はひっきりなしに思い返すのであつた。『どんな人間にしろ、これ以上の生き甲斐は決してありもせず、またあり得るものでもないのだ！』と彼は時折り、暗い法悦にひたりながら思い耽つた、『よしんば、まだほかに生き甲斐があるにしても、これより聖らかなやつは一つだつてありはしないのだ！』……また、『リザの愛によつて』と彼は夢想するのであつた、『俺の今までの腐れ果てた無益な生活は、すっかり浄められ贖われたに違いないのだ。これまでの安逸な、墮落した、老い朽ちた俺をいとしむ代りに、——俺はあの清らかな美しい存在いさまのを己れの生

き甲斐として、愛しはぐくむはずだったのだ。そしてあの存在のおかげで、俺の過去の一切は赦され、また自分でも過去の一切を赦すことができたはずだったのだ。』

すべてこうした意識面の想念は、常にありありと眼前一寸に焼きつけられ、しかも常に彼の魂を掻きむしりつづける亡兒の追憶と、固く結びついてあらわれてくるのであった。彼はリーザの蒼ざめた小さな顔を心に描き返し、その顔の表情の一つ一つを想いおこした。お棺のなかに花に埋もれて横たわっていた姿を、思い浮かべ、また、まだそうならぬ前、高熱のため意識を失ったまま、動かぬ眼をぱつちりと見開いていた姿を、思い浮かべるのであった。と不意に彼は、彼女がもう廣間のほうへうつされて卓子のうえに横たえられていた時、その指が一本だけどうしたわけなのか病中に動ずんでしまっていたのを、ふと発見した時の自分の氣持を思い出した。それを見た時彼ははげしい感動を覚え、その哀れな一本の指がひどく可哀そうになってきた。今すぐにもあのパーヴェル・パーヴロヴィチを捜し出して、打ち殺してやろうという考えが、初めて頭に閃いたのもじつにこのことだったので、それまでの彼は『まるで失神していたも同然』だったのである。——あの子の可憐な心臓を責め苛んでいたものは、生まれつき傲慢な氣持がはずかしめられたという事實だったのだろうか、それとも、俄かに今までの愛情を憎しみに變えて、破廉恥な言葉のかぎりをつくして彼女を面罵し、愕き怖れる彼女を嘲り笑い、擧句の果てに彼女を他人のなかへほうり出したあの父親から受けた、三カ月のあいだの苦惱の生活だったのだろうか？——こうした疑問を、彼は絶えずわれとわが胸につきつけ、無限に形を變えてくり返してみるのであ

った。『あなたは一體御存じなんですか、あのリーザが私にとって何者だったかということ？』——彼は突然、酔いっづれたトルソツキイが發したこの叫びを思い浮かべ、今にして初めて、この叫びが決してお芝居ではなくて、彼の本心の聲だったことに思い當った。そこには愛のひびきがこもっていたことを感得した。『なんだってあの人非人は、それほど可愛い子供にああも辛く當たれたんだらうか、そんなことがあり得ることだらうか？』しかし、この疑問がぎざすたびに彼は急いで、まるで拂いのけでもするように、振り棄ててしまうのであった。この疑問のなかに何かしら怖ろしいものが、彼にとつてとても堪えられぬ——しかも未解決の何ものかが、潜んでいるのであった。

ある日のこと、例によって當てもなく歩いていると、いつのまにやら彼はリーザの葬られてい

る墓地にさまよいこんで、彼女の小さな墓の前に出ていた。葬式の日からこのかた、彼は一度も墓地を訪れたことはなかった。くればくるで、餘りにも多くの苦痛を味わなければならぬと思われたので、訪れる勇氣が出なかつたのである。ところが意外なことには、彼女の墓に伏しかがんで接吻をした時、彼は急に心の軽くなるのを覺えた。晴れわたった夕暮で、太陽は西に沈もうとしていた。一面にみずみずしい緑草が生い繁って、あたりの墓標を埋めていた。遠からぬ野薔薇の茂みでは、蜜蜂がにぶい羽音をたてていた。埋葬が済んでからクライヴヂャ・ペトロヴィチとその子供たちが、リーザの墓のうえに残して行った花束や花環が、半ば葉を落としたまま、まだ同じ場所に横たわっていた。長い懊惱の日々のあとで、初めて何かしら希望に似たものが、彼

の心をいきいきと蘇えらせさせた。

『ああ、いい氣持だ!』と彼は、墓地の静寂にひたりながら澄みわたった穏やかな空に眺め入って、心にそう思った。何ものかに對する清純な和やかな信念が、満ち潮のように彼の魂をひたひたと満した。——『この氣持はリーザがおくつてよこしたのだ、今あの子は俺と話をしているのだ』——ふと彼はそう思った。

彼が墓地を出て家路についた時は、もう日はとつぷりと暮れていた。墓地の門からほど遠からぬ道ばたに、屋根の低い木造の家が一軒あって、何か小料理屋か居酒屋のようなことをしていた。あけ放しの窓のなかには、テーブルを前にした客たちの姿が、遠目にもそれと見分けられた。と突然、そのなかですぐ窓ぎわに陣どっている男が、ほかならぬパーヴェル・パーヴロヴィチのような氣がした。向うでもやはり、好奇の眼をみはりながら、窓ごしにこちらをじっと見ているらしかつた。彼がそのまま先へ歩いて行くと、まもなく追っかけて来る人の足音が聞えた。うしろから駆けて来たのは、果してパーヴェル・パーヴロヴィチであった。さつき窓から覗いていた時、ヴェリチャーニノフの面上に讀みとられた和解的な表情が、おそらく彼をひきつけ、かつ勵ましたものに相違ない。追いついて肩を並べると、彼はおずおずと微笑みかけた。がしかしそれは、もはや先頃の酔い痴れた笑いではなかつた。それどころか、彼は少しも酔ってはいないのであつた。

「御機嫌よう」と彼は言った。

「御機嫌よう」とヴェリチャーニノフも答えた。

十一 パーヴェル・パーヴロヴィチの結婚

この『御機嫌よう』を返してしまつて、彼はたちまちはつと自分に驚いた。今この男に出くわしても、なんの憎悪も浮かんではこないばかりか、今この瞬間における自分の彼に對する感情のなかには、何かしらこれまでとはまったく異つたもの、そのみならず新しい何物かへの願望までが動くのを感じて、ひどく意外な氣がしたのである。

「じつにいい晩ですなあ」と彼の眼色をじつと窺いながら、パーヴェル・パーヴロヴィチは言つた。

「あなたはまだお發ちじゃなかつたんですか？」とヴェリチャーニノフは別に問いかけるつもりはなく、思い耽りながら歩みをつづけながら、何氣なくそう呟いた。

「どうも用件がのびのびになりましたね。しかし、——とにかく椅子は手に入れましたよ、しかもそれが昇進なんですか。明後日は必らず發つつもりです。」

「椅子がみつかつたんですか？」と彼は、今度は本式に問いかけた。

「それがいけませんかね？」と急にパーヴェル・パーヴロヴィチは厭な顔をした。

「いや、ただそう言つてみただけで……」とヴェリチャーニノフは相手の言葉をそらして、眉

根を寄せて、横目でちらりとパーヴェル・パーヴロヴィチの様子を窺った。ところが驚いたことには、着ている服といわず、例の喪章のついた帽子といわず、トルーソツキイ氏の風采たるや、じつに頭のとっぺんから足の先まで、二週間前とは似もつかぬほどきちんとしていた。『ただになんだってやつこさん、あんな居酒屋になんぞ坐りこんでたんだらうな?』と彼は依然として黙想をつづけた。

「私はね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、じつはもうひとつ聞いて頂きたい吉報があるんですよ。」とパーヴェル・パーヴロヴィチは再び口を切った。

「吉報?」

「私は結婚することになったんですよ。」

「え?」

「苦あれば樂あり、これが世間の常道でしてね。ところで私は、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、非常にその何したいんですがね……だが、あなたの御都合が——今夜はお急ぎらしいですね。どうやらそんな御様子がみえるもんで……。」

「ええ、急ぐんです。……それに、からだの工合もよくないんですよ。」

彼は急に、この男のそばから離れたくて堪らなくなった。つい今しがたの、何ものか新しい感情を待ちもうけるような心構えは、瞬くまに消えてしまった。

「じつはそのちよつと……。」

と言いかけて、パーヴェル・パーヴロヴィチは自分の希望を言い出さずにやめた。ヴェリチャー・ニコフは黙然としていた。

「そういうわけでしたら、いずれ後日ということに致しましょう。またお目にかかる折りがありませんでしたらですな……。」

「そうそう、いずれまた後日に」とヴェリチャー・ニコフは、相手には目もくれずに歩みつづけながら、口早やに呟いた。また暫く沈黙がきた。パーヴェル・パーヴロヴィチは依然として並んで歩いていた。

「じゃあ、またお目にかかるとしましょう」と彼はやがて口を切った。

「ではいづれまた、なにぶんとも……。」

ヴェリチャー・ニコフはまたしても気分を臺なしにされて、家に戻って来た。『あの男』との思いもかけぬ邂逅は、彼にとっては荷が勝ちすぎたのである。寢床にはいりながら、彼はもういっぺん心にくり返した、『なんだってあいつ、墓地のそばへなんぞ来ていたんだらう?』

あくる朝、彼はとうとうポゴレリツェフの別荘へ出かけることに決心した。嫌々ながら決心したのである。今は他人から受ける同情が、よしんばポゴレリツェフ夫妻のそれであっても、彼にとつては餘りにも辛いものだったのである。しかし夫妻のほうであれば、あれほどまでに彼の身を案じてくれる以上、義理にもいちどは顔を出さなければ済まなかつた。で、思いきって出かけることにきめると、不意に彼には、あのあとで初めて夫妻と顔を合わせる時、自分がなぜかひどく氣

恥かしい思いをすることだろうと、そんな気がした。「行こうか、行くまいか？」と彼は、急いで朝食をしたためながら、心のなかで押問答をしていた。と突然その瞬間に、のっそりとパーヴェル・パーヴロヴィチがはいって来たのには、さすがの彼ものけぞらんばかりに仰天してしまった。

昨夜あんな工合にして出逢ったとはいえ、ヴェリチャーニノフのほうではまさかこの男がいつかまた押しかけて来ようなどとは夢にも思っていなかったので、すっかり面くらってしまって、相手の顔を見守るばかりで、きつかけの言葉も口に浮かんでこない始末だった。ところがパーヴェル・パーヴロヴィチはさっさと自分でことを運んで、朝の挨拶を済ませると、三週間前の最後の訪問の時に腰をおろしたその椅子に、どっかり坐りこんでしまった。ヴェリチャーニノフは突嗟に、あの最後の訪問の時の有様を、じつにまざまざと思い浮かべた。不安と、それに嫌悪の情をもって、彼は客の顔をじろじろと眺めていた。

「びっくりなさいましたか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、ヴェリチャーニノフの眼色を讀んで口を切った。

全體の調子からみると、彼は昨夜よりもずっと打ち融けた様子にみえはしたものの、同時にまた、昨夜より一そうおどおどしている氣配もうかがわれた。のみならず今朝のいでたちと來たら、なんともはや珍妙極まるものであった。トルーソツキイ氏はただにきちんとした身なりをしているにとどまらず、むしろ伊達者の服装に近かったのである。——輕やかな夏の上衣、ぴっちりし

た淡色のズボン、それにおなじく淡色のチョッキ、といういでたちで、そのほか手袋といい、どろしたわけだか急に出現に及んだ金縁の折疊眼鏡（フォルディング・スペクトル）といい、眞新しい下着といい、——まったく五分のすきもなかった。おまけに香水までぶんぶんさせていた。そうした姿を全體として見ると、何かしら滑稽な感じがしたが、それと同時に見る者の心に、ある奇怪な、不愉快な思いを抱かせる何ものがあつた。

「もちろんそりゃ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ」と彼は、しきりに身をくねらせながら言葉をつづけた、「こうしてひょっくり伺ったんじゃあ、びっくりなさるのも無理はありませんや——それは私だつて思わないじゃありません。しかしね、人間同志の仲には、ある高尚なものが常に存在している、とこう私は思うんですよ。しかも私に言わせれば、それはそのままに保存されなければならぬ。ではありませんかね？　ここで高尚なものと申すのは、つまり周圍一切の事情とか、そこから生ずべき一切のごたごたなどにくらべて、一そう高尚なという意味なんです……ではありませんか？」

「パーヴェル・パーヴロヴィチ、改まった前置きなんかは抜きにして、ひとつさっさと願いたいものですな」と、ヴェリチャーニノフは顔をしかめた。

「いや、ほんのひと言ですよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチはせきこんで、「私は結婚することになりましてね、じつはこれからすぐこの足で、未來の花嫁のところへ参ろうと思つておるわけです。その家の人達もやはり別荘へ行つてますんですが、そこでひとつ折入つてお願いと申

すのは、甚だ不躰ながらあなたに、その一家の人達とお知己ちかひを願いましたら、じつに光榮至極に存ずる次第なんです。というわけでして、まことになんともはや申し兼ねる次第なんです。が（とパーヴェル・パーヴロヴィチは恭々しく頭をさげた）、ひとつ御同道をお願いできませんでしょうか……。」

「どこへ同道しろと仰しゃるんですか？」とヴェリチャーニノフは目をまるくした。

「その連中のところ、つまりその別荘へなんです。どうもまるで熱に浮かされたみたいな喋りようで、さだめし前後も轉倒、さぞお聞きづらいことでしょうが、その邊は重々お許しを願いますよ。ただあなたが厭だと仰しゃりはしまいかと、そればかりが心配で……。」

と彼は泣きだしそうな顔になって、ヴェリチャーニノフのほうを見た。

「という、この私に今、あなたのお嫁さんのところへ一緒に行ってくれと、そう仰しゃるんですね？」と相手の様子に素早く眼を走らせながら、自分の耳も眼も一切信じられずに、ヴェリチャーニノフは確かめるように相手の注文をくり返した。

「そうなんです」とパーヴェル・パーヴロヴィチは俄かにひどくおどおどしだした、「どうぞお腹立ちなく、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、決して是非ともなどと厚かましいお願いをするわけじゃないんです。ただもう七重の膝を八重に折って、こうして御懇願申しあげるだけなんです。ひよつとしたらあなたが、諾と言ってくだらんものでもあるまいと、じつはそう思いましたよ。な次第で……。」

「だいいち、そんなことは全然不可能じゃありませんか」とヴェリチャーニノフは不安そうにやり返した。

「これはただ私の切なるお願いなんです、別に他意あるわけではないんです」と相手は哀願をつづけた、「それにもまた、これにもやはり、相當の理由のあることは、決して包みかくそうとは思つとりません。ただ、その理由は後日あらためて打ち明けさせて頂くとして、今日のところはただ切にお願いを……。」

と彼は、敬意を表するため椅子から立ちあがりさえした。

「ですが、なんと仰しゃられてもそれは不可能じゃありませんか。あなただっておわかりでしょう……。」とヴェリチャーニノフも席から起ちあがった。

「なんで不可能なことがあるもんですか、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、——これを機會に、あなたを友人としてお引合わせしたいと思つていたんです。それにまた、わざわざお引合わせするまでもなく、あなたは先刻、あの人たちとはお知り合ひのはずじゃありませんかね。それ、あのザフレービニンの別荘にお供しようと申しているんです。あの五等官のザフレービニンですよ。」

「え、なんですって？」とヴェリチャーニノフは頓狂な聲をあげた。

そのザフレービニンというのは、彼が一と月ほど前、ほとんど毎日のように捜し廻つて、とうとう在宅のところを捉えることのできなかつた、あの五等官にほかならなかつたのである。判明

した事實を綜合してみると、この男が例の訴訟事件で、相手かたの利益を圖っていることは、疑いのないところであった。

「そうですね、正にそうなんですよ」と、ヴェリチャーニノフの度はずれな仰天ぶりに力を得たもののように、パーヴェル・パーヴロヴィチはにこにこした、「正にあの人なんですよ。ほらまだ覚えておいででしょう、いつぞやあなたが、あの人と一緒に歩きながら話をしていたことがありましたっけね。あの時私は、あなたがたのほうを見ながら、往來の反対側に立っていたんです。あなたのお話が濟んだら、あの人をそばへ行こうと思つて、待っていたんですよ。二十年ほど前には、一つ役所に椅子を並べていたほどの仲なんです。ただし、あなたのお話が濟んだらそばへ行こうと待っていたところは、まだ別にそんな考えがあつたわけじゃないんです。ほんの最近、つい一週間ほど前から、だしぬけにそんな氣になつたもんでして。」

「ですがね、あなたは、先方はどうして、なかなかきちんとした家庭のように見受けられますがなあ？」とヴェリチャーニノフは、無邪氣な驚嘆の色を浮かべた。

「きちんとした家庭だつたらどうだと仰しやるんです？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは佛頂面をした。

「いやもちろん、そんなつもりで言つたんじゃないがね……ただあの家へ行つて、私の見た限りでは……」

「向うでは覺えていますよ、あなたのいらしたことを、ちゃんと覺えていますよ」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは嬉しそうに話を引きとつた、「ただあなたのほうでは、あの家の者とお會いになれなかつたわけですね。ところが主人はちゃんとあなたのことを覺えていて、尊敬しておりますよ。私はあなたのことを、あの家の人たちの前で、大いに敬意をこめて吹聴して置いたんです。」

「だが、まだ奥さんが亡くなって三月にしかならないのに、一體どうしたことなんです？」

「いやそれは、何も今すぐ式をあげるわけじゃないんです。婚禮のほうは九カ月か、もしかすると十カ月のちのことになりましょう。それでちょうど一年の服喪期もおしまいになるわけですからね。そこでこれはもう保證しますがね、萬事はじつに巧い工合に運んでいるんです。何よりも有難いことには、フェドセイ・ペトローヴィチは、子供の時分からこの私という人間を知っているんですし、亡くなった妻さいのことも知っていましたし、また私の暮らしむぎのこと、世間の信用、それから相當の資産のあること、また今度はこうして榮轉することになつたことまで、知っていますんで、——何から何までが有利な條件になつているわけなんです。」

「とすると、あの人の娘さんを貰われるんですか？」

「その一部始終をひとつ詳しく申しあげるとしまししょうかね」とパーヴェル・パーヴロヴィチは嬉しそうに首をちぢめて、「失禮して煙草を一本つけさせて頂きますよ。それにどうせあなたも、今日御自身で御覽になることですから。そもそもあのフェドセイ・ペトローヴィチのような敏腕家になると、一たん世人の注目を惹きおおせさえすれば、このペテルブルグではなかなか

大した椅子に坐れるものでしてね。ところがすな、きまつた俸給と、そのほかに何やかやと——まあ臨時加俸とか、賞與金とか、追加手當とか、膳部料とか、それから一時賜金とか——そんなものを除いては何ひとつその、つまりこれと言つた資産になるような、重みのある金はないというわけなんです。なるほど見た目にはいい暮らしはしている。しかしあれで家族を抱えているとなると、どうして蓄財なんかとてもできるもんじゃありません。まあ考えても御覽なさい、フェドセイ・ペトロヴィチには娘が八人もあるのに、一人息子はまだほんの子供ときているんです。今あの人にもしものことがあつて御覽なさい、——あとはもう雀の涙ほどの遺族扶助料がおりのきりじゃありませんか。そこへもつてきて、女の子が八人ですぜ。——いやはや、まあちよいと考えてみてください、假りにその一人一人に、靴を一足ずつ買つてやるにしても、一體いくらかかりますかな！ おまけにその八人のうち五人までが、もう嫁入りざかりなんです。一ばん上のは二十四ですし——（じつに素晴らしい美人ですぜ、まああとでとっくり御覽なさい！）六番目ののは十五で、まだ女學校へ通つてゐるんです。ところで、この上の五人の娘にはお婿さんを見つけてやらなけりやならんのですし、それも婚期を逃がさんよう、できるだけ早くしなければなりません。したがつて一家の父たるもの、その娘たちを飾り立てて社交界へ出してやらなければならんわけですが、——それがまた大變な物いりでさあね。ね、そうでしょう？そこへ突如としてこの私が出現したんです。しかもただ出現したばかりじゃない、じつにあの家庭とつての最初の花婿候補者としてなんです。かてて加えてこつちの身上は、先様で先刻御承知だ

つた。というのはつまり、れっきとした財産のあることですがね。ざつとまあ、こうした次第なんですよ。」

と、パーヴェル・パーヴロヴィチはいい氣持でつづけてきた説明を結んだ。

「で、あなたはその一ばん上の娘さんに求婚なすつたんですか？」

「いやその、私は……一ばん上のじゃないんです。私が貰おうというのは、その六番目のほうなんですよ、今も申したようにまだ女學校へ通つてゐる。——」

「へえ？」とヴェリチャーニノフは思わず薄笑いを漏らした、「だつて今のお話じゃまだ十五だというじゃありませんか！」

「今は十五ですがね。しかしもう九カ月すれば十六になりますよ、十六歳と三カ月になる勘定です。別に仔細はないじゃありませんか？ もつとも、今すぐこんな話を持ち出すのもどうかと思われるので、まだ公然とは何もきり出してないんです。ただ両親との話しあいだけなんです。……何はともあれ、萬事はじつに上首尾なんですよ！」

「すると、まだきまつたわけじゃないんですね？」

「いや、きまつてゐるんです、ちゃんときまつてゐるんですよ。まあ安心してください、萬事は上首尾なんですから。」

「で、本人は知つてゐるんですか？」

「つまりそこは體裁のうえから、表向きはまだ聞かされてない振りをしてはいますがね。なあ

に知らないはずがあるもんですかね？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは嬉しそうに眼を細めてみせたが、「どうでしょう、あなたに祝福して頂けるでしょうか、アレクセイ・イヴァーノヴィチ？」と、今までは打って變つた、ひどくおずおずした調子で、彼は言葉を結んだ。

「だって何も、私なんぞの出る幕じゃないじゃありませんか？——それにまた」と彼は急いでつけ足した、「私はどうあつてもお供はしないつもりですから、したがってあなたのほうでも、先刻のお話のその理由とやらは仰しゃってくださいられないでも結構ですよ。」

「アレクセイ・イヴァーノヴィチ、まあそう……。」

「まったく、私があるたと馬車に並んで坐つて、のこのこ出向いて行けるものかどうか、まあ自分でもひとつ考えて御覽なさるがいい！」

花嫁に關するパーヴェル・パーヴロヴィチの寢言のおかげで、一時はまぎらされていたものの、この時またもや最前の嫌悪と敵意の感じが、むらむらとヴェリチャーニノフに返つてきた。もう一分もこの睨みあいがつづいたら、彼はこの厭らしい客を追い出してしまつたに違いない。そればかりでなく、彼は何かしら、自分自身にまで腹が立つてならなかつたのである。

「そこを是非ひとつ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、御一緒にお出向き願いたいんですよ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは感きわまつた聲で哀願した、「駄目ですよ、ねえ駄目ですよ。そんなことを仰しゃっちゃあ！」と、ヴェリチャーニノフの苛立たしい、同時に決然とした身振りを讀んで、彼は両手を振りながら言葉をつづけた、「アレクセイ・イヴァーノヴィチ、ねえアレ

クセイ・イヴァーノヴィチ、まあそう手っ取り早くきめちまわなさい！ どうも私の見るところでは、あなたは私のことを曲解してらっしゃるようですよ。つまりその、あなたにとつても私にとつても、——お互い同志が友だちじゃないことぐらい、私だつて重々承知しておりますものね。なんぼ私が頓馬だつても、まさかそれがわからないほどじゃありませんさ。それに、ただ今お願いしていることにしたつて、決してあなたにとつて、のちのちの御迷惑になるような筋合いのものじゃないんです。第一この私自身が、明後日はもう御當地からきれいさっぱり足を洗つて、發つて行くんですからねえ。つまり、今までのことは一切何もなかつたと同然になつちまうわけなんですよ。ですから今日のところはひとつ、ほんの物のはずみということにして、是非お願いしますよ。私はじつのところ、あなたのお心にやどる格別の感情に甘えて、謂わばそれに望みをつないで、こうして伺つた次第なんですよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。——つまり私は、最近になつて、あなたのお心のなかに目覺めてきたと想像される、あの感情のことを申すんですが……これではつきりと申しあげているつもりですけれど、それともまだ足りませんか？」

パーヴェル・パーヴロヴィチの興奮状態は極點に達した。ヴェリチャーニノフは怪訝そうに相手を眺めていた。

「つまりあなたは、この私に何かしてもらいたいことがあるんですね」と、彼は考えこみながら訊いた、「そしてひどく頑強に主張なさる。——どうもそこが私には腑に落ちないんですよ。」

もつと詳しいところを伺いたいもんですな。」

「ただもう、私と一緒ににお出むきくださるだけで結構なんですよ。そのあとで、またこちらへ戻つて来てから、何もかも洗いざらい、懺悔のつもりであなたにお打ち明けしますよ。アレクセイ・イヴァーノヴィチ、どうぞ私の口を信じてください！」

しかし、ヴェリチャーニノフはやはり断りつづけた。しかもその拒絶は、自分の胸に、ある重苦しい毒念に満ちた考えの募るのが感じられれば感じるだけ、ますます頑強になっていった。その毒念に満ちた考えは、先刻パーヴェル・パーヴロヴィチが花嫁の話をやリだした、そもそも初めから、彼の胸にきざしかけていたもので、果たしてそれが單なる好奇心なのか、それともまだ、まったく漠然としてゐる何かの誘惑なのか、そこのはさはさだかでなかつたけれど、とにかく『承知してやれ、承知してやれ』としきりに彼を唆かすのであつた。そうして唆かす聲が内心に強まれば強まるだけ、ますます彼は頑張るのであつた。彼は頬杖をついて坐つたまま、あれやこれやと思ひ迷つていた。パーヴェル・パーヴロヴィチはしきりにその彼の鼻息をうかがつて、うるさくせがむのであつた。

「よろしい、行きましょう」と彼は突然、不安そうな、ほとんど惑亂したような様子で承知すると、同時に腰をもちあげた。パーヴェル・パーヴロヴィチは有頂天になつて喜んでしまつた。

「それじゃあ駄目ですよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、今日はひとつおめかしをしてくださいよ」と彼は、着替えを済ませたヴェリチャーニノフの周りに、小躍りしながら纏わりついた、

「もう一段上等のやつを奮發してくださいよ。つまり御身分に恥かしからぬやつをね。」

『なんだってそんなことにまで口を出すんだらう、おかしな男だなあ？』と、ヴェリチャーニノフは心にそう思つた。

「ところで私は、じつはもう一つほかにお願いがあるんですがね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。一たん行つてやろうと御承諾くださったからには、ついでのことに私の引き廻し役になつてくださいよ。」

「というと？」

「早い話が、例えばこの喪章をいかにすべきか、という大問題があるんです。はずしたもんでしょうか、それともこのままつけて置いたもんでしょうかね？」

「そりゃあ御随意ですなあ。」

「いや、そこをあなたに決めて頂きたいんですよ。もしあなただつたら、どうなさいますかね？ つまりその、あなたが喪章をつけておられたらばですな。私一個の考えとしては、喪章をこのままにして置けば、つまり心の操が堅固だという證據になるでしょ、し、したがつてまた先方の受けもいはずだと、こう思つていたんですがね。」

「いやもちろん、おはずしになるほうがいいです。」

「え、もちろんと仰しゃるんですか、もちろんはずすほうがいいと？」パーヴェル・パーヴロヴィチは小首を傾げた、「いや、やつぱりこのままつけとくとしましようよ……。」

「じゃ御隨意に。」

とヴェリチャーニノフは答えて、『やっぱり奴さん、俺の言うことを眞に受けちゃいないんだ。こりゃあいい工合だわい』と心に思った。

二人は表へ出て行つた。パーヴェル・パーヴロヴィチは、めかし立てたヴェリチャーニノフの姿をさも満足そうに見こみ見するのだった。それどころか彼の顔には、今までよりも一そう深い敬意と莊重の色が浮かんでさえいるらしかった。ヴェリチャーニノフは相手の様子に呆れると同時に、自分自身についてもさらに一そう呆れ返っていた。宿の門のところに、豪勢な馬車が一臺、彼等を待ち受けていた。

「ほう、車までちゃんと用意してあるんですか？ してみると、はじめから私が行くものと思ひこんでいらしたんですね？」

「いや、車は自分のためにやとつたんですがね、しかしあなたが一緒に行つてくださるだろうとは、九分どおり信じておりましたよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、さも幸福な人間のような顔で返事をした。

「ねえ、パーヴェル・パーヴロヴィチ」と、やがて二人が馬車に乗りこんで、車が動きだしてから、ヴェリチャーニノフは何か苛だたしげな聲で笑いだした、「それじゃあんまり、私の肚のなかを一人合點なさりすぎるといふものじゃありませんかね？」

「しかし、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、だからといってそのあなたが、私のことを頼馬だ

などとはまさかおっしゃるおつもりじゃありませんまいね？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチはしみじみした聲できっぱりと答えた。

「だがリーザは？」とヴェリチャーニノフはふつと心にそう思った。が、聖い物を瀆そうとしている自分に愕然としたもののように、あわててその想念を振り拂つた。するとまた突然、自分というものがこの瞬間、じつに小っぼけな、取るに足らない物のように思われた。自分を今まで誘惑していた想念が、じつにけち臭い、實に汚らわしいものに思われてきたのである。……そしてまたしても、是が非でも一切を抛擲して、せめて今すぐにでもこの馬車から出てしまいたい、そのためもし必要とあらば、パーヴェル・パーヴロヴィチを叩き伏せたつて構わない、とそんな考えがむらむらと湧いてきた。その途端に相手が喋りだしたので、またもや例の誘惑が彼の心を俘にしてしまった。

「アレクセイ・イヴァーノヴィチ、あなたは寶石の鑑定めきぎができますかね？」

「寶石ってなんですか？」

「ダイヤですよ。」

「そんならできます。」

「贈物を持参したいと思うんですがね。ひとつ御助言を願いますよ、その必要があるでしょうか、それともないでしょうか？」

「私の考えでは、ありませんね。」

「でも、どうしても私は持って行きたいんですがねえ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは言い返した。「ただ問題は、何を買ったものかということなんです。一揃いそっくり——つまりブローチ、耳環、腕環を組みにしたものか、それともそのなかの一品だけにしたものか、どんなものでしょうねえ？」

「一體幾らお出しになるつもりなんです？」

「まあ四五百ルーブルですね。」

「ほう！」

「多過ぎますか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチはぶるつとした。

「腕環だけにするんですね、百ルーブルも出してね。」

パーヴェル・パーヴロヴィチは消げ返ってしまった。彼はなるべく金をかけて、『一揃い』そっくり買いたかったのである。で彼はさかんに駄々をこねた。とにかく二人は商店に立ち寄った。ところがどこのつまりは、腕環を買っただけのことになってしまった。それすら、パーヴェル・パーヴロヴィチの買いたいと思つた品ではなしに、ヴェリチャーニノフが指したほうだったのである。パーヴェル・パーヴロヴィチは両方とも買いたかつた。最初は腕環一組で百七十五ルーブルと吹っかけてきた店の主人が、やがて百五十ルーブルまで折れて出た時には、彼は却つて残念な氣さえたのである。向うでもし二百と吹っかけてたとしても、彼は喜んでそれだけ拂つたに相違ない。それほど金をかけたかつたのである。

「私がこんなに急いで贈物をするからつて、別に差障りはないんですよ」と、再び馬車が動きだしてから、彼はいい氣持でべらべらやりはじめた。「だって先方は何も上流でもなんでもない、ごく普通の家庭なんですからね。それに無邪氣なお嬢さんというものは、贈物が好きなものでしてねえ」と、彼は狡るそうに、しかも楽しそうにやりとして、「あなたは先刻、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、相手が十五だと私が申した時、妙な笑いかたをなさいましたっけね。ところが私は、じつにそこにと惚れこんじまつたというわけですね、——つまりその、雑記帳だのペンだのはいつている小っちゃな鞆をぶらさげて、まだ女學校へ通っている、じつにそこんとこなんですよ、へ、へ！この小っちゃな鞆が私をぽおつとさせちまつたんですよ！實際あの無邪氣という奴が私にはもう堪らん魅力なんでしてね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。それにくらべりゃ、お面の美しさなんぞは、私にとっちゃ大した問題じゃないんですよ。友だちと一緒にになって、隅のほうできやあきやあ笑い轉げてるんです。その笑うことといつたらもう、そこそこそ放圖がありませんよ！何しろあなた、仔猫が筆筒の上からベッドへ跳びおりて、そこでくるくるとまるまつた……それだけでもう大笑いなんですからねえ。おまけに新鮮な林檎の匂いにするんですよ！とところで、喪章はいつそはずしたものでしょうかねえ？」

「どうとも御随意に。」

「じゃ、はずしましょう！」

彼は帽子をぬいで、喪章を引っぱがすと、そのままぽいと窓の外へほうり出した。そして彼が

再びその帽子を、禿げあがった頭にかぶり直した時、その顔にじつに明るい希望の色が輝き出たのをヴェリチャーニノフは見逃がさなかった。

『この男は一體、本當にこれだけの人間なのかしら？』と彼はもう正真正銘の憎惡に驅られながら心に思った、『俺を引つ張り出したことには、本當になんの下心もないのかしら？ 本當に俺の好意に甘えただけのことなのかしら？』——彼はこの最後の假定に、ほとんど立腹せんばかりになって、想像をつづけた。『この男は一體何者なんだろう？ 道化か馬鹿か、それとも例の「永遠の夫」っていう奴なのか？ いやいや、結局何がなんだかわかったものじゃないぞ！……』

十二 ザフレービニンの家で

ザフレービニンの家は、先刻もヴェリチャーニノフが言っていたとおり、實際『なかなかきちんとした家庭』だったし、當のザフレービニンもすこぶる確實な地歩を占める官吏で、上長の氣受も極めてよかった。とはいえまた、先刻パーヴェル・パーヴロヴィチがこの家の収入を評して、『なるほど見た目にはいい暮らしをしているが、あれである人にもしものことがあつて御覽なさい、あとには一文だって残りはありませんやね』と言ったのも、何ひとつ掛値のない話だった。ザフレービニンは、いそいそと愛想よくヴェリチャーニノフを迎えて、昔日の『仇敵』は今やまったく友人に一變してしまった。

「いやお目出とう、ますます結構でしたなあ」と、彼は氣持のいい毅然とした顔つきで、最初からそう切り出した、「私もじつは示談にするように主張していたわけでした。しかしあのピョートル・カールロヴィチ（ヴェリチャーニノフの辯護士）は、こうしたことにかけてちやまつたく國寶的存在ですなあ。どうです？ 六萬という金が、勞せず、長引きもせず、いがみ合いもなしで、まんまとあなたの手で轉げこむんですからなあ！ 大丈夫三年は長引きそうな事件でしたよ！」

ヴェリチャーニノフはすぐまたザフレービニナ夫人にも引き合わされた。これはお人好しらしい、疲れたような顔をした、五十恰好のひどく肥満した婦人であった。やがてお嬢さんたちも、一人ずつあるいは二人ずつ手を取り合つて、しずしずと裳を引きながらあらわれて来た。ところが順ぐりにあらわれ出たお嬢さんの數はすこぶる多數にのぼつて、いつのまにやら十人か十二人ほどになつていたので、ヴェリチャーニノフはもう算えることもできない始末だった。はいって來るお嬢さんがあるかと思えば、入れ代りに出て行くお嬢さんもある、だがじつのところは、このなかには近隣の別荘友達がだぜい混つていたのであつた。一體ザフレービニン家の別荘というのは、何やら得體の知れない、しかし妙に擬つた建てかたをした大きな木造の家で、そのうえその時々建増しが目につくのがだったが、總じてすこぶる廣大な庭に臨んでいた。ところがこの庭に臨んでいるのは、この別荘一つではなくて、なお三四軒のよその別荘が、思い思いの方角から同じ庭に面していたわけなのである。つまりこの廣大な庭は、それらの別荘に共通のものなので、したがって自然この娘たちが、隣近所の別荘の娘と接近することにもなつたのであつた。

ジェリチャーニノフは最初の二た言三言のやりとりのあいだに、自分の今日の來訪があらかじめ先方で待ち受けられていたことや、自分がパーヴェル・パーヴロヴィチの親友としてこの家庭とお近づきになり來訪するということが、ほとんど鳴り物入りで宣傳されていたらしいことを、早くも見てとった。そのみならず、この道にかけてはなかなか鋭敏でもあり老練でもある彼の眼光は、まもなくその場の雰圍氣に、何かしら一種特別のものが漂っていることまで見破ってしまった。老夫婦の餘りにも慇懃をきわめるあしらいといい、娘たちの何か妙にとつてつけたような顔つきから、その着飾りようといい——（もつともちようど祭日には違いなかつたけれど）——彼の腦裡に一抹の疑念を呼び醒ますには措かないのであつた。こりやあパーヴェル・パーヴロヴィチにいっばい喰わされたぞ、もちろん正面切つてそれとは言わなかつただろうけれど、私はまあそう思いますねぐらいのところでは、やっこさん俺のことを、やれ資産のある紳士だとか、『上流社會』の、闊淋しさをかこつている獨身者だとか、だから今すぐとは行かないだろうけれど、そのうちどうかした拍子に急に『發心』して、家庭を持つ決心をおこさんものでもない、いやその可能性は十二分にあるとか、『ことに今度こうして遺産も、轉げこんだんですからねえ』とか、さんざこの連中に氣を持たせたのに相違ない。——そう思つて見ると、一ぱんうえのザフレイビニナ嬢、つまり先刻パーヴェル・パーヴロヴィチが『素晴らしい美人』という言葉で表現していた、例の二十四になるカテリーナ・フェドセーヴナに、どうやらそうした氣構えが仄見えるのであつた。彼女はその着付けといい、房々した髪の種類風變りな結び上げぶり

といい、妹たちを抜いて一段と際立って見えた。その一方、妹たちや他の令嬢たちはどうかというとうと、ジェリチャーニノフが今日お近づきに訪問して來たのは『カーチャ姉さまが目あて』なので、つまり姉さまを『見に』やつて來たのだということとは、私たちがちゃんと知つてゐるわと言わんばかりの顔をしていた。彼女たちの眼差しや、その日のうちにうっかりと口を滑らした言葉の端までが、やがてこの想像がまんざら根のないことではないことを、彼に確信させたのであつた。カテリーナ・フェドセーヴナは背の高い、それでいて勿體ないほど丸々と肥つた金髪の令嬢で、非常に愛くるしい眼鼻だちをしていた。見るからにおだやかな、おっとりした、いやむしろおっとりした氣性であるらしい。『これほどの娘が今まで賣れ残つてゐるとはおかしいな』と、さも樂しげに彼女のほうをちらちら眺めながら、ジェリチャーニノフは思はずそう考えずにはいられなかつた、『なるほど持參金もあるまいし、また間もなくぶくぶくに肥つちまうに違いないことは目に見えている。だが今のうちなら、望み手は降るほどありそうなものだがなあ……』残る妹たちもやはり相當の器量だったが、別荘友だちのなかにも二三かなりに踏める顔や、それどころかなかなかの別嬪さんもまじつてゐた。そんな品定めをしているうちに、彼は次第に楽しい氣持になつてきた。とはいえその一方にまた、ある特別の關心をいだいてこの家の鬩をまたいだ彼だったのである。

六番目のナヂェーシダ・フェドセーヴナ、これは例のまだ女學校へ通つてゐる、そしてパーヴェル・パーヴロヴィチがもらうつもりにしてゐる花嫁であるが、肝腎のこの娘は待たせるばかり

りでなかなか出て来なかった。ヴェリチャーニノフは待ち遠しさのあまりじりじりしていたが、やがてその自分自身に愕いて、ひそかに自嘲の笑いを漏らした。そのうちにやっと彼女が姿を見せると、靦面に一座はさつと色めき渡った。彼女は一人で出て来たのではなく、マリヤ・ニキイチシナという滑稽な顔つきをした、栗色髪の、すこぶるお倅おこぼで口先の達者な女友だちと連れだっていたが、パーヴェル・パーヴロヴィチがこの友だちをひどく煙たがっていることは、一目でそれとわかってしまった。一體このマリヤ・ニキイチシナは、もう二十三にも手が届こうという、人を小馬鹿にしたようなすこぶる才はじけた娘で、近所同志の家庭で小さな子供たちのお相手をつとめるお傳ついで役だったが、もうずつと前からザフレイベニンのところでは家の者も同然の扱いを受けて、ひどく娘たちのあいだに人氣を博していたのである。特に今となつては、ナーヂャにとつても無くてはならぬ人物であることは、明らかに見てとられた。ヴェリチャーニノフはそもそも最初の一瞥で、この家の娘たちばかりでなくその友だちまでが、まるで申し合わせたようにパーヴェル・パーヴロヴィチを白い眼で見ていることを看破していたが、やがていよいよナーヂャがはいって来た段になると、この娘もやはり彼を嫌っているのだと、心に断定せざるを得なかった。同時にまた、パーヴェル・パーヴロヴィチがその事實に氣づかずにいる、乃至は氣づくことを欲していないということも見てとつた。

このナーヂャが姉妹じゅうで一ばんの器量よしなことは、抗う餘地がなかった。——栗色の髪をした小娘で、野生のままの女のような顔つきをし、ニヒリストのような大膽さを具えている。

燃えるような眼ざしと、魅するような微笑と（もつともそれは屢々邪惡な色を帯びるのであったが）素晴らしい唇と齒とを持ち、細そりと、均齊のよくとれたからだつきをした、小狡るようなやんちゃ娘で、その燃え立つような表情にはすでに思春の情がたゆたつてはいるものの、同時にまだほんの子供っぽい顔つきであった。十五という年はさすがに、その歩む一步にも、その口にする言葉の端々にもあらわだった。やがての會話でわかったことだが、パーヴェル・パーヴロヴィチが初めて彼女を見た時には、實際に蠟ろうびきの布の小さな鞆たもとをぶらさげていたのださうである。しかし今では、もうそんなものはさげていなかった。

やがて腕環の贈物をする段になると、これは大失敗に終つたのみならず、不快な印象をさえ生じさせてしまった。パーヴェル・パーヴロヴィチは花嫁の御入來と見てとるが早いのか、にやにやしながら早速そのそばへ寄つて行つたのである。そして、『先日伺つた折りには、ピアノの伴奏であなたがお歌いになつたあの快い小曲ロマンのおかげで、大へんに楽しい氣持にならせて頂きました。じつはその御禮のしるしに……』といった前口上で、例の贈物を差し出したのである。ところが中途でしどろもどろになつてしまい、絶句したまま、まるで自失した人のように、差し出した腕環のケースをナヂェージダ・フェドセーヴナの手に押しつけて、つつ立っていた。こちらはそれを受けとろうとはせず、恥かしさと怒りとにさつと顔を紅らめて、兩手をうしろへ引いてしまった。そして當惑の色をありありと浮かべている母親のほうへ、彼女はきつと顔を向けると、大きな聲でこう言ったものである。

「あたし厭ですわ、ママ！」

「頂戴してお禮を申しあげなさい」と父親は、穏やかなかに厳しさを含めた聲で言ったが、彼も内心ではやはり不満だったのである。「困りますなあ、こんなことをなすっちゃあ！」と、彼はパーヴェル・パーヴロヴィチの耳もとで、訓すような調子で呟いた。

ナーヂャはしょうことなしにケースを受けとると、伏眠になって、小さな女の子の流儀で膝頭のお辭儀をした。つまり、いきなり體を沈めたかと思うと、急にまたぜんまい人形みたいにびよこんと跳ねあがる。あれをやったわけである。そこへ姉のなかの一人が腕環を拜見に近寄って來ると、ナーヂャはまだ開けてもないケースをそのまま渡してしまつて、自分を見るのも厭だという氣持を示した。やがて腕環は取りだされて、一座のものの手から手へと渡りはじめた。しかしみな黙然として拜見するだけで、なかには露骨な嘲笑の色を浮かべている者もあった。ただ一人母親だけが、まあ大そう可愛らしい腕環ですことなどと、しきりにもぐもぐと唇を動かしていた。この散々の體たらくに、パーヴェル・パーヴロヴィチが穴があればはいりたいような思ひでいるところを、ヴェリチャーニノフが助け舟を出した。

彼は行きあたりばつたり心に浮かんだことごらを手蔓にとつて、やにわに大聲を出して、さも熱心そうに喋り立てはじめたのである。そしてものの五分とはたたぬうちに、まんまと客間じゅうの視聽をさらつてしまった。彼は社交場裡の座談術を、みごとに身につけた男だったのである。それはほかでもない自分を磊々落々な人間ひとと他人に思わせると同時に、こちらのほうでも

聽手一同を自分と同様の磊々落々な人たちと心得ているといった振りをする、一種の技巧なのである。彼はなお必要と見れば、天下御免の太平樂な幸福人に化けおおせて、しかもいささかたりとも不自然の跡をとどめなかつた。また彼は話の急所急所に、ぴりりとくる辛辣な警句や、陽氣な當てこすりや、頓狂な駄洒落やを巧みに織りこむことにかけてもすこぶる心得たものであった。しかもその皮肉にしろ駄洒落にしろ、またそもその話全體にしてからが、おそらくはとうの昔から貯藏され暗記され、すでに再三實地に應用されたものに相違なかつたにもかかわらず、まったくひょいとしたはずみに飛び出したといった工合に、さり氣なくやつて退けるのであった。しかも今の場合は、彼の技巧に加うるに、自然の情の流露までが手傳つていたのである。つまり彼は、自分がそうした氣分になつており、何ものかが彼をぐんぐんとひきずつて行くのを感じていたのであった。また彼は、もう數分もすれば必らず満座の眼を己れ一身に集めて見せる、満座の耳をただ己れ一身に集めて見せる、ただ俺だけを相手に話をするようにして見せる、俺の話にだけ笑い興ずるようにして見せる——という、燃えるような絶對の信念を、身うちひしひしと感じていたのであった。

と、果たせるかな、間もなくどこかで笑い聲が聞え、だんだんに他の連中までが話に口を出すようになり、——（彼はまた、他人を話のなかに引き入れることにかけても、入神の腕前を持つていた）——やがて三人四人の話しだす聲が一どきにかち合ふまでになった。ザフレービニチ夫人の懶げな疲れたような顔つきも、今ではほとんど喜悅の色に輝きはじめた。恍惚として彼の話

に聴き入り、彼の顔に見入っているカテリーナ・フェドセーヴナの面上にも、やはりおなじ色が見てとられた。ナードヤは上眼づかいに、射抜くような鋭い眼光を彼に注いでいた。それによつて見ると、彼女はあらかじめ彼に對する反感を植えつけられていたらしかった。その様子が、ヴェリチャーニノフの雄辯にいよいよ油を注ぐことになった。例の『根性まがり』のマリヤ・ニキーチシナになるとさすがに見上げたもので、話の隙をうかがつてまんまと一丁、かなり手痛い厭がらせを彼に浴びせかけた。つまり彼女は、昨日ここでパーヴェル・パーヴロヴィチが彼のことを竹馬の友として披露に及んだという仕組みをあらかじめ考えついて、それをさも眞實らしく相手に思いこませて置いてから、彼の年齢を七つもうえに——もちろん明らさまには指さなかつたが、はっきりそれを匂わせて——見積つて見せたのである。とはいえ、そのマリヤ・ニキーチシナでさえ、しまいには彼に好意を持つてしまった。

パーヴェル・パーヴロヴィチはこの有様を見て、まったく呆氣にとられてしまった。もちろん彼にしても、この友人の有する手腕についてはまんざら知らぬわけではなく、最初のうちはその着々として收められる成果をむしろ喜んで、自分でもくすくす笑いをしたり、話に口を出したりしていたのであつたが、しかもどうしたわけだか、そのうちだんだんに物思わしい氣分に沈むようになり、やがての果てにはすっかり憂鬱になつてしまった。それは彼の惑亂した形相にありありとあらわれていた。

「いやこれは、あなたはこちらでお接待するまでもない、至極手のかからないお客様ですな

あ」と、やがてザフレイベニン老は椅子を立ちながら、さも愉快そうな面持ちでそう斷定をくだした。彼はこれから二階の書齋へ引き取ろうというので、そこには祭日だというのに、彼の檢閲を待つ幾通かの書類がすでに用意されていたのであつた。——「それをどうでしょう、この私ときたらあなたのことをつい今の今まで、このごろの若い人のなかでも一等陰氣くさいヒポコンデリー患者だと睨んでおりましたよ。——いやはや飛んだ感違ひをすることがあるものですて！」廣間にはピアノが据えてあつた。ヴェリチャーニノフは、どなたが音楽をおやりになるのかと訊ね、そしていきなりくりとナードヤのほうを振り向いた。

「あなたはたしか聲樂のほうをおやりでしたな？」

「まあ、誰が申しまして？」とナードヤは切つて返した。

「パーヴェル・パーヴロヴィチが先刻そう言つたじゃありませんか。」

「嘘ですわ。あたしのはほんのお座興よ。聲だつて悪いんですもの。」

「私だつて碌な聲じゃありませんがね、とにかく歌いますよ。」

「じゃ、あなた歌つてくださいますわね？ そうしたらあたしも歌うことにしますわ」とナードヤは眼を輝やかせた、「けど今は駄目よ、夕御飯が済んでからね。本當をいうと、あたし音楽はもう澤山なんですの」と彼女はつけ加えた、「ことにあのピアノとききたら、もうそれこそうんざりですわ。だつて朝から晩まで、みんなして弾いたり歌つたり、そりゃ大へんな騒ぎなんですもの。——どうにか聞けるのはカーチャ姉さまだけなのよ。」

ヴェリチャーニノフは得たりとばかりその言葉じりをとらえて、根ほり葉ほり聞くうちに、とどつまり姉妹のなかで眞面目にピアノの稽古をしているのは、カテリーナ・フェドセーヴナ一人ということがわかった。彼は早速彼女に向つて、一曲どうぞと所望に及んだ。彼がカーチャ姉さまに話しかけたのを見ると、一座はみるみる晴れやかな気分になつてきた。なかでも母親などは、嬉しさのあまり顔を紅らめたほどであった。カテリーナ・フェドセーヴナはにこやかに席を起つて、ピアノのほうへ歩を運んだが、俄かにこれも、われながら思いもかけず、さつと耳の根まで紅くなつてしまつた。そして自分がこんなに大きな、もう二十四にもなる立派な大人で、しかもこんなに肥つたなりをしながら、まるで小娘みたいに紅くなつたりして——と思うと、急にひどく恥かしくなつてしまつた。そうした氣持は、ピアノの前に腰をおろした彼女の顔に、はつきりと書いてあつたのである。彼女は何かヘイドンのものを弾いたが、よし餘韻は失われていたとはいへ、極めて正確な演奏ぶりを示した。しかし彼女が固くなつていたことも争われぬ事實だつた。彼女が弾き終えると、ヴェリチャーニノフは彼女の演奏ぶりをではなしに、ヘイドンを、それも彼女の弾いたその小作品のことをさかんに褒めちぎりはじめた。——すると彼女の顔にはありありと喜びの色が漂いはじめ、自分へではない、ヘイドンへの讃辭を、いかにも有難そうに樂しげな面持ちで、じつと聽いているのであつた。これには、さすがのヴェリチャーニノフも驚いて、今までよりも一その優しさと注意のこもつた眼ざしで、思わず彼女を見直さざるを得なかつたのである。「おや、これほど素晴らしい娘だとは？」——と彼の眼が語つた。そして滿座

の者は一せいにこの彼の眼色を讀みとつたらしかつた。ことにカテリーナ・フェドセーヴナ自身が人一倍……

「じつに大したお庭ですね」と、彼はバルコンのガラス戸に眼を轉じて、急に一同に向つて言いかけた、「いかがです、ひとつみなさんで庭へ出てみようじゃありませんか！」

「参りましょうよ、参りましょうよ！」と、娘たちの甲高い歡聲がそれに應じた。それはまるで、彼が一座の者のひそかに希望していたところを、ぴつたりと言ひ當てたかのようなであつた。一同は夕食までのあいだ庭を逍遙した。とうから晝寢をしい別間へ退きたく思つていたザフレービニナ夫人も、その時やはりみんなと一緒に庭へ出てひと歩きして見たくてならなかつたが、また考え直してバルコンに居残つて休息をとることにし、そのまま早速居ねむりはじめた。庭に出ると、ヴェリチャーニノフと少女たち一同との仲は、一そう親しさを増した。まもなく彼は、庭つづぎのそここの別荘から、二三人の非常に若い青年が出て来て、彼等の仲間に加わつたのを認めた。一人は大學生だつたが、もう一人のほうはまだほんの中學生(譯者註。八年制の中學校)にすぎなかつた。彼等はすぐさま自分の少女のそばへ走り寄つたし、その少女がいるからこそ彼等が出て来たことは一見して明らかであつた。さらにもう一人の『青年』は、すこぶる陰氣くさい、頭髮を蓬々にして、大きな青眼鏡をかけた二十歳ほどの子であつたが、出てくるや否やマリヤ・ニキイチシナやナーヂャを相手に、眉の根を寄せながら何やら早口にひそひそ話をしはじめた。そして彼は噁しい眼つきで、ヴェリチャーニノフのほうをじろじろ見るのであつた。打ち見たところ、